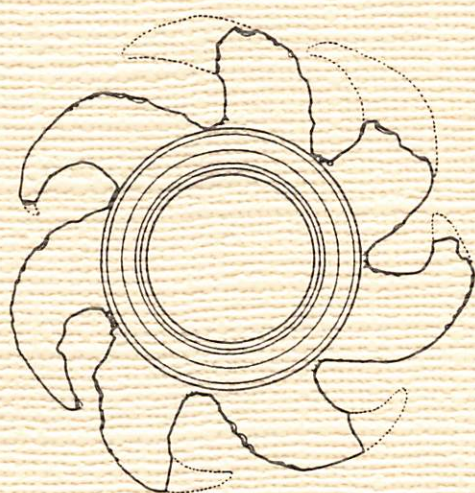


方保田東原遺跡

(2)

○大道校区公民館建設に伴う調査

○大道小学校改築に伴う調査



1 9 8 4

山鹿市教育委員会

序

山鹿市では方保田地区において、昭和56・57年と続けて大道小学校改築工事と大道校区公民館建設工事を実施しました。

工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行いましたところ、多大の成果を得ることができました。

方保田地区には紀元3～4世紀にかけての遺跡群と、4～5世紀にかけての古墳群かつ存在し、これまでの調査の結果から、3～4世紀において中九州で最も勢力をもった原始国家が存在した可能性が強いとされています。

今回の調査においても、これを裏付けるような成果が得られましたことは大変喜ばしく思っております。

発掘調査に際し、猛暑の中調査に参加された多くの方々と、調査に御協力いただきました大道小学校の諸先生をはじめ、本山建設・花籠組・近江工業株式会社に対し心より感謝の意を表したいと存じます。

最後に本報告書が学術研究の一資料として活用され、文化財の保存や愛護思想の一助となれば幸いに存じます。

昭和59年3月31日

山鹿市教育委員会

教育長 弓 掛 正 久

方保田東原遺跡

(2)

(第 V 次調査)

山鹿市立博物館調査報告書

第 3 集

1 9 8 4

山鹿市教育委員会

例 言

1. 本書は、山鹿市大字方保田字塚の本155-3番地に広がる方保田東原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大道地区公民館建築に伴って実施したものである。
3. 調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
4. 本書の執筆は、第1章を中村幸史郎、第2章は遺構を坂本重義、遺物は中村、坂本、第3章を中村があたった。
5. 本書の遺構、遺物の実測図作成は挿図目次に示すとおりである。また、製図は坂本と大森よう子があたった。
6. 本書に掲載した写真は中村が撮影し、焼付けは倉原謙治が行った。
7. 本書の編集は、原口長之の指導のもとに中村、倉原、坂本、大森があたった。
8. 表紙題字は山鹿市長中原 淳の揮毫である。

本文目次

序

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の組織	3
第2章 遺跡の環境	3
第3章 遺構と遺物	5
1 1号住居跡	5
2 2号住居跡	7
3 3号住居跡	8
4 4号住居跡	9
5 5号住居跡	10
6 6号住居跡	11
7 7号住居跡	13
8 8号住居跡	13
9 9号住居跡	14
10 10号住居跡	15
11 12号住居跡	18
12 13号住居跡	21
13 14号住居跡	22
14 15号住居跡	24
15 16号住居跡	25
16 17号住居跡	28
17 18号住居跡	28
18 19号住居跡	32
19 20号住居跡	32
20 21号住居跡	33
21 22、23、25号住居跡	34
22 24号住居跡	35
23 1号土墳墓	36

24	2号土墳墓	36
25	3号土墳墓	37
26	4号土墳墓	38
27	石蓋土墳墓	38
28	1号溝	38
29	2号溝	39
30	3号溝	41
31	E-2区Pit内	55
32	遺構に伴わない遺物	56
第4章 まとめ		58

図 版 目 次

図 版	1	1	遺構全景
		2	1～8号住居跡
		3	1号住居跡
	2	1	2号住居跡
		2	3、8号住居跡
		3	4号住居跡
	3	1	5号住居跡
		2	4～7号住居跡
		3	14号住居跡
	4	1	15号住居跡
		2	16号住居跡
		3	17号住居跡
	5	1	石蓋土墳墓露出状態
		2	白粘土除去状態
		3	石蓋除去状態
	6	1	1号溝・1～2号土墳墓
		2	2、3号溝発掘前
		3	2、3号溝完掘
	7	1	2号溝
		2	2号溝
		3	3号溝

8	1、3、9、12号住居跡出土遺物
9	12、14～16、18号住居跡出土遺物
10	22号住居跡、1、3号溝出土遺物
11	3号溝出土遺物
12	3号溝出土遺物
13	3号溝出土遺物、遺構に伴わない遺物

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図（1／10,000）（中村幸史郎作成）	4
第 2 図	遺構配置図（中村・倉原謙治・坂本重義実測、坂本製図）	折込み
第 3 図	1号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	5
第 4 図	1号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	6
第 5 図	1号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）	6
第 6 図	2号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	7
第 7 図	2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	7
第 8 図	3号住居跡実測図（中村・坂本実測、坂本製図）	8
第 9 図	3号住居跡上面出土遺物実測図（中村実測、大森よう子製図）	8
第 10 図	4号住居跡実測図（中村・倉原・坂本実測、坂本製図）	9
第 11 図	4号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	10
第 12 図	5号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	11
第 13 図	5号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	12
第 14 図	6号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	12
第 15 図	7号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	13
第 16 図	8号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	13
第 17 図	8号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	14
第 18 図	9号住居跡実測図（中村・倉原実測、坂本製図）	15
第 19 図	9号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	15
第 20 図	10号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	16
第 21 図	10号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	16
第 22 図	12号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	17
第 23 図	12号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、坂本製図）	18
第 24 図	12号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本・大森製図）	19
第 25 図	12号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本・大森製図）	21

第 26 図	12号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	21
第 27 図	13号住居跡実測図（中村・坂本実測、坂本製図）	22
第 28 図	13号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	22
第 29 図	14号住居跡実測図（坂本実測、坂本製図）	23
第 30 図	14号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	23
第 31 図	14号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	24
第 32 図	15号住居跡出土実測図（坂本実測、坂本製図）	24
第 33 図	15号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	24
第 34 図	15号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	24
第 35 図	16号住居跡実測図（坂本実測、坂本製図）	26
第 36 図	16号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	27
第 37 図	16号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	27
第 38 図	16号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	27
第 39 図	17号住居跡実測図（坂本実測、坂本製図）	27
第 40 図	18号住居跡実測図（中村・倉原、坂本実測、坂本製図）	29
第 41 図	18号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、坂本製図）	30
第 42 図	18号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	31
第 43 図	18号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	32
第 44 図	19、20号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	33
第 45 図	19号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	33
第 46 図	19号住居跡出土ガラス小玉実測図（中村実測、大森製図）	33
第 47 図	20号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	33
第 48 図	21号住居跡実測図（坂本実測、坂本製図）	34
第 49 図	21号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	34
第 50 図	22号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	34
第 51 図	22号住居跡出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	34
第 52 図	24号住居跡実測図（倉原実測、坂本製図）	35
第 53 図	24号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	35
第 54 図	24号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、坂本製図）	35
第 55 図	1号土墳墓実測図（中村実測、坂本製図）	36
第 56 図	2、3、4号土墳墓実測図（倉原実測、坂本製図）	37
第 57 図	3号土墳墓出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	38
第 58 図	石蓋土墳墓実測図（倉原実測、坂本製図）	38
第 59 図	1号溝出土遺物実測図（中村実測、坂本・大森製図）	39
第 60 図	1号溝出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	39
第 61 図	2、3号溝断面図（中村・倉原・坂本実測、坂本製図）	40

第 62 図	2、3号溝実測図（中村・倉原・坂本実測、坂本製図）	折込み
第 63 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、大森製図）	42
第 64 図	3号溝出土遺物実測図（中村実測、坂本・大森製図）	44
第 65 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、大森製図）	46
第 66 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、坂本・大森製図）	48
第 67 図	3号溝出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	50
第 68 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、坂本・大森製図）	51
第 69 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、坂本・大森製図）	53
第 70 図	3号溝出土遺物実測図（中村・坂本実測、坂本・大森製図）	54
第 71 図	3号溝出土ミニチュア土器実測図（中村実測、大森製図）	55
第 72 図	E－2区Pit内出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	56
第 73 図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	56
第 74 図	遺構に伴わない遺物実測図（中村・坂本実測、坂本・大森製図）	57
第 75 図	遺構に伴わないミニチュア土器実測図（中村・坂本実測、大森製図）	58
第 76 図	遺構に伴わない鉄器実測図（坂本実測、製図）	58
第 77 図	方保田東原遺跡遺構配置図	折込み

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和56年夏、山鹿市教育委員会社会教育課では、昭和57年度に大道校区公民館を建設する計画で山鹿市大字方保田字塚の本の近江工業株式会社敷地の一部を公民館用地として購入が進められていた。

当時、博物館では大道小学校改築に伴う緊急調査と方保田東原遺跡第Ⅲ、Ⅳ次調査（国庫補助事業）を実施しており、公民館建設予定地周辺においても多くの遺構を確認していた。

社会教育課では、遺跡の存在が明らかとなったので、調査実施の方向で検討が進められていた。

ところが、昭和57年度は市長選挙が予定されていたため、4月から5月までは暫定予算が組まれ調査費は6月議会で本予算として計上された。さらに、公民館建設は昭和57年度中に完成しなければならず、工期等を計算しても調査は9月中に終了しなければならないという時間的制約を余儀なくされたのである。

そのため、調査は公民館予定地 1,432㎡のうち、主要建設部分 550㎡についてのみ実施することとした。なお、この調査を方保田東原遺跡第Ⅴ次調査とした。

第2節 調査の経過

調査は7月12日から開始し、9月中旬には終了する計画であった。そのため、表土剥ぎに際しては機械力によることとし、調査に先立って7月8日から10日まで表土剥ぎ作業を実施した。

ところが、11日より降り始めた雨は14日まで降り続き、掘り下げた区域は約70cmの深さに水が溜まり、14日から2日ばかりでポンプによる排水を行った。しかし、その後再三にわたる集中豪雨のため、調査区内は4度満水の状態となり、発掘調査が始められたのは7月27日のことであった。

なお、この年の雨は九州各地で大きな被害をもたらし、特に長崎においては記録的なものとなった。

調査日誌

7月27日(火)本日より作業開始。毎日雨ばかりで12日からの予定が今日になってしまった。昨日午前中ポンプで排水をしていたため、どうにか作業ができる。ユンボによる表土剥ぎを行なう。

7月28日(水) 調査区域は以前、碎石置場となっていたため、表土層にクラッシャーランがくい込み、非常に堅くなっている。ユンボによる表土剥ぎが困難をきわめている。

7月30日(金) 人力と機械力による表土剥ぎを行っていたが、人力に疲れが出てきたため、今日から調査区の東端から遺構検出作業を行なう。現在住居跡2軒が見えているが、重複して

いて明確に遺構をとらえることができない。

- 7月31日(土) 調査区東端の遺構検出を行うが、明確に出ない。焼土は5箇所で見られる。
- 8月2～3日ブルドーザーとユンボで表土剥ぎ作業を行なう。調査区西端が非常に堅く、人力も総動員での作業である。
- 8月4日(水) ブルドーザーとユンボで最後の仕上げ、耕作用道路づくりを行なう。調査区では石棺と思われる石材を2箇所で見出。
県文化課より関係長視察。
- 8月5日(木) これまでに石棺2基分、住居跡5軒分の遺構が存在するようだ。明日以降、精査段階で明らかになろう。今日は新たに、西端部から南北に延びるV字溝の存在が明らかとなった。
- 8月6日(金) 調査区内にクイ打ちを行なう。10m四方に区切り、東から西へ、A～F。南から北に1～3区と命名した。
- 8月7日(土) 5日に明らかになったV字溝の断面を切る。その結果、西側斜面に通路状の段を有することが判明。段には小石を敷きつめている。
- 8月10日(火) B-3区の溝状遺構を1号溝とし、全体の検出を行なう。ほぼ東西に向っているようだ。
- 8月18日(水) 昨夜の雨で水が溜まっている。ポンプで排水をした後、調査区域内壁面をカットする。
- 8月20日(金) 1号溝がC-2区で止まっていることが確認され、端部は大きく掘り広げられていた。
- 8月23日(月) 今まで住居跡23軒を確認する。かなり重複している。
- 8月30日(月) E-2区の溝状遺構の外側に、大きな溝が存在するようだ。なお、E-2区の溝を2号溝とし、今回検出されようとする溝を3号溝とする。3号溝は幅7m強で、その中にすっぽり2号溝が入ってしまう。
- 9月1日(水) 12・13・15号住居の写真撮影。18号住居の壁面が確認できない。16号住居からガラス玉、土製勾玉などが出土した。
- 9月2日(木) 14号住居から、手捏土器が4片に割れた状態で出土した。レベルも10～15cm高さが異なるが4片で1個体となった。
- 9月4日(土) 1号住居で出土した炭化物の採集を行なう。屋根材の茅が採集された。
- 9月10日(金) 3号溝を3地区に分けて掘り始める。西側と東側では溝の状態が異なっている。
- 9月16日(木) 住居跡の全てを掘り上げる。実測も急ピッチで進める。
- 9月18日(土) 3号溝を掘り終る。西側で大量の土器が出土し、実測を始める。
- 9月21日(火) 3号溝の実測終了。
- 9月22日(水) 調査区西端で住居跡を検出、24号住居跡とする。本日で調査を終了する。

第3節 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

総括 弓掛 正久（山鹿市教育長）

調査団長 原口 長之（山鹿市立博物館館長）

調査事務 甫足 正喜（社会教育課長）

〃 吉田 靖彦（社会教育課主任）

調査員 中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）

倉原 謙治（〃）

調査補助員 坂本 重義（肥後考古学会員）

作業員 飯田啓詩、緒方泰男、竹下建二、竹下義徳、中村徹也、野田辰起、前川誠一、山城敏昭
吉里勝正、池田一子、石橋朝子、竹下トミカ、清水道代、城よう子、原久美子、吉里シズコ

地元協力者 近江工業株式会社

調査協力者 山鹿文化財を守る会、鹿本高校考古学部、鹿本商工高校考古学部、松永工務店

遺物整理 城よう子、古閑則子、坂梨たまよ

第2章 遺跡の環境

方保田東原遺跡は熊本県山鹿市大字方保田字東原に所在する弥生時代終末から古墳時代前期にかけての住居跡を主体とした集落遺跡である。

遺跡は、菊池川中流域に沿って発達した沖積平野を見下ろす、標高35～40mの河岸段丘上に立地している。この地は、南に菊池川、北にその支流の方保田川に挟まれ、段丘西側で合流している。

そのため、東側を基部として西に延びる舌状台地を呈している。

方保田川の北側にも台地が広がっており、これらの台地には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡と、古墳時代中期の古墳が多く存在している。

集落遺跡は次の遺跡が存在している。

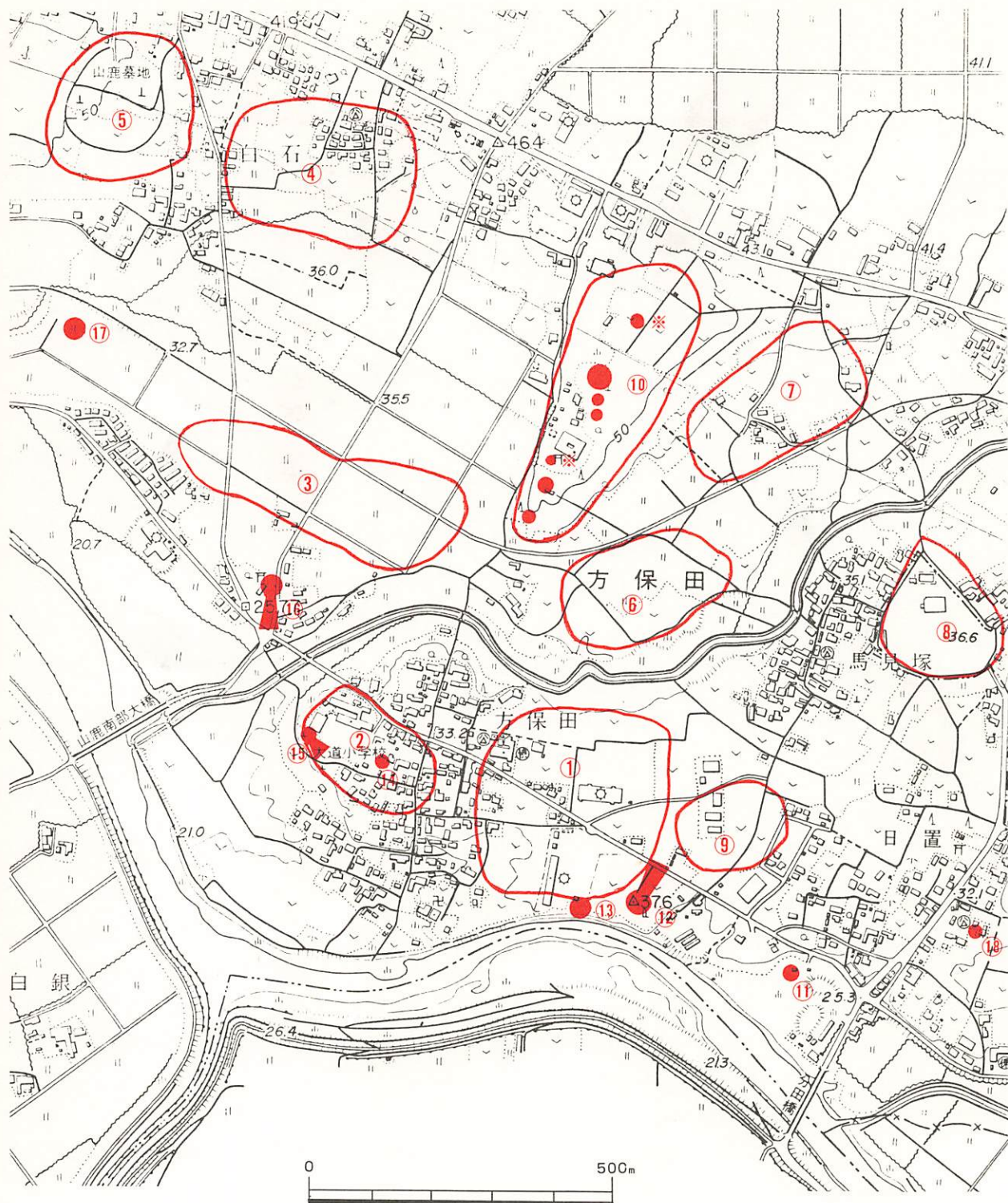
方保田東原遺跡、大道小学校校庭遺跡、塚の本遺跡、旧大道中学校校庭遺跡、方保田遺跡、古閑白石遺跡、馬見塚遺跡、石原遺跡、古閑ノ上遺跡である。

古墳は円墳として次の古墳がある。

清水山古墳、端山塚古墳、方保田古墳、辻古墳、馬見塚古墳群（7基）、木下古墳である。

前方後円墳は、亀塚古墳、経塚古墳、神社裏古墳などが存在し、他にも石棺が単独で出土する例が多い。さらに、この他に消滅した古墳も多く、全体の総数はかなりの数になるものと思われる。

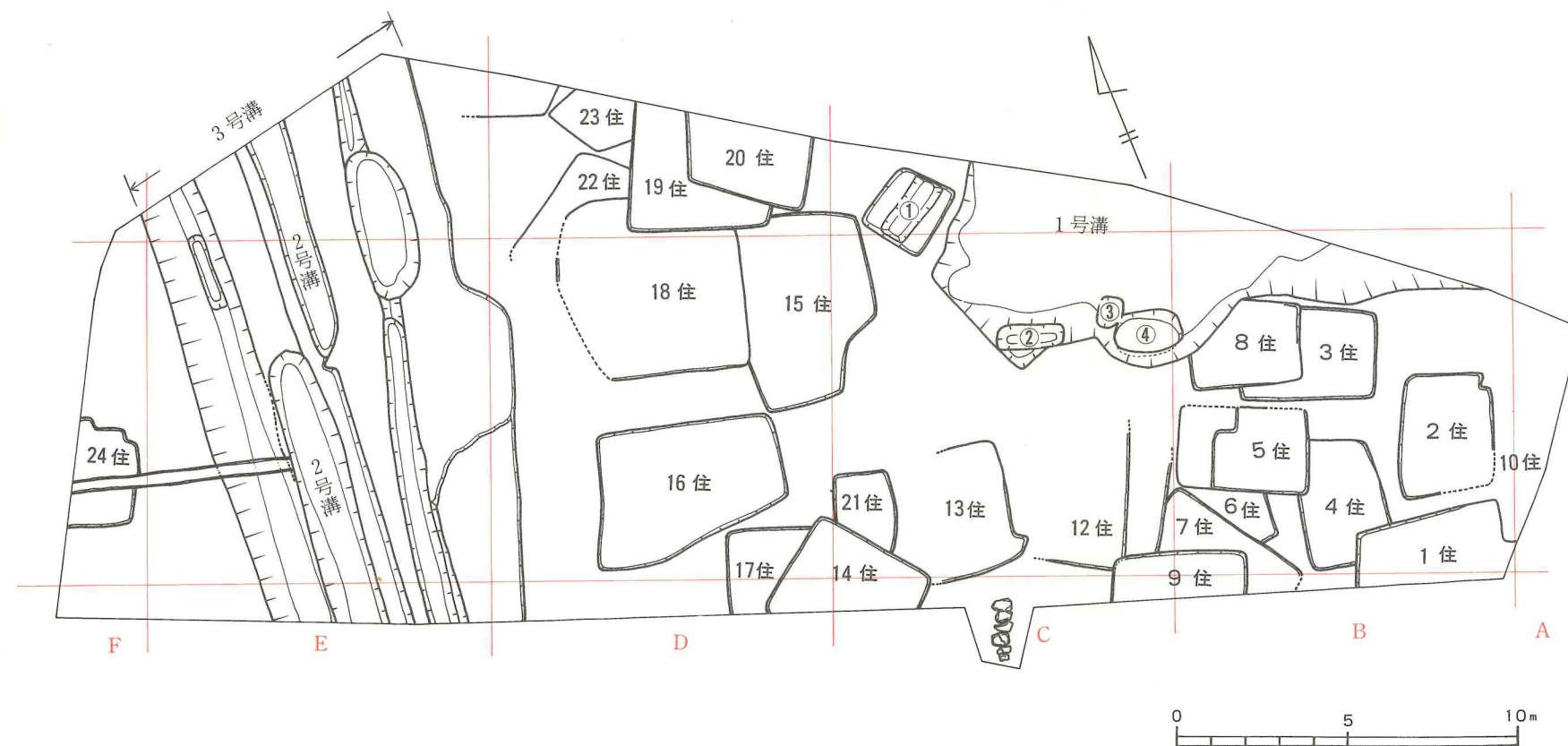
特に中期の古墳は、菊池川中流域で最も密集と共に注目すべき地域と言えよう。



- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| 1 方保田東原遺跡 | 7 馬見塚遺跡 | 13 端山塚古墳 |
| 2 大道小学校校庭遺跡 | 8 旧大道中学校校庭遺跡 | 14 方保田古墳※ |
| 3 方保田遺跡 | 9 塚の本遺跡 | 15 経塚古墳※ |
| 4 白石遺跡 | 10 馬見塚古墳群 | 16 神社裏古墳 |
| 5 古閑ノ上遺跡 | 11 清水山古墳 | 17 木下古墳※ |
| 6 石原遺跡 | 12 亀塚古墳 | 18 日置古墳 |

※は消滅
●は円墳
■は前方後円墳

第 1 図 周辺遺跡分布図

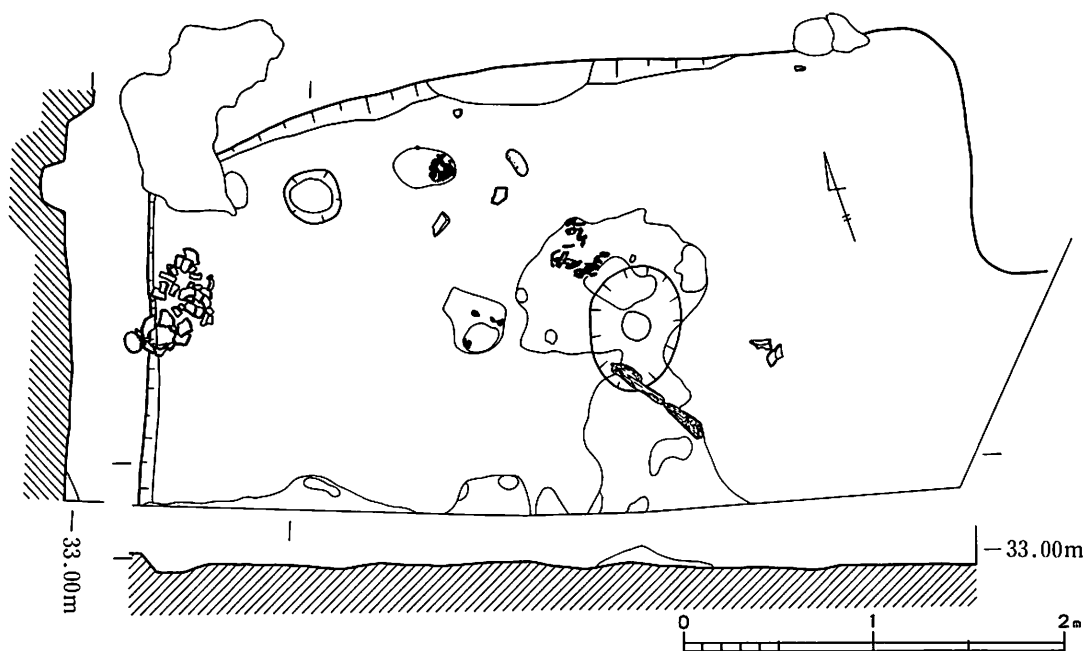


第 2 図 遺構配置図

方保田東原遺跡は、舌状を呈した台地の中央に位置し、方保田、馬見塚、日置の集落の中心にあたる。

西には大道小学校校庭遺跡、東には塚の本、旧大道中学校校庭遺跡があり、南には亀塚、端山塚の古墳を見ることができる。

第3章 遺構と遺物



第3図 1号住居跡実測図

1 1号住居跡 (図版1-3 第3図)

調査区の東南端に位置し、南側は調査区外へ広がっており、全体の規模はわからない。北西部で4号住居跡を、北東部で10号住居跡を切っている。壁は一部しか残っていないが、床面は全面堅く締っており、中央部に深さ約10cmの皿状の炉を持つ。

住居跡全域に焼土及び炭化物が10cm前後の厚さに堆積しているが、これはこの住居が火災に遇った際、土を被せて消火作業を行ない、その土が焼けて残ったものではないだろうか。また炭化物の中にはカヤも見られる。

遺物 (図版8-1 第5、6図)

遺物の量は少ない。1、2が東側の壁に接して床面より15cm程上位から出土し、3は床面直上、4は床面から10cmの位置で出土している。

1は底部を欠損する甕で、口径18.6cmを測る。口縁部は外湾して開き端部がやや内側に立ち上がる。胴部は丸く膨み最大径は、中位で22.6cmを測る。外面はタタキ目、ナデ、ハケ目、ナデという順序で調整を行なっている。内面はやや右下りのハケ目のあと、肩部では右上り、胴部は左上りのヘラケズリを施している。外面胴部の約半面にススの付着が顕著であるが反対面にはほとんど見られない。また、内面の汚れも見られない。

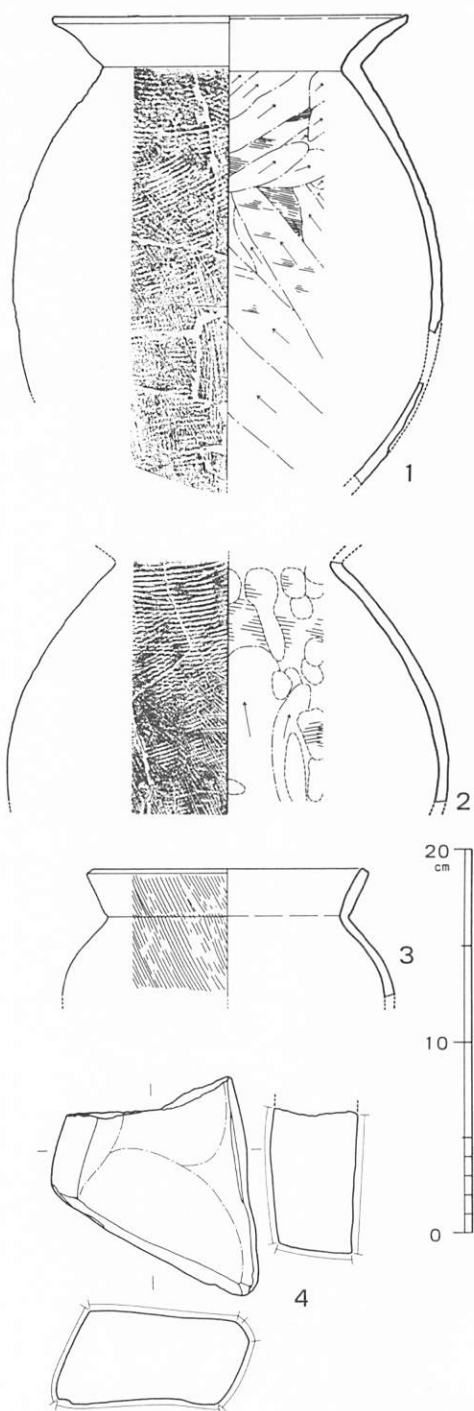
2は甕の胴部片で、胴部の復元最大径は23.2cm。外面の調整は1と同じでタタキ目、ナデ、ハケ目、ナデの順に施している。内面には指頭痕が目立つ。内面肩部の剝落が顕著である。

3は鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、復元口径14cm。外面は斜位のハケ目を全面に施し、そのあと薄くナデている。内面はナデである。胎土精良、焼成も極めて良好である。

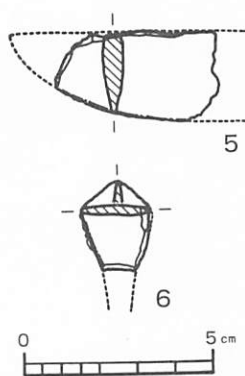
4は半欠の砥石で、石材は陶石である。全面使用しているが、下面のみあまり使用されていない。また、現在の形状になった後も、上面のみは若干磨られたらしく欠損部の角が摩耗している。

5は刀子の切っ先に近い部分であろう。切っ先と基部は失なわれている。重さ14.5gを計る。

6は鉄鏝の先端部で茎部を欠く。身幅1.9cm、厚さ0.2cmを測る。重さは3.2gである。



第4図 1号住居跡出土遺物実測図



第5図 1号住居跡出土鉄器実測図

2 2号住居跡 (図版2-1第6図)

B-2区、1号住居跡の北側に位置し、長軸をN-19°-Eにとる。3.6m×3.3mの隅丸方形のプランで、北側の両隅に小さいベッド状遺構を持つ。壁はほとんど残っておらず、南側は特に著しい。炉跡は見られなかった。

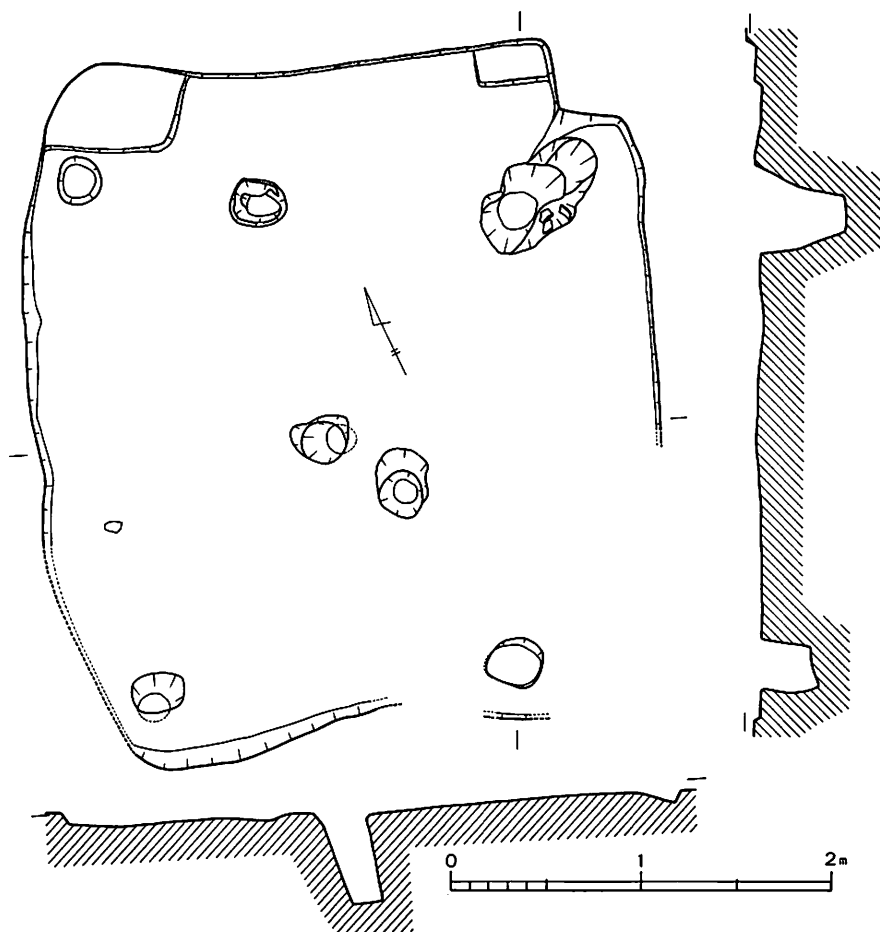
遺物 (第7図)

遺物は少なく、実測できるものはわずかに2点のみであった。

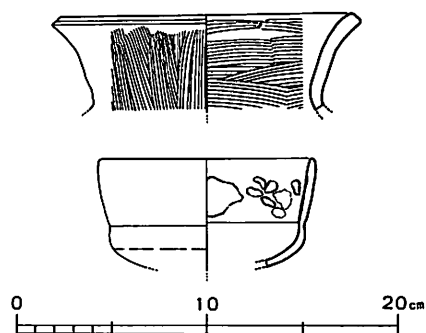
1は床面直上からの出土である。

1は、壺の口縁部片である。口縁部は外反し、口唇部にはナデによる浅い沈線が見られる。器面調整は全面粗いハケ目を施している。胎土には、わずかに砂粒を含み、焼成も良い。

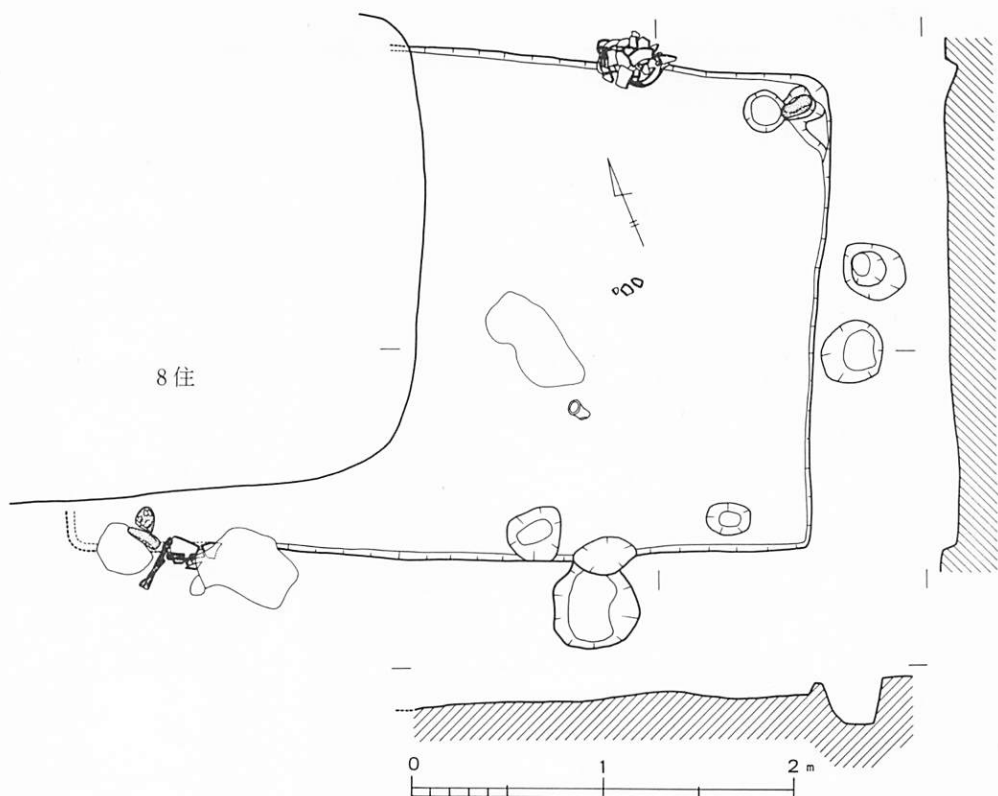
2は底部を欠く鉢である。口縁部は直口気味にわずかに開いて、胴部が浅い。口縁部内面では器面剝離が著しい。器面調整は全面ヨコナデを施していて、胎土には小さな砂粒を含み、焼成はあまり良くない。



第6図 2号住居跡実測図



第7図 2号住居跡出土遺物実測図



第 8 図 3号住居跡実測図

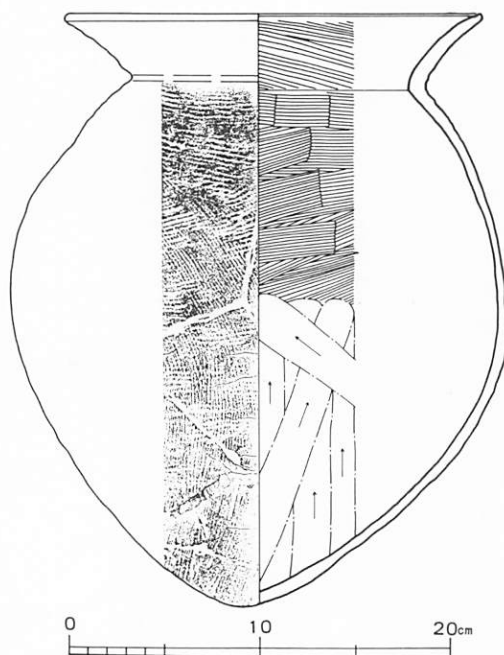
3 3号住居跡 (図版2-1第8図)

B-2区に位置し、西側を8号住居跡に切られている。N-70°-Wに長軸をとる東西に長い平面プランである。壁は短かく残っているのみである。床面は西側に、やや傾斜し、ピットの検出はできなかった。また、中央部に炭化物の散在を見るが炉の検出はできなかった。

遺物 (図版8-2第9図)

第9図の甕は北側の壁に乘るような恰好で出土しており、この住居跡が放棄され、壁がほとんど壊されたあとのものであり、本住居跡に伴う遺物とは做し難い。

これは外来系の甕で、庄内式の特徴を多く有している。口縁部を「く」字状に開き、口唇部内側にわずかにつまみ上げを残している。頸部には凹線をめぐらし、内面にはシャープな稜を



第 9 図 3号住居跡上面出土遺物実測図

めぐらしている。胴部は倒卵形をし、最大径を中位に有している。底部はわずかに尖り気味である。胴部は全面にススの付着が見られ、内面では底部近くに焦げつきが見られる。器面調整は、外面の口縁部ではヨコナデ、頸部から肩部にかけては水平方向のタタキ、肩部から胴部下位にかけては右上がりのタタキ、底部付近では左上がりのタタキを施している。タタキを施した後、全面にハケ目を施しており、胴部中位まではタタキ目の上から施す程度であるが、下位においてはタタキ目をわずかに残す程度にハケ目を施している。内面では、口縁部から胴部中位まではハケ目を施していてそれ以下にはヘラケズリを行なっている。胎土には小さな砂粒を含んでいて焼成は良く、堅く焼き上っている。

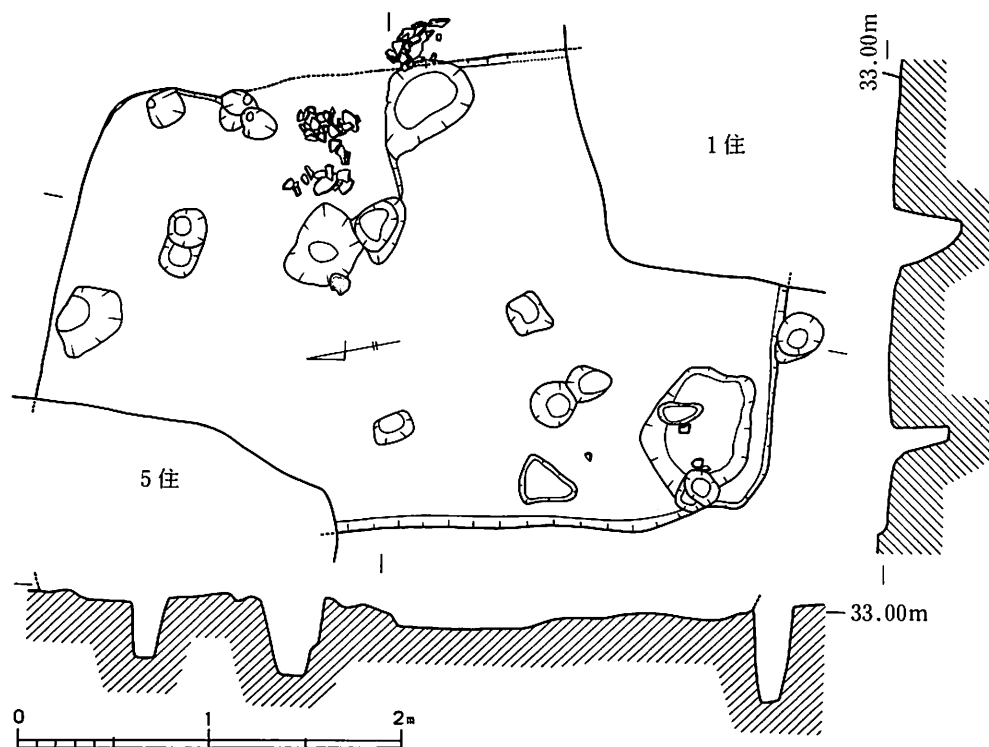
4 4号住居跡 (図版2-1第10図)

B-2区南端に位置し、長軸をN-14°-Eにとる。1号住居跡及び5号住居跡と重複関係にあり本住居跡が切られている。南北に長い長方形を呈し、長辺、短辺はそれぞれ中央部で3.86m、2.48mを測る。床面はかなりの凹凸があり、1号住居跡等で見られるような堅く踏み締めた状態の床面は見られなかった。

遺物 (第11図)

遺物の量は少ない。2は床面から5cm程上位で出土した。

1は壺の口縁部片である。口縁部は、わずかに複合気味となっている。頸部には、7本の沈線をめぐらし、上部に縦方向のハケ目を施し、その後全面にヨコナデを行なっている。内面には器面の



第10図 4号住居跡実測図

剝離が生じていて、焼成は良くない。

2は長胴丸底の甕で、胴部から上位を欠いている。器面調整は、現状では全面ハケ目を残しているが、上位にはタタキ目を施しているものと考えられる。器面の外側には全面にススの付着が見られる。さらに、部分的には器面の剝離が生じており、その上からススが付着していて、使用段階で生じたものである。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

3は円礫を利用した磨石である。研磨面は一面であるが、研磨は著しい。周縁には、敲打痕を残している。敲石としての利用も行なっている。

5 5号住居跡

(図版3-1第12図)

B-2区西端に位置し、N-68°-Wに長軸をとる。3.9m×2.64mの隅丸長方形プランを呈し、西端にL字状のベッド状遺構をもっている。また、

中央よりやや東側にずれて浅い皿状の炉跡を検出した。遺物及び焼土、炭化物は概して南半分に集中している。遺物は、本住居廃棄後棄てられたものであろう。

遺物 (第13図)

遺物は、概ね床面から7~8cmの位置から出土しており、焼土や炭化物の上に乗った状態である。

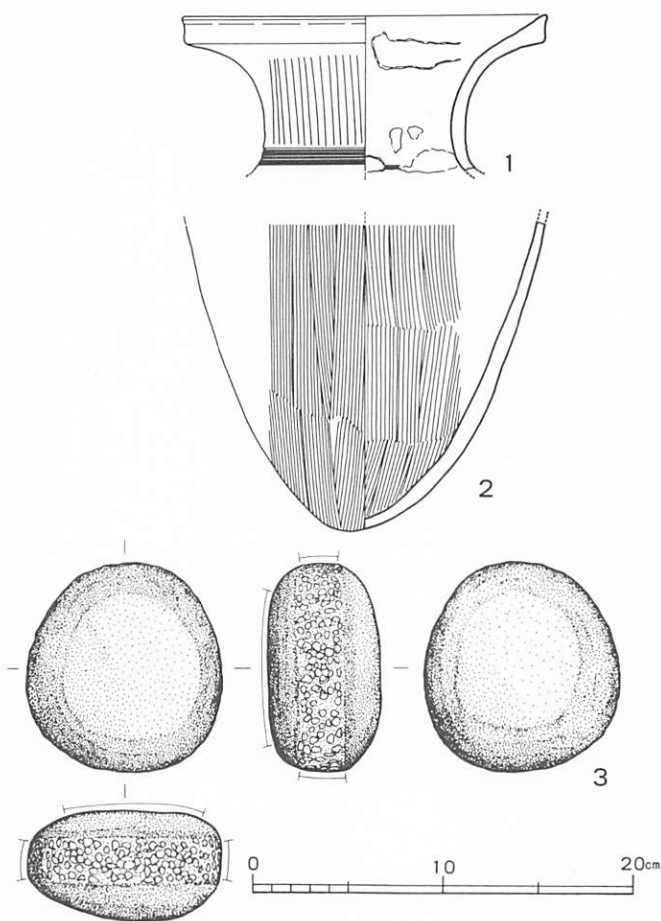
1は、甕の底部である。上部を欠いているが、長胴丸底の甕になると考えられる。器面調整は、胴部上位にはタタキ目を施し、下位ではハケ目を施している。内面は全面ハケ目を施している。

2は胴部から上を欠いた甕の丸底である。器面にはタタキ目を施していて、内面にはハケ目を施していた。しかし、内面は焼成が悪く、器面の剝離が著しく、わずかにハケ目を残している。

3は、口縁部が短かく直口する鉢である。胴部は張りが大きく、中位に最大径を有している。器面調整は、口縁部から肩部外面にはハケ目を施し、内面ではナデ調整を行なっている。

4は、底部を欠いた鉢である。口縁部は直線的に外反し、頸部内面には稜をめぐらしている。器壁は厚く、器面調整は全面粗いハケ目を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成あまり良くない。

5は口縁部が長く直口し、頸部には凹線をめぐらしている。胴部は浅く、底部はわずかに丸底と



第11図 4号住居跡出土遺物実測図



第 12 図 5号住居跡実測図

なる。口唇部の内側は、つまみ上げが見られ、器面の全面にナデ調整を施している。器壁は薄く、胎土には小さな砂粒を含んで、焼成は良い。

6は脚台のみで、上部を欠いている。裾部は短かく、大きく開く。器面は全面ナデ調整を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。

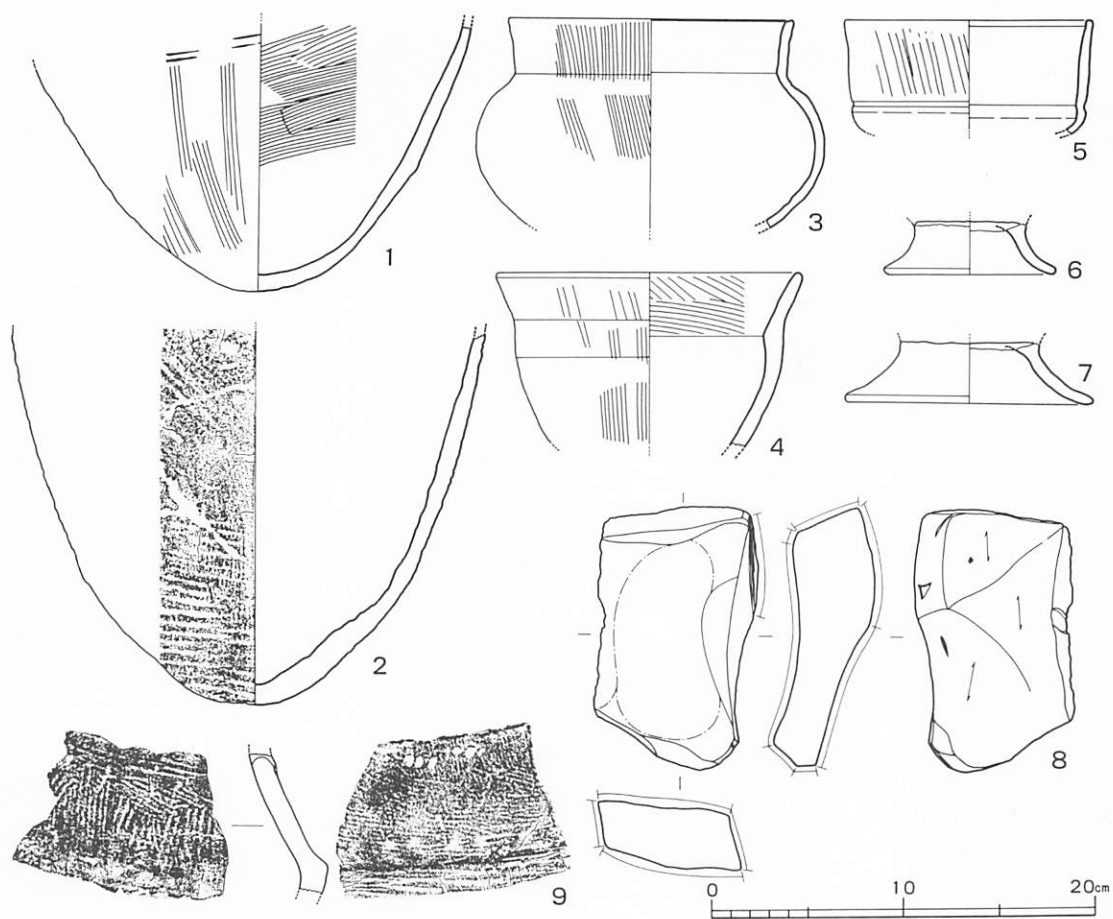
7は脚部のみで上部を欠いている。裾部は大きく開き、仕上げはあまり良くない。胎土には、砂粒を含み、焼成は良い。

8は砂岩製の砥石で、全面を非常に良く使い込まれている。さらに一部には、わずかではあるが鉄錆の付着が見られる。

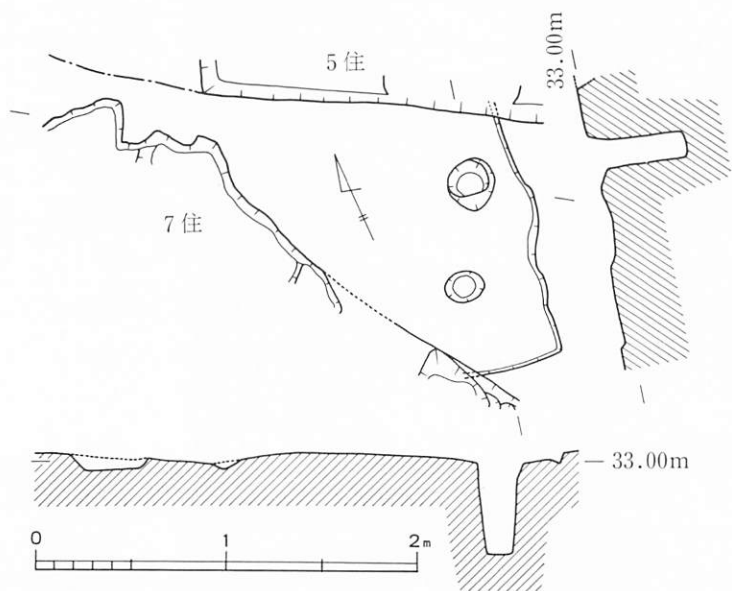
9は縄文土器の深鉢片である。胴部から肩部にかけては「く」字状を呈している。頸部下位には3個ずつ2ヶ所に刺突文を施している。器面調整は粗い条痕文を施している。

6 6号住居跡 (図版3-2 第14図)

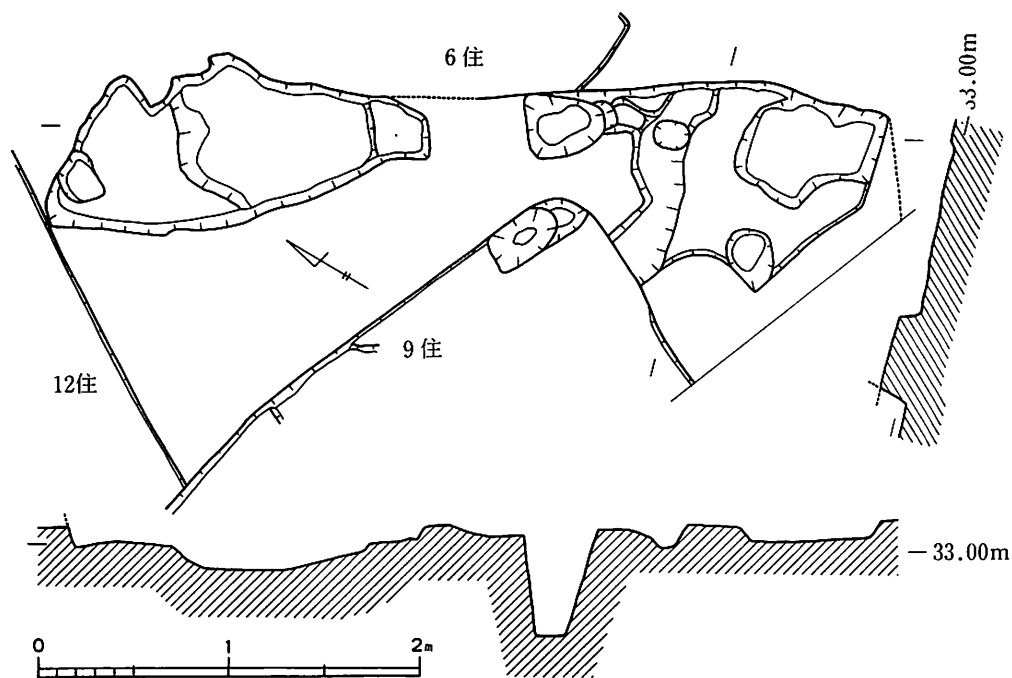
B-2区西南端に位置し、北側を5号住居跡に、南側を7号住居跡に切られている。この住居跡も後世の削平を受けて、ほとんど壁は残っていない。また、遺物も土器の細片ばかりで図化できなかった。



第 13 図 5 号住居跡出土遺物実測図



第 14 図 6 号住居跡実測図

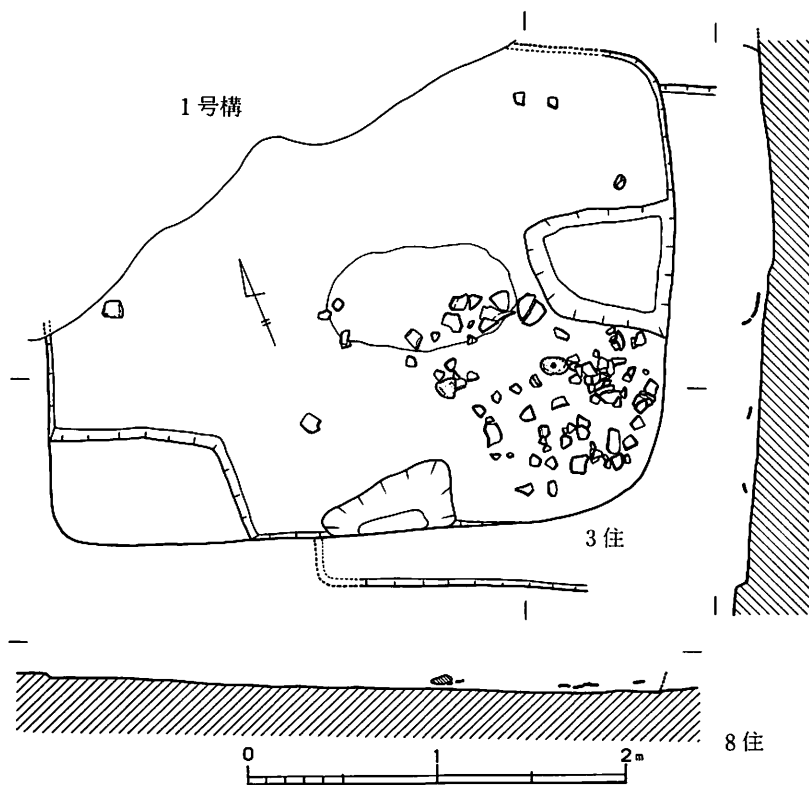


第 15 図 7 号住居跡実測図

7 7号住居跡

(図版 3 - 2 第15図)

B - 2 区の西南端に位置し、6 号住居跡を切り、9 号、12 号住居跡に切られる関係にある。全体的規模は不明で、遺物も細片のみで、図化し得なかった。



第 16 図 8 号住居跡実測図

8 8号住居跡

(図版 2 - 2 第16図)

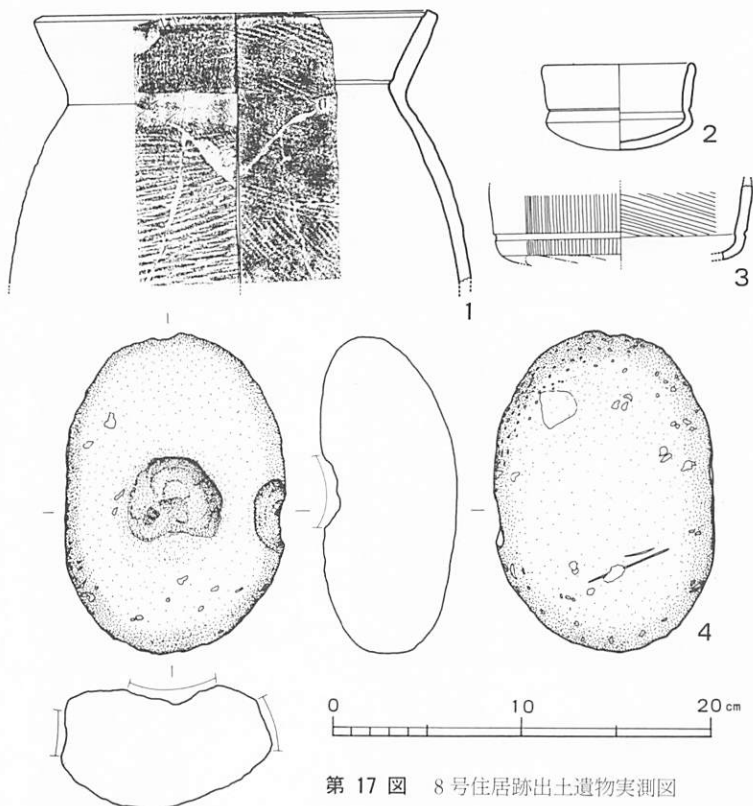
B - 2 区の北西寄りに位置し、3 号住居跡を切り、1 号溝に北西端を切られている。長軸を $N - 74^{\circ}$

—Wにとる東西に長い隅丸方形のプランを呈し、西南の隅にベッド状遺構を配している。中央部から、やや東寄りに炭化物が散らばっていた。

遺物（第17図）

東南の隅から集中して出土した。概ね床面から、2～5cmの高さである。

1は口縁部を「く」字状に開き、口唇部へ直線的に続いている。口唇部はナデ調整により、わずかにつまみ上げられた状態となっている。頸部は外面では、ゆるやかに曲っているが、内面では稜を有している。胴部の張



第 17 図 8 号住居跡出土遺物実測図

りは小さく、長胴丸底になるものと思われる。器面調整は、外面では口縁部には縦方向のハケ目、胴部では水平方向と、右上がりのタタキ目を施し、部分的にハケ目を施している。内面では全面にハケ目を施している。

2は口縁部が直口し、頸部にはシャープな稜をめぐらして、胴部は浅い。器面は全面ナデ調整を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良好である。

3は口縁部と底部を欠くが、口縁部は直口し、胴部が浅い。頸部は無く、沈線をめぐらしている。器面調整は、外面はハケ目とヘラケズリを施し、内面はハケ目とナデ調整を行なっている。

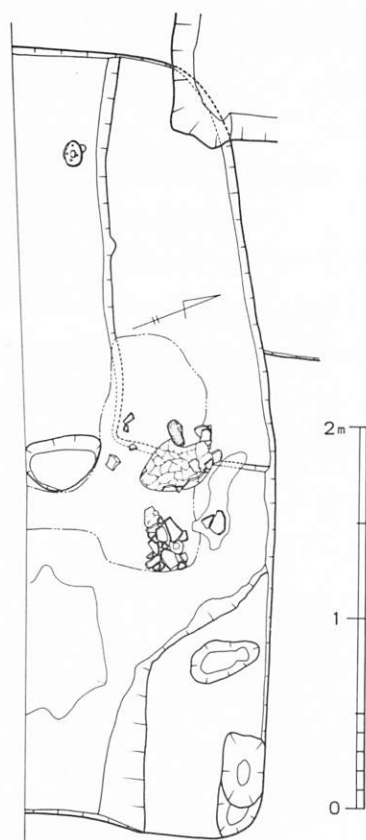
4は、中央に長径 4.5cm、短径 3.5cmの不整形の凹みを有し、側面にはノッチを加え、石錘としての利用も考えられる。

9 9号住居跡（第18図）

B-1・2区とC-1・2区にまたがる住居跡で、南側は調査区外へはずれる。長軸の方向や規模は不明である。北側の両隅に低いベッド状遺構を配している。

遺物（図版8-3第19図）

図示した資料3点とも、床面から15cm程の高さから出土しており、本住居跡との関連性は薄いであろう。



第 18 図 9号住居跡実測図

と思われる。器壁は厚手で、器面調整はハケ目とナデ調整を施している。胎土に砂粒を含んでいる。焼成は良い。

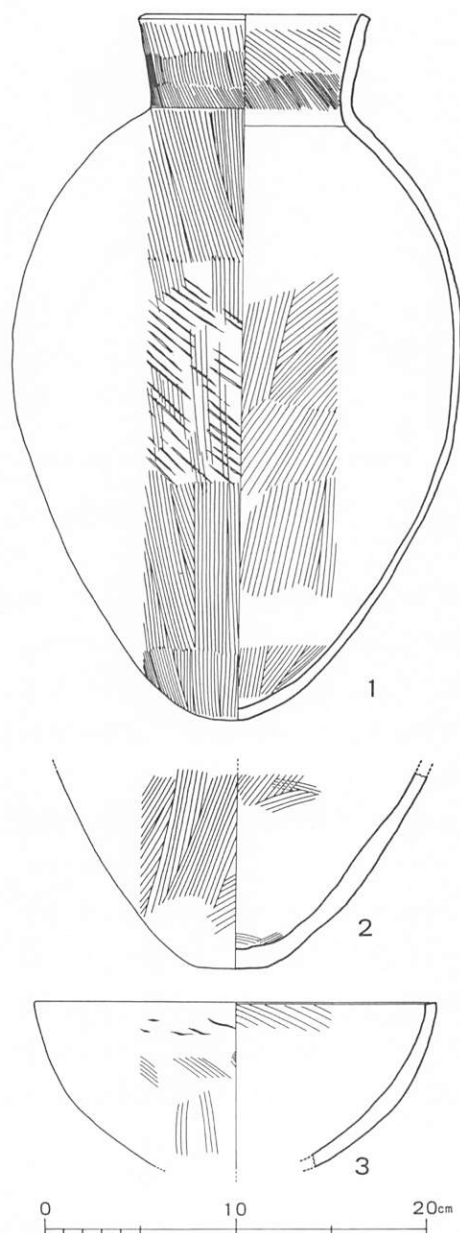
3は底部を欠く鉢の破片である。口縁部は大きく開き、口唇部は平坦部となっている。器面調整は外面でハケ目とナデ調整、内面口縁部近くでは、粗いハケ目を施し、胴部ではナデ調整を施している。胎土に砂粒を含んでおり、焼成は良い。

10 10号住居跡（第20図）

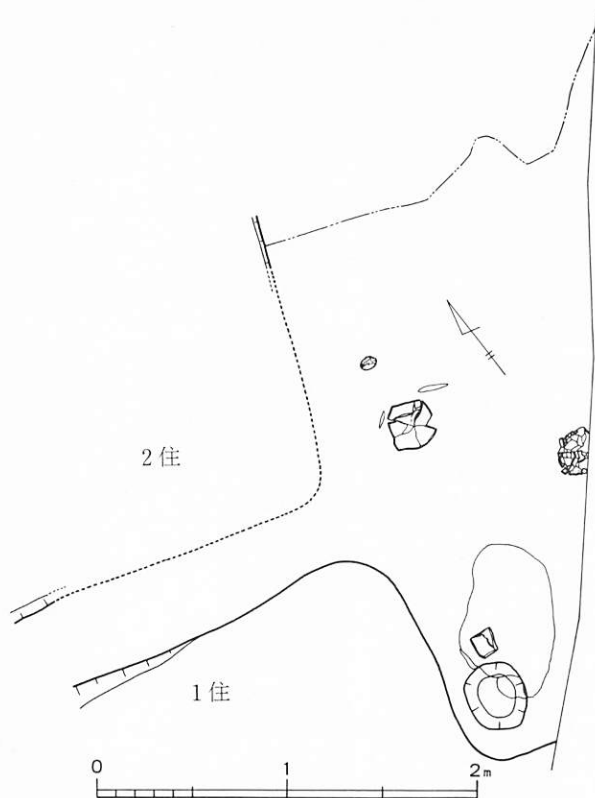
調査区の東端、A-2区とB-2区にまたがる住居跡で、床面のみ残っている。北側の床面の残存範囲は検出できたが、西側の広がり把握できなかった。

1は、口縁部が直口する壺である。長胴丸底で、胴部の張りが少なく、中位に最大径を有している。器面調整は、口縁部外面には縦方向のハケ目を施している。胴部には全面にハケ目を施し、中位にはタタキ目をわずかに残している。内面ではハケ目とナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成はきわめて良く、堅く焼き締まっている。

2上部を欠いた小さな平底である。器種は壺になるもの



第 19 図 9号住居跡出土遺物実測図



第 20 図 10号住居跡実測図

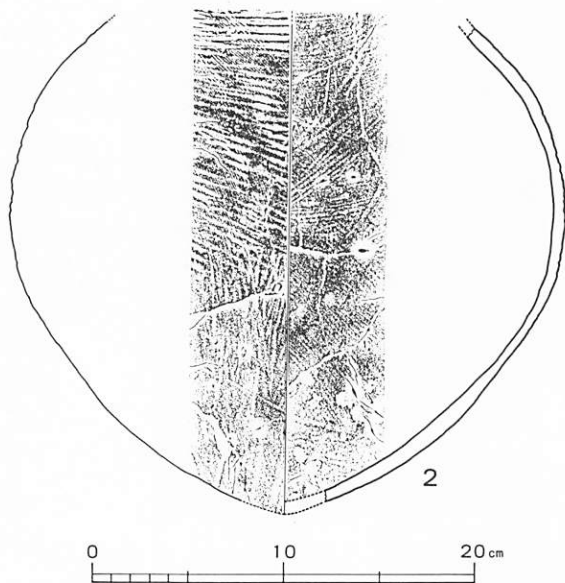
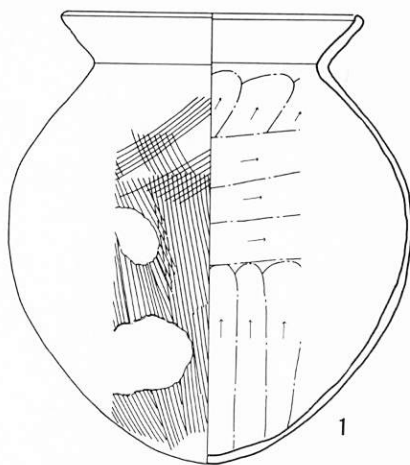
なお、外面にはススの付着が見られ、底部近くには器面の剝離が見られる。内面底部近くには、焦げつきが認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良く、器壁はきわめて薄く仕上げられている。

2 は口縁部と底部を欠く壺である。口部中位に最大径を有し、底部は小さく尖るものと思われる。器面調整は、胴部上位はタタキ目の後ハケ目を施し、下部ではナデ調整を施している。内面では全面ハケ目を施し、肩部では器面剝離が生じている。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。

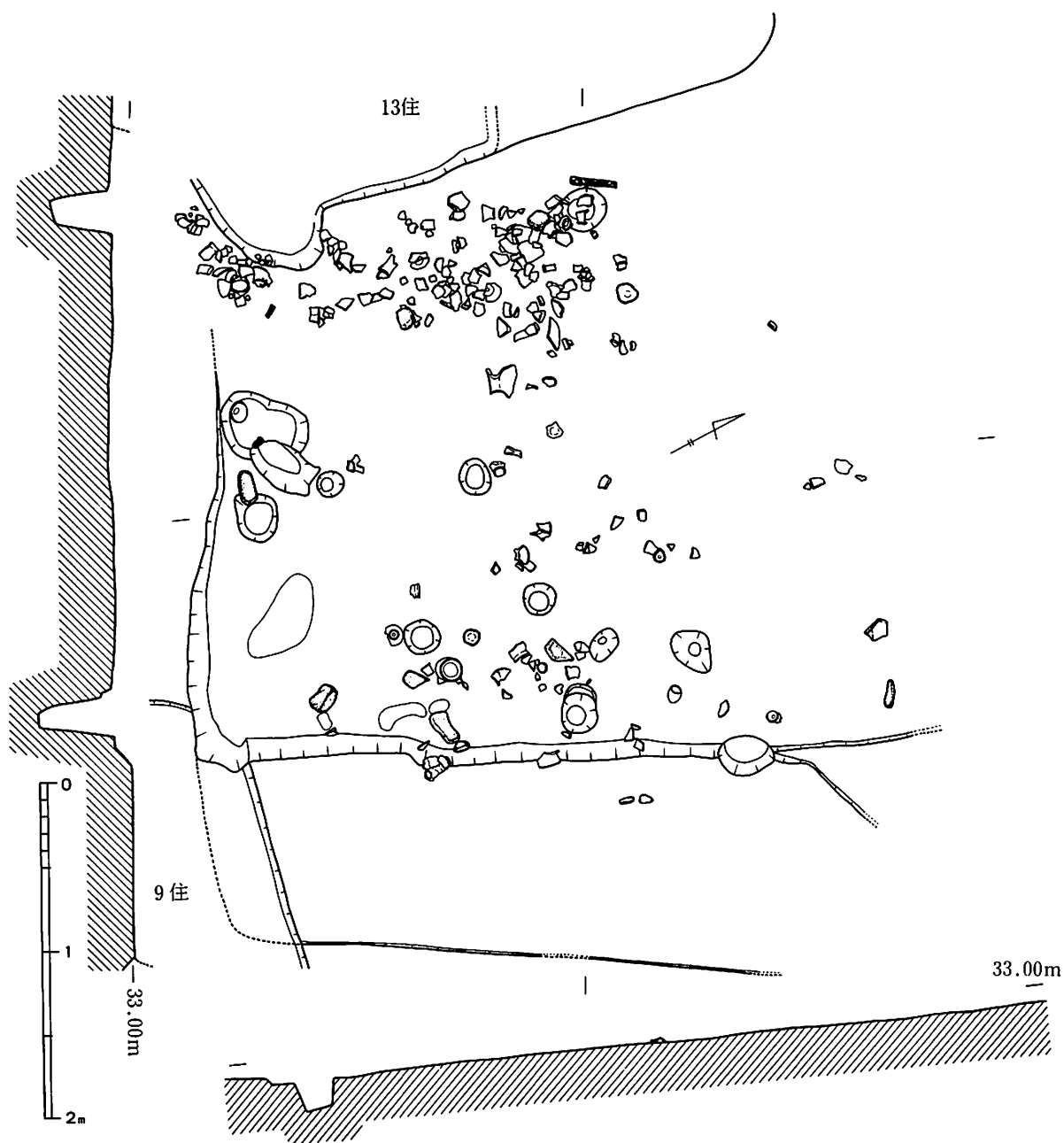
遺物 (第21図)

2 点図示したが、ともに床面密着の状態で出土した。

1 は、外来系の甕である。口縁部は内湾気味に「く」字状に開き、口唇部の内側にはつまみ上げが見られる。胴部球形を呈し、最大径を胴部中位に有している。底部はわずかに尖り気味の丸底である。器面調整は、口縁部は両面ヨコナデ、胴部は外面にハケ目、内面をヘラケズリを施している。



第 21 図 10号住居跡出土遺物実測図



第 22 図 12号住居跡実測図

11 12号住居跡 (第22図)

C-2区の東南端に位置する住居跡で、北側及び西側は壁が残らず、床面の広がりもはっきり把握できなかった。東側の壁に沿って幅 1.1~1.2m、高さ 0.1m前後のベッド状遺構を設けている。

7・9・13号住居跡と重複関係にあり、本住居跡は7号住居跡を切り、9、13号住居跡に各々切られている。

遺物 (図版8-4~7・9-1 第23・24・25・26図)

大量の遺物が出土したが、そのほとんどが床面直上からの出土である。

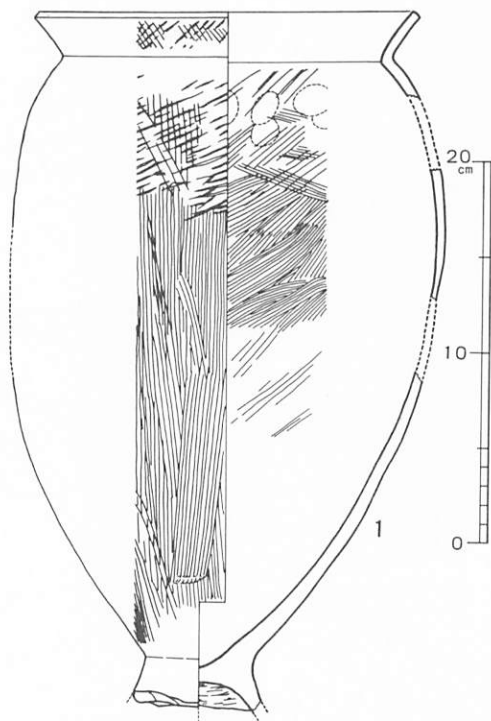
1はほぼ完形の脚台付の甕で、口径19.7cm、現在高36.6cm。口縁部はくの字形に外反し、端部は角ばっている。肩部は張り出しているが胴部は張らずに底部へ続く。外面は口縁部と肩部にタタキ目残り、胴部は底部からハケ目を引き上げている。内面は胴部上半部に2種類の原体によってハケ目を施しており、下半はナデである。外面のススの付着は口縁部から胴部中位までの片側のみに見られ、他の部位には見られない。内面の焦げ付き痕もススの付着部分の裏側に当る位置に見られる。また、脚部の欠損部の状態がほぼ水平なところから、故意に打ち欠いた可能性も考えられる。

2は甕の破片で胴部以下を欠く。口縁部はゆるやかに「く」字状に開き、胴部の張りが小さく、長胴になる。底部は丸底になると考えられる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

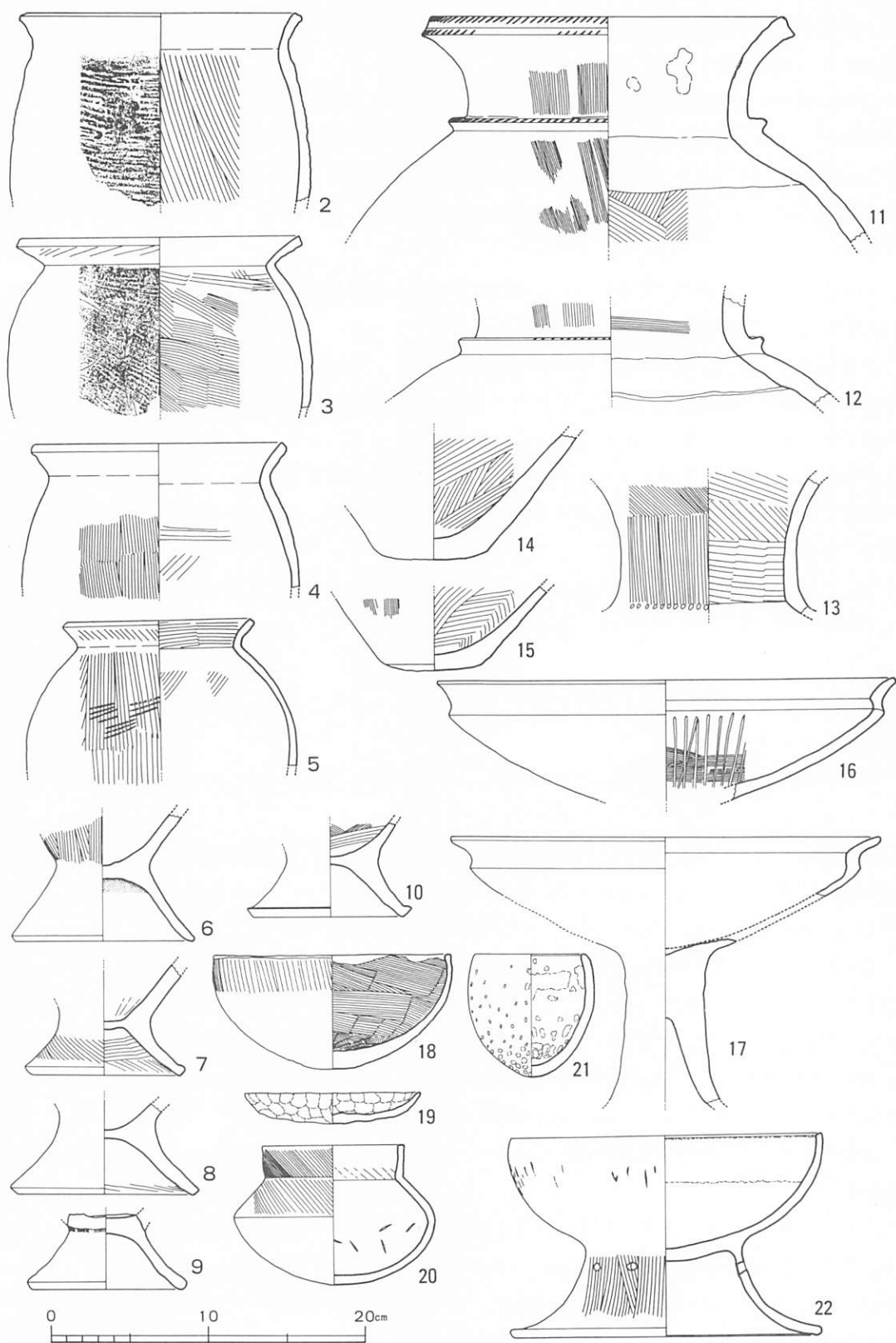
3は甕の破片で底部を欠いている。口縁部を「く」字状に開き、口唇部はナデによって平坦となっている。器面外面には全面にススの付着が見られる。胴部の張りはあまり見られないが、中位に最大径を配している。器面調整は、外面は全面ナデ調整、内面には胴部にきめ細やかなハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

4は甕の破片で胴部以下を欠いている。口縁部はゆるやかに「く」字状に開き、口唇部から頸部にかけては内外両面をナデている。胴部は、外面にはきめ細かなハケ目、内面では粗いハケ目をわずかに残しながら、ナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

5は口縁部が短かく「く」字に外反する甕である。胴部の張りが大きく、最大径を胴部中位に有している。底部は欠くため不明である。器面調整として、胴部外面では中位にタタキを残しているが、その後胴部全面に粗いハケ目を施している。内面では口縁部に粗いハケ目を残すが、胴部は全面ナデ調整である。胎土には小さな砂粒を含んでいるが、焼成は良い。



第23図 12号住居跡出土遺物実測図



第 24 图 12号住居跡出土遺物実測図

6は甕の脚台で上部を欠いている。裾部は直線的に開き、内面には砂粒の付着が見られる。胴部外面にはハケ目を施し、胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

7は上部を欠き、脚台のみの破片である。脚部は短かく、器面にはハケ目を施した後、ナデ調整を行なっている。胴部との接合面は平坦にナデられ、砂粒の付着は見られない。

8は脚台で、上部を欠いている。裾部は直線的に開き、器面は全面ナデ調整を施している。

9は甕の脚台である。脚部のみで、くびれ部にわずかにハケ目を残し、他の面は全面ナデ調整である。

10は上部を欠く脚台で、裾端部をつまみ上げている。胴部の内面には粗いハケ目を施しているが他の面は全てナデ調整であった。

11は胴部以下を欠く壺である。口縁部は比較的短かく、外反しつつ開いている。口唇部には刻目を施している。頸部には三角貼付凸帯をめぐらし、口唇部と同様の刻目を施している。器面調整は外面にきめ細かなハケ目、内面には粗いハケ目を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

12は口縁部と胴部以下を欠く壺である。頸部には三角形の貼付凸帯をめぐらし、端部には浅い刻目を配している。内面には粘土接合面を残していた。器壁は厚く、胎土にも砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

13は口縁部と胴部以下を欠いた壺である。頸部下端には刺突文をめぐらし、上部には赤色顔料による帯状の彩色をめぐらしている。器面調整は、ハケ目を主として施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

14は上部を欠く平底である。器壁が厚く、内面には粗いハケ目を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。

15は平底で上部を欠いている。内面には粗いハケ目を施し、外面には小さなハケ目をわずかに残している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

16は脚部を欠いた高坏である。口縁部は短かく、坏胴部が深い。頸部の立ち上がりは小さく、屈接部には稜線をめぐらしている。器面調整は坏部内面でハケ目の後、ヘラ研磨を施しており、他の面は全てナデ調整を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

17は高坏で、坏部の一部と脚裾部を欠く。口縁部は短く、頸部は直立した形となっている。そのため、外面にはシャープな稜をめぐらしている。脚は柱状部が長く、裾部が大きく広がると思われる。内面はヘラケズリで調整している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

18は口縁部は直口し、口唇部の厚さは不均一である。内面には、きめ細かなハケ目を施し、外面には粗いハケ目を残している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

19は、手捏土器である。全面指頭圧痕を残し、口縁部も不整形である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

20は、口縁部が短かく直口する壺である。胴部の張りが大きく、稜線を抽くように鋭く曲っている。底部は平底気味の丸底になっている。器面調整は口縁部から肩部にかけてハケ目を施し、胴部はナデ調整を施している。内面は、頸部にハケ目を施し、胴部にはヘラ状工具の端部による刻目を残している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。

21はコップ型土器、口縁部が直口し、底部は尖底となっている。器面の剝離が著しい。胎土には砂粒を含み、胎土はあまり良くない。

22は、脚台付きの鉢である。脚と胴部の接合は器高中位に位置し、口縁部が大きく開いている。

胴部内は全面ナデ調整であるが、口縁部直下では器面の剝離が著しい。脚部には2個の円孔を3箇所に配している。脚部はハケ目を施した後、ナデ調整を全面に行なっている。胎土はきめ細かな粘土を使用し、焼成はあまり良くない。

23は、鋸歯文を施した土器である。鋭利な施文具による線刻で、二本の文様帯をめぐらしている。文様帯は3本の横線によって区画され、その中に幅4～5mmの鋸歯文を描き、空間を埋めるように4～5本の横線を描いている。鋸歯文は、上段文様帯では17個、下段文様帯では18個の鋸歯が描かれている。これらの文様は正確に割り付けられ、技術的には非常に優れた文様である。器面は全面にヘラ研磨を施していて、その後外面に文様を施している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

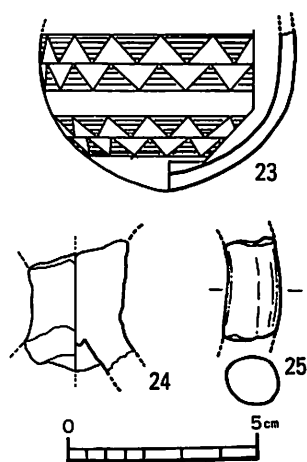
24は、手捏の高坏である。坏部と脚裾部を欠き、わずかに結合部のみである。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

25は、両端を欠いているため断定しかねるが、湾曲の状態から土製勾玉の破片と考えられる。

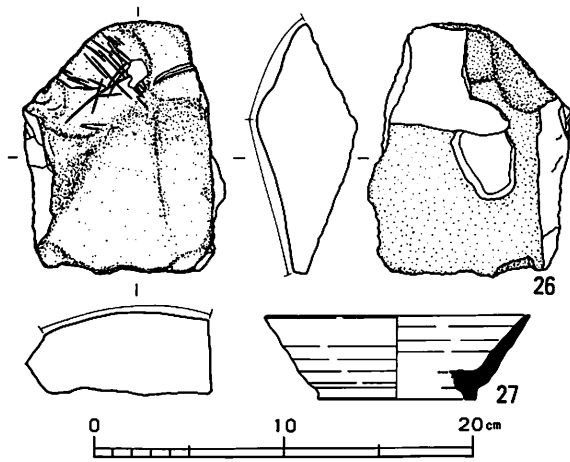
また、中心部の断面が円形を呈し、両端の太さに差異が無く、把手の破片とも考えられる。

26は、砂岩製の砥石で、使用面は一面で湾曲している。さらに、基部の自然面には条痕状の研磨が多く残されている。両側面は欠損し、裏面も剝落している。

27は須恵器の埴である。底部には高台を有しており、断面に粘土接合面を残している。



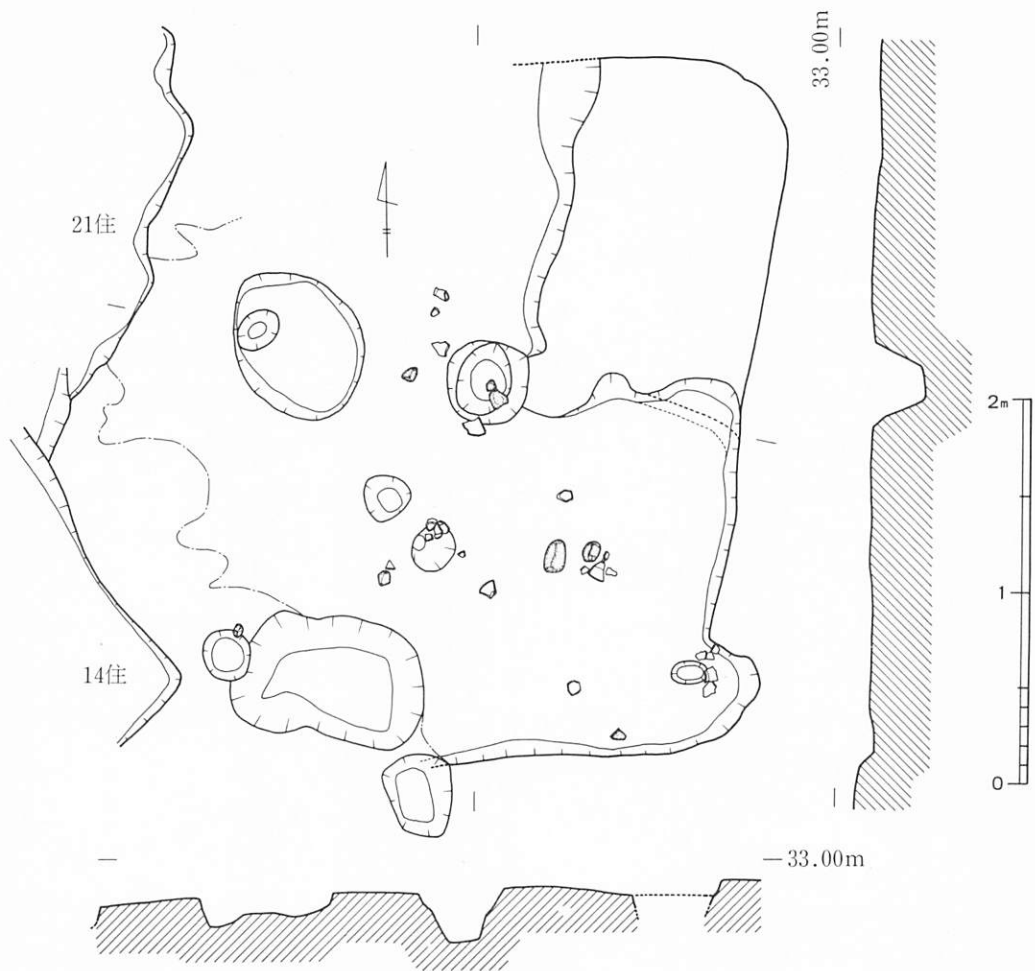
第 25 図 12号住居跡出土遺物実測図



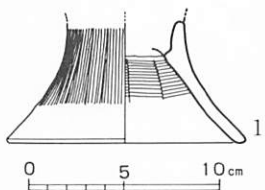
第 26 図 12号住居跡出土遺物実測図

12 13号住居跡 (第27図)

C-2区南端に位置し、12号住居跡を切り、14、21号住居跡に切られる。壁は東南隅にわずかに残るのみであり、東北隅にベッド状遺構を配している。床面は堅く踏み締めた状態のもので、良く



第 27 図 13号住居跡実測図



第 28 図

13号住居跡出土遺物実測図

残っている。炉跡の検出はできなかった。

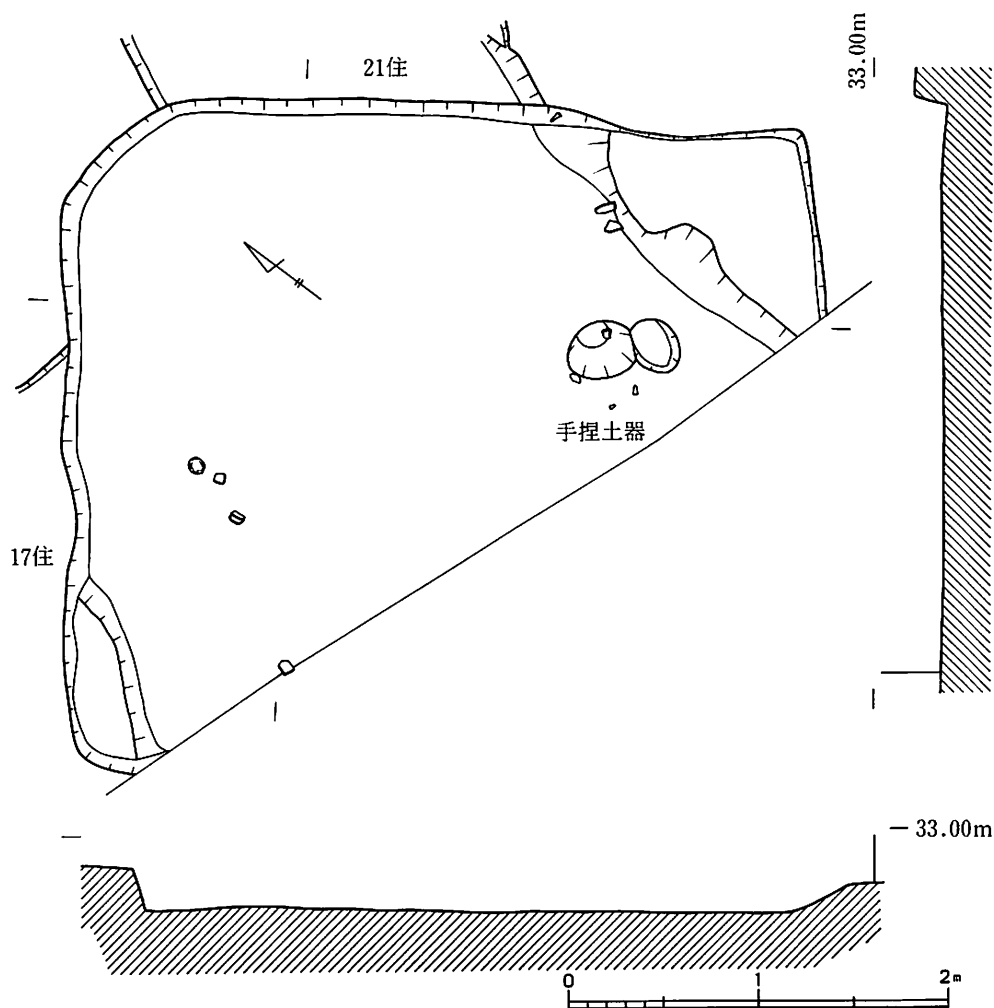
1 遺物 (第28図)

遺物の量は少なく、小片が多かった。図化しうるものは1点のみで床面から7 cmの位置から出土している。

1は脚台の破片である。裾部は直線的に開き、両面にハケ目を施している。上部には粘土接合面を残している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良くない。

13 14号住居跡 (図版3-3 第29図)

C-1・2区とD-1・2区にまたがる住居跡で、南側は調査区を外れる。長軸方位はN-37°-Wで、4 m×3.6 m程の規模になるものと思われる。17、21住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。今回の調査で検出した住居跡のうちでは、壁の残りは良い。東西の隅に壁に接して各々段を有する。炉跡の検出はできなかった。



第 29 図 14号住居跡実測図

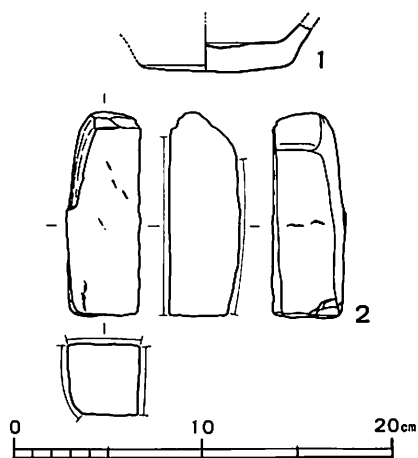
遺物 (図版 9 - 2 第30・31図)

3の手捏土器は、4個に割れて出土した。それぞれの出土位置は床面より6cm、6cm、13cm、21cmであった。

1は、壺の底部であろう。平底で中央部がわずかに厚くなっている。内面にはナデによる調整が行なわれている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

2は、砂岩製の砥石である。使用面は3面見られるが、主たる使用は1面である。使用面は表面が光沢をおびて、直線になっている。

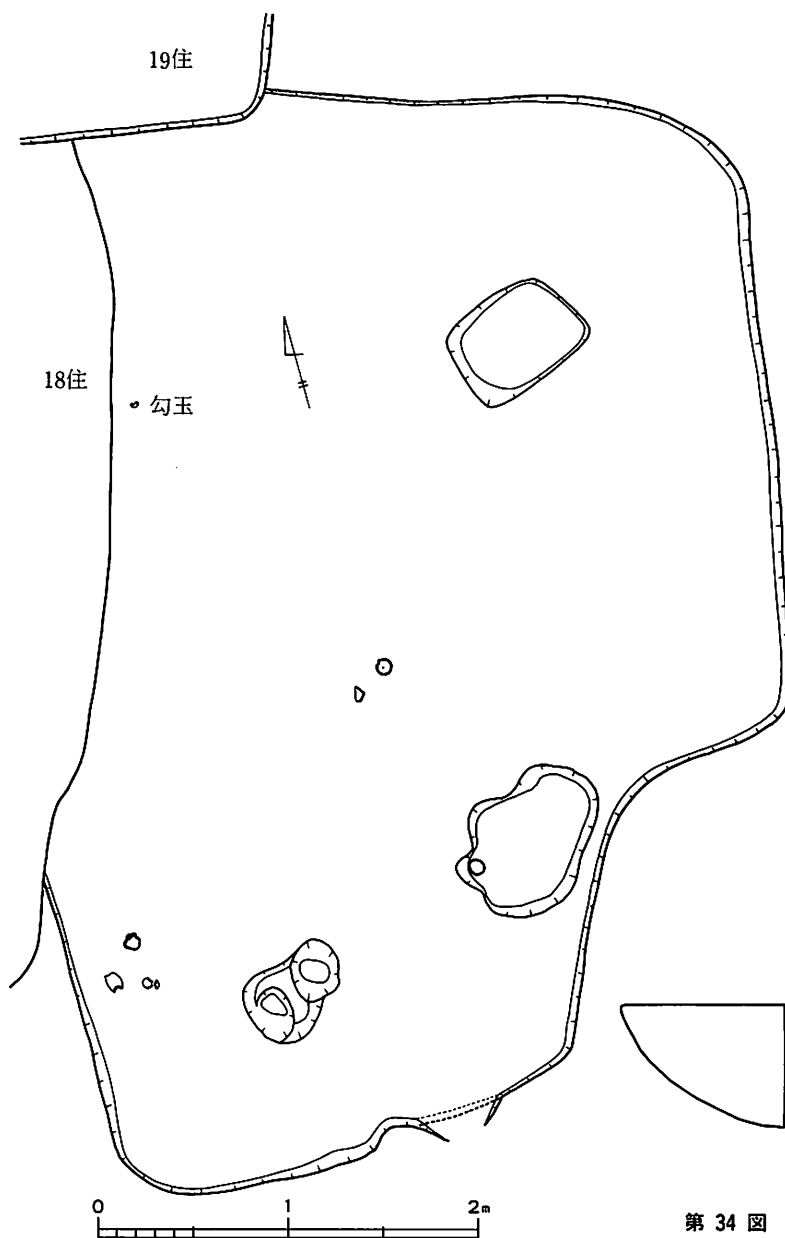
3は、口縁部がわずかに外反し、胴部は球形を呈している。表面にはシワが多く、内面では指頭によるナデが強く行なわれ、さらに指紋も残している。胎土には砂粒を含ん



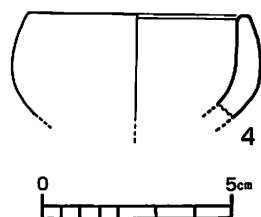
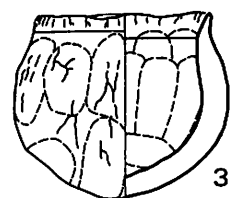
第 30 図 14号住居跡出土遺物実測図

でいるが焼成は良い。

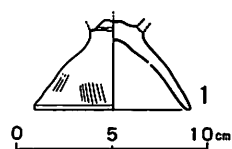
4 はミニチュア土器の破片である。口縁部は内向し、底部を欠いている。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。



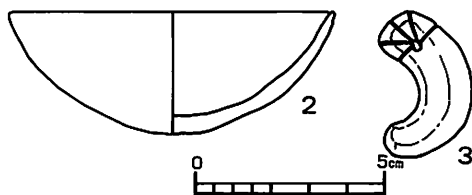
第 32 図 15号住居跡出土実測図



第 31 図 14号住居跡出土
遺物実測図



第 33 図 15号住居跡出土
遺物実測図



第 34 図 15号住居跡出土遺物実測図

14 15号住居跡 (図版 4 - 1 第32図)

C - 2・3区とD - 2・3区にまたがる住居跡である。18、19号住居跡と重複し、本住居が切られる関係にある。長軸方位をN - 11° - Eにとる南北に長いプランを呈する。東南のコーナーは壁が

張り出しており、ベッド状遺構の残存部分かと思われる。住居内の施設では、深さ10cm程の不定形の土壌が2個とピット1個を検出した。

遺物（図版9-3第33・34図）

1は上部を欠く脚部で、くびれ部は小さく、粘土接合面を残している。脚部は内湾気味に開き、外面にはハケ目を施した後ナデ調整を行なっている。内面は全面ナデ調整を行なっている。内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良い。

2は小形の埴である。器面は全面ナデ調整を施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

3は丁字頭をもつ土製勾玉である。丁字は5本見られ、鋭い線刻で描かれている。頭部は角張った状態で、体部は丸く曲っている。

15 16号住居跡（図版4-2第35図）

D-2区内南寄りに位置し、長軸をN-78°-Wにとる住居跡である。整った長方形のプランにはならず、南側の壁が内側に切れ込んで、不整五角形の平面観を呈する。柱穴、炉跡等の検出はできなかった。東壁に接して、不定形の段が見られる。

遺物（図版9-4～8・10第36・37・38図）

2～4は南壁に接して床面から一括出土したものである。

1は、底部を欠く短頸壺である。口縁部はわずかに「く」字状に開き、口唇部はナデによって平坦に調整されている。口縁部内面にハケ目を残すが、他の面は全てナデ調整を施している。胎土には、砂粒を含まず、焼成も良い。

2は短頸の壺で、口縁部が直口し、胴部の張りが大きく、上位に最大径を配している。底部は丸底となり安定性に欠ける。器面調整は、全面ハケ目を施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

3は脚台付鉢である。口縁部は直口しているが、わずかに内向している。胴部の張りは無く、最大径を口縁部に有し、底部に向ってすばまっている。底部は脚台となっているが、裾部を欠く。

器面調整は、外面では口縁部がヨコナデ、胴部はヘラケズリの後、下部にハケ目を残している。内面は、全面ナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。そのため、器面剝離が生じている。

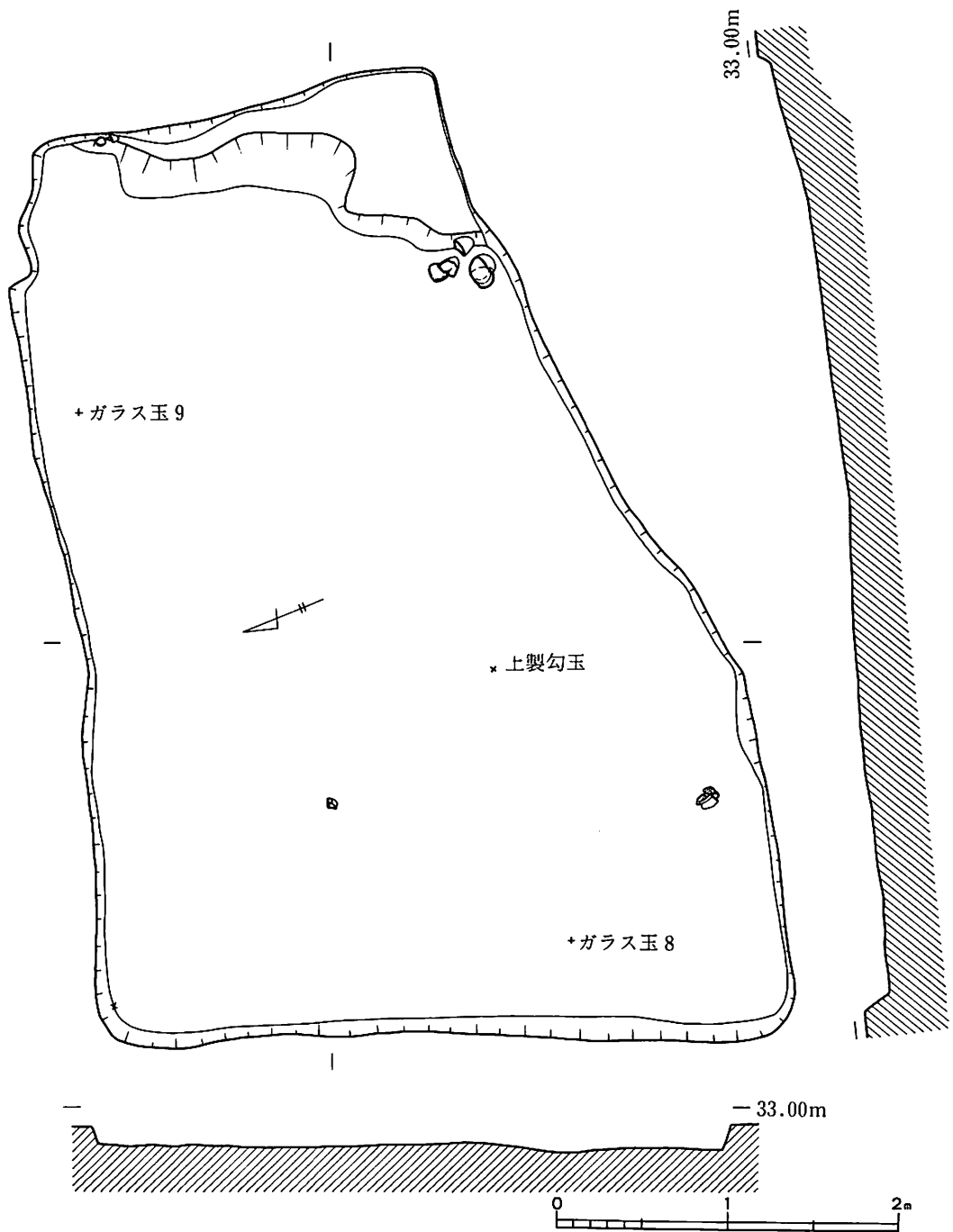
4は口縁部が直口した鉢である。底部は丸底で、表面が荒れ、使用の頻度を考えることができよう。器面は厚く、器面調整はハケ目とナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。

5は表裏2面には条痕を残し、側面には敲打痕を残す安山岩製の石器である。

6は両端を欠く砂岩製の砥石である。使用面は、側面を上面に見られ、かなり研磨している。

7は陶石製砥石の破片である。使用面は2面確認されるが、他の面は剝離している。使用面はなめらかで、わずかにカーブしている。

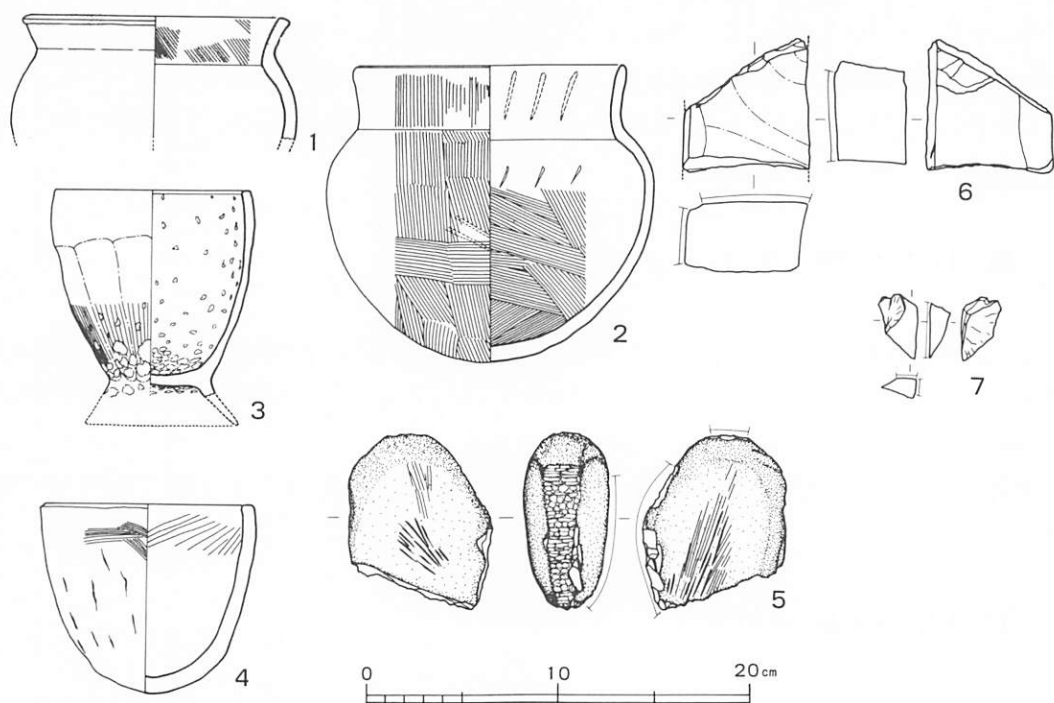
8はガラス製小玉である。青色を呈しているが光沢を欠いている。直径2.8mm、高さ2mm、中心に1.2mmの孔を穿っている。



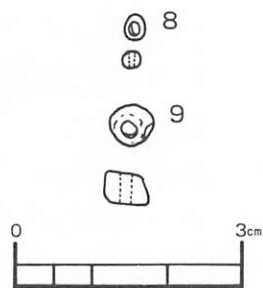
第 35 図 16号住居跡実測図

9は直径6mm、高さ4mmのガラス製小玉である。中心には2mmの孔を穿ち、側面にも孔を穿っている。しかし、この孔は途中で止めている。ガラスとしては粗い。

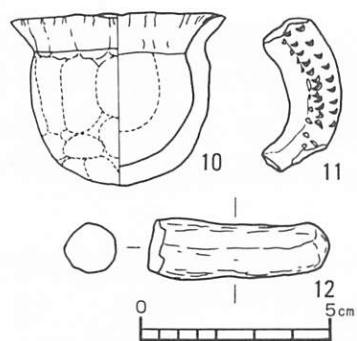
10は、手捏の甕である。外来系の甕を模したこの土器は、器面に指圧痕を多く残している。口縁部は「く」字形に外反し、底部は丸底になっている。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。



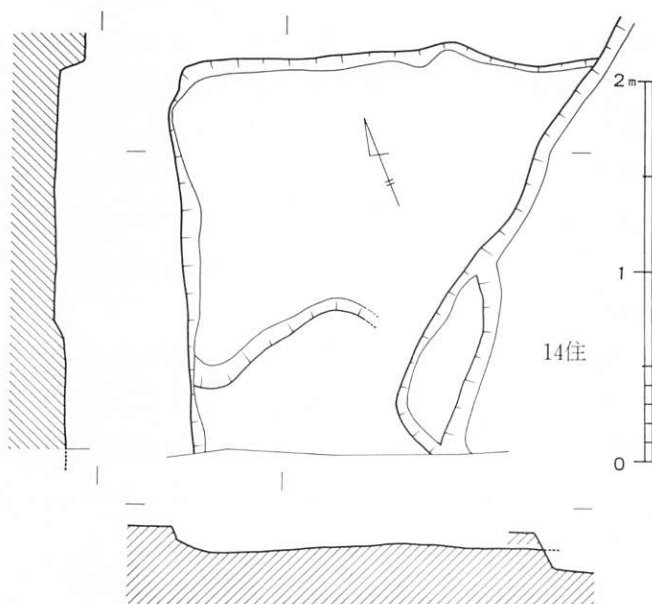
第 36 図 16号住居跡出土遺物実測図



第 37 図 16号住居跡出土
ガラス玉実測図



第 38 図 16号住居跡出土遺物実測図



第 39 図 17号住居跡実測図

11は半環状を呈する土製品で、両端を欠いている。土製勾玉とも考えられるが断定しかねる。側面には刺突文を施している。断面は丸く、器面は全面ナデ仕上げである。

12は棒状を呈する土製品である。基部を欠くため器種の断定ができないが、土製柄杓の柄とも考えられる。

16 17号住居跡（図版4－3第39図）

D－2区東南端に位置し、D－1区にまたがり、南側は調査区を外れる。また、東側は14号住居跡に切られる関係にある。長軸方位や全体の規模は不明である。床面は南側で、約6cm高くなっている。柱穴、炉跡、土壙等は検出できなかった。

遺物としては床面に接して甕の口縁部、脚台、壺の底部等が出土しているがすべて細片のため図化できなかった。

17 18号住居跡（第40図）

D－2、3区にまたがる住居跡で、15、22号住居跡を切り、19号住居跡には切られる関係にある。長軸をN－70°－Wにとる方形に近い平面プランを呈する。ほとんど壁が残っていないので、床面の広がりから全体の規模を確認した。床面は堅く踏み固めたしっかりしたものであった。

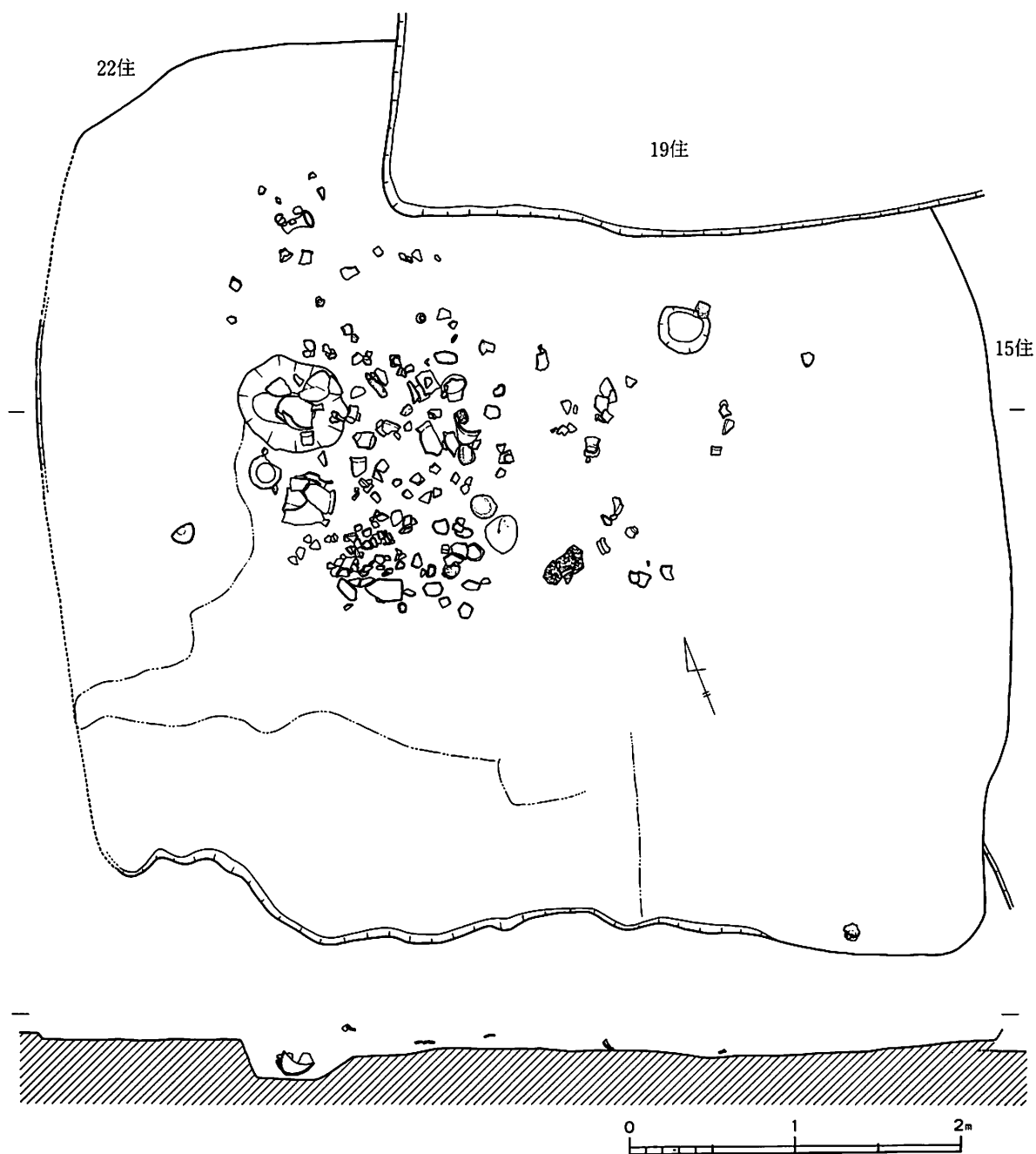
遺物（図版9－11～14第41・42・43図）

住居跡の中央部から北側にかけて、大量の遺物が出土した。床面直上から23cm程の高さの範囲において出土している。本住居跡を廃棄したあと、土器溜めとして使われたものであろう。

1はほぼ完形の丸底の甕である。口径19.9cm、器高38.2cm、胴部最大径22.9cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し先端は平坦になるところと中央部が凹むところがある。胴部はほっそりした倒卵形を呈している。外面は胴部中位以上がタタキ目、下位がハケ目とナデで調整している。内面は胴部中位以上にハケ目を施している。外面には全面ススが付着する。内面は胴部中位以下に焦げ付き痕が見られる。また、この甕が破碎したあと一部の破片は火を受けたらしく、内面にもススが付着している。

2は口縁部を「く」字状に開き、口唇部は平坦にナデられている。頸部は鋭く折れ、胴部は張りが少ない。そのため最大径は胴部中位に有しているが、長胴となっている。底部は欠いているが、脚台を有すると思われる。なお、胴部外面には全面にススの付着が見られる。器面調整は、口縁部では全面ハケ目、胴部は外面にタタキ目を施した後、ハケ目を施している。内面は全面ハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

3は胴部以下を欠く甕である。口縁部は外反気味に「く」字状に鋭く開き、口唇部は内側につまみ上げていて、浅い沈線がめぐらされた状態である。器面調整は全面ハケ目調整である。胴部の張りは少なく、長胴になるものと思われる。底部については脚を有するか、丸底になるかは不明である。胎土には砂粒をわずかに含むが、焼成は良い。



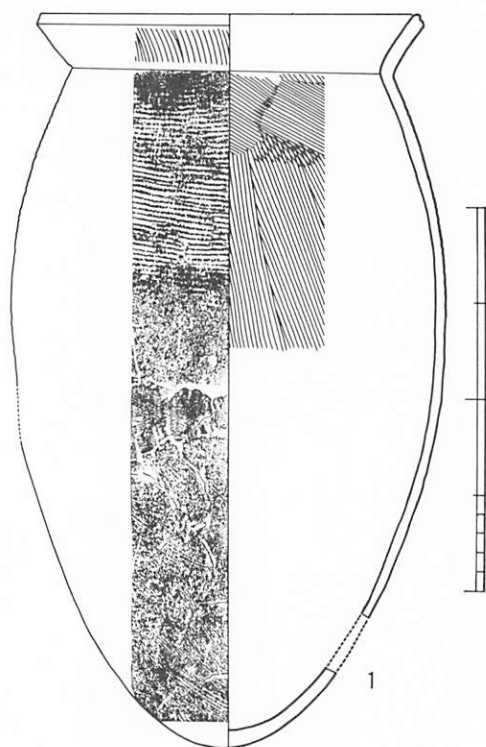
第 40 図 18号住居跡実測図

4 は口縁部を「く」字形に開き、胴部の張りが少ない甕である。口唇部は平坦にナデており、外縁ではわずかにつまみ上げている。中位は反り気味に肉厚となっている。胴部にはわずかに右下が

りのタタキ目を、その後ハケ目を施している。内面には粗いハケ目を施し、口縁部においては、全面ナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。しかし、外面においては器面剥離が見られる。

5は、長胴丸底の甕である。口縁部と肩部を欠き、最大径を胴部中位に配している。胴部外面にはススの付着が見られ、特に底部においては三重の輪を形成するように付着していた。内面においては、こげつきも観察される。器面調整は胴部上位ではタタキ目、下位ではヘラケズリを施している。内面ではハケ目を一部に残し、他はナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

6はくびれ部の細い脚台である。裾部は内湾気味に開き、内面は全面ナデ調整である。外面にはハケ目を残している。胴部以上を欠くが、底にはこげつきが見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。



第 41 図 18号住居跡出土遺物実測図

7は、胴部以下を欠いた壺である。口縁部は大きく開き、頸部に一条の凸帯をめぐらしている。

外面には茶色に近い顔料を塗っており、内面の土器本来の色調と大きく異なっている。口唇部はナデにより、わずかに凹んでいる。器面調整は、ハケ目を2種使用し、外面では細かなハケ目、内面には粗いハケ目を施している。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は良好である。

8は上部を欠く底部で、小さな平底となっている。器種は壺となるであろう。器面にはシャープなハケ目を施していて、内面は全面ナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は比較的良好。

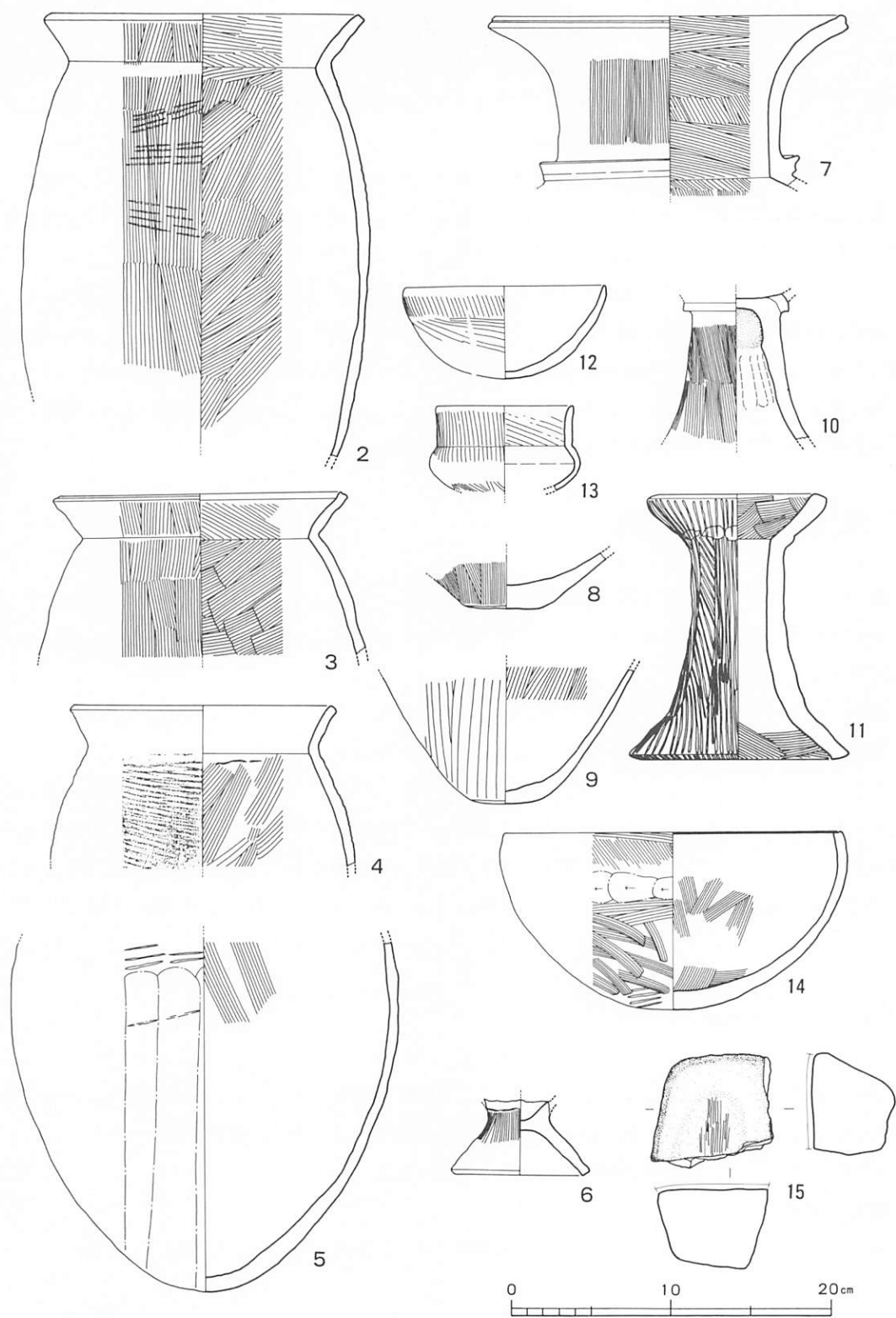
9は上部を欠き、底部のみで平底となる。器種は甕か判断しかねる。外面にはススの付着が見られ、内面ではこげつきも見られる。器面調整は縦方向のナデ調整を施し、内面では粗いハケ目を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

10は高坏の脚部である。坏部と脚裾部を欠いている。坏との接合部には三角貼付凸帯をめぐらしている。脚部外面には細かいハケ目を施し、内面ではナデ調整を施し、接合部では砂粒の付着が見られる。坏部底にも砂粒が付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

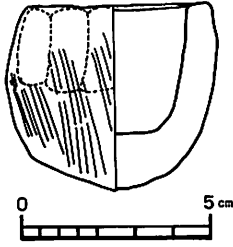
11は外面に粗いハケ目を残す器台である。受部は内湾し、裾部も内湾しつつ開いている。内面では受部と裾部にハケ目を施している。柱状部では、ヘラによる器面調整も見ることができる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

12は口径12.4cm、高さ 5.7cmの鉢である。口縁部は直口気味に大きく開き、底部は丸底となる。

器面調整は、外面に粗いハケ目、内面にはナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。



第 42 図 18号住居跡出土遺物実測図



第 43 図 18号住居跡出土
遺物実測図

13は口縁部は直口し、胴部は浅いが、最大径を上位に有し、大きく張る鉢である。器壁は薄く仕上げられている。器面調整は、口縁部の内外面にハケ目を施し、胴部はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。

14は、口縁部がわずかに内向する鉢である。口径21cm、高さ11cmを測り、鉢としては深いものである。底部はわずかな平坦部を形成し、安定性を保っている。器面はハケ目、ヘラケズリ、タタキを施している。なお、口唇部には凹線をめぐらしている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

15は、使用面を平坦に残す砥石である。周囲は自然面を2面残し、他の2面は欠いている。使用面には細かな線を残して、わずかに中央部で凹んでいる。石材は砂岩である。

16は手捏の鉢で器壁が厚い。底部は歪んでいるが安定性は高い。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。器面には粗いハケ目を施し、その後ナデ調整を行なっている。

18 19号住居跡（第44図）

D-3区に位置し、北側は調査区を外れる。15、18、22、23号住居跡を切り、20号住居跡に大部分を切られる。全体の規模は不明だが、長軸方位はN-25°-Eになると思われる。柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物（第45・46図）

実測できるものはわずかに1点のみであった。

1は、口縁部が極端に短かく、「く」字に開いている。口唇部は平坦にナデられ、端部がわずかにふくれている。頸部は鋭く曲がり、内面にはシャープな稜をめぐらしている。また、外面には頸部と胴部に沈線をめぐらしている。胴部は大きく張り、球状を呈する。特異な器形の土器である。

2はガラス製小玉で青色を呈している。直径2.7mm、高さ2mm、中心には0.7mmの孔を穿っている。

19 20号住居跡（第44図）

D-3区に位置し、19号住居跡を切っている。北側は調査区を外されており規模はわからないが南壁の長さは3.43mを測る。壁は削平を受けてほとんど残っていない。住居跡内施設としては、ピット3個を検出した。炉跡、土壌の確認はできなかった。

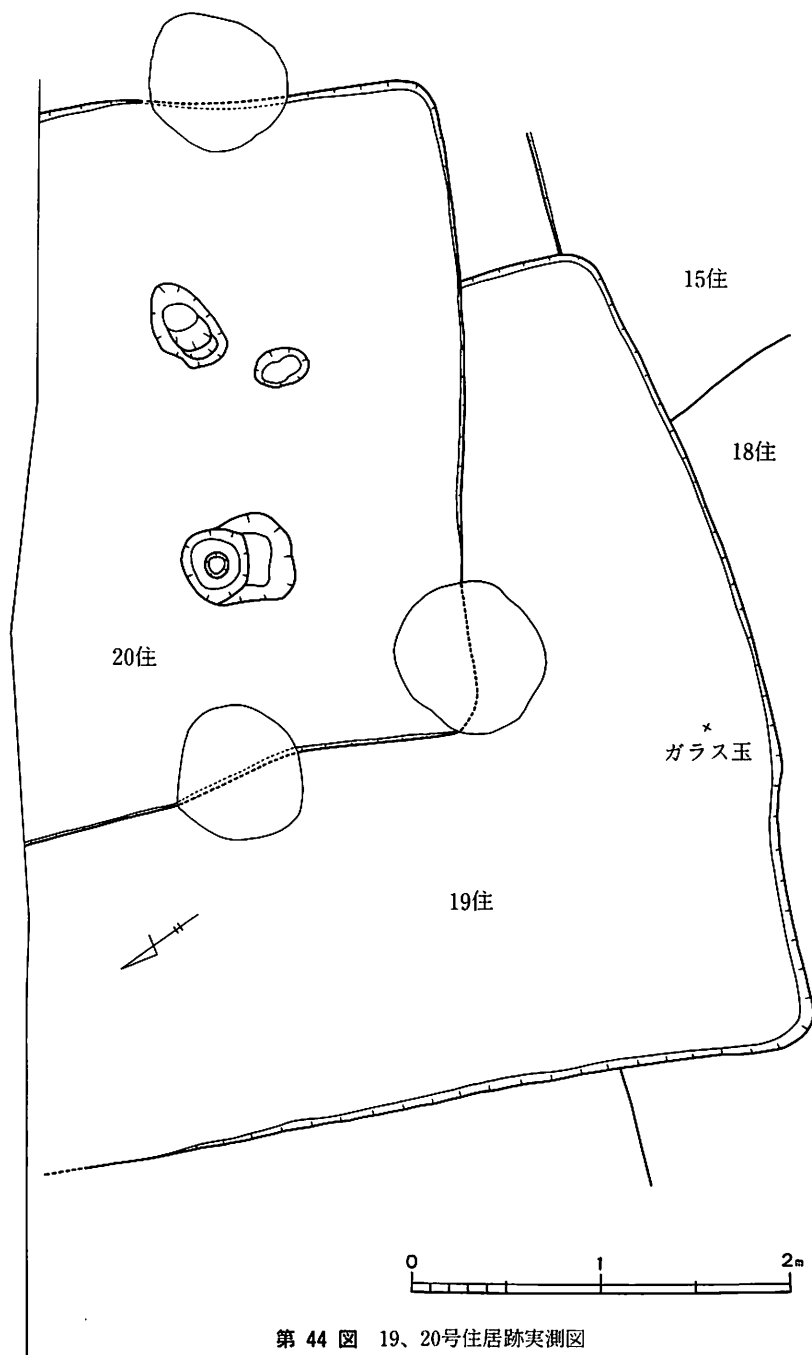
遺物（第47図）

1は安山岩製の石錘である。扁平な礫の両端にノッチを加えたもので、重さ18.4gを測る。

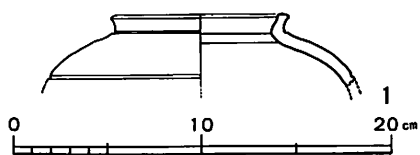
20 21号住居跡

(第48図)

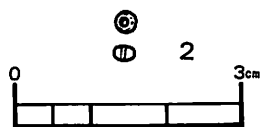
C-2区西南端に位置し、13号住居跡を切り、14号住居跡に切られる。長軸N-22°-Eにとる。東北隅にいびつな状態でベッド状遺構が残存している。



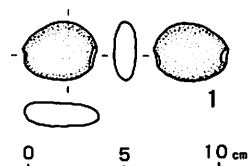
第44図 19、20号住居跡実測図



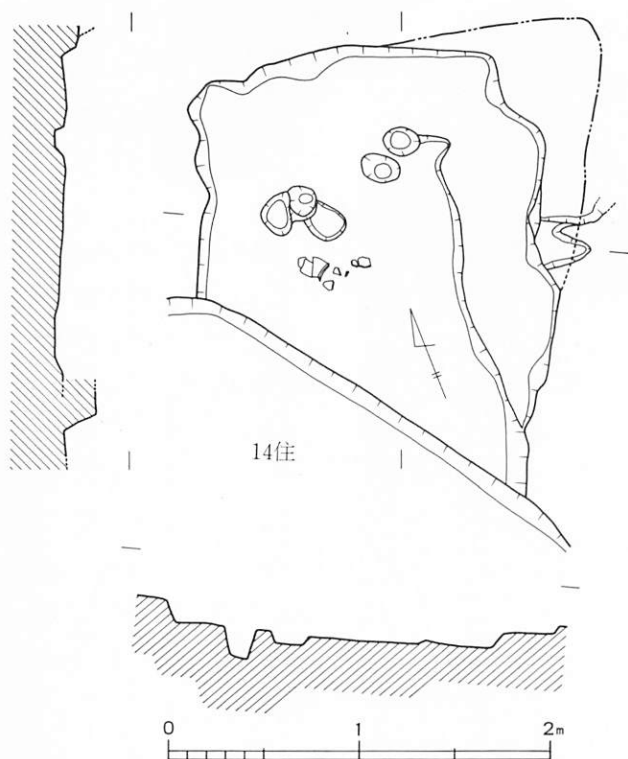
第45図 19号住居跡出土遺物実測図



第46図 19号住居跡出土
ガラス小玉実測図



第47図 20号住居跡出土
遺物実測図



第 48 図 21号住居跡実測図

21 22、23、25号住居跡

22、23、25号の3住居跡はD-3区に位置し、かろうじて床面の痕跡を留めているものである。

3住居跡とも、全体的規模、長軸方位は不明で、住居跡内施設の確認もできなかった。

遺物 (図版10-3 第50・51図)

22号住居跡の床面に接して3点土器が出土したのみであった。

1は甕の脚台で、上部を欠いている。裾部は内湾気味に開き、端部にはシャープな稜をめぐらしている。器面は、外面でハケ目の後ナデ調整を行ない、内面では全面ナデ調整を施している。

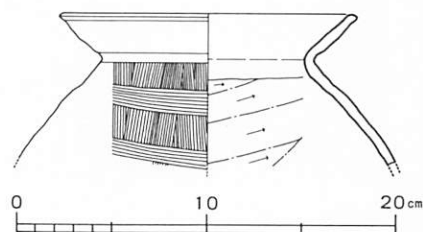
2は全面に指圧痕を残す粘土板である。半折の状態であるが、ほぼ円形に近い形になる。表面には指紋と共に布圧痕も部分的に残されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

これまでに方保田東原遺跡では、3点出土粘土板が出土しており、これを加えると4点を数える。

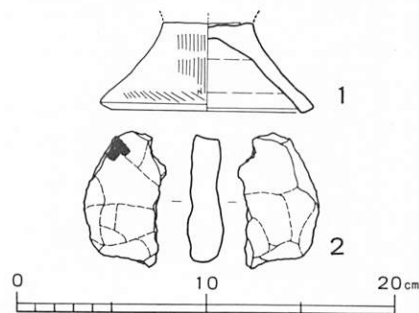
遺物 (第49図)

甕が1点のみ床面直上から出土している。

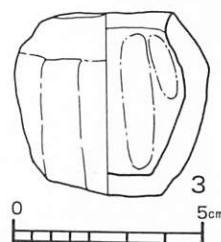
1は外来系の甕で、布留式土器の流れを有している。口縁部は内湾気味に「く」字形に開き、口唇部は外側につまみ出している。中位は肉厚になり、頸部では大きく曲っている。胴部は大きく張り、中位に最大径を有すると思われるが、欠いている。器面調整は、口縁部では内外面共にナデ調整、胴部外面にはハケ目、内面ではヘラケズリが施されている。器壁は薄く、胎土には砂粒を含むが焼成は良い。



第 49 図 21号住居跡出土遺物実測図



第 50 図 22号住居跡出土遺物実測図



第 51 図 22号住居跡出土遺物実測図

3は手捏の無頸壺である。口径3cm、高さ4.8cmを測り、器壁は厚く仕上げられている。胎土に小さな砂粒を含むが、焼成は良い。

22 24号住居跡

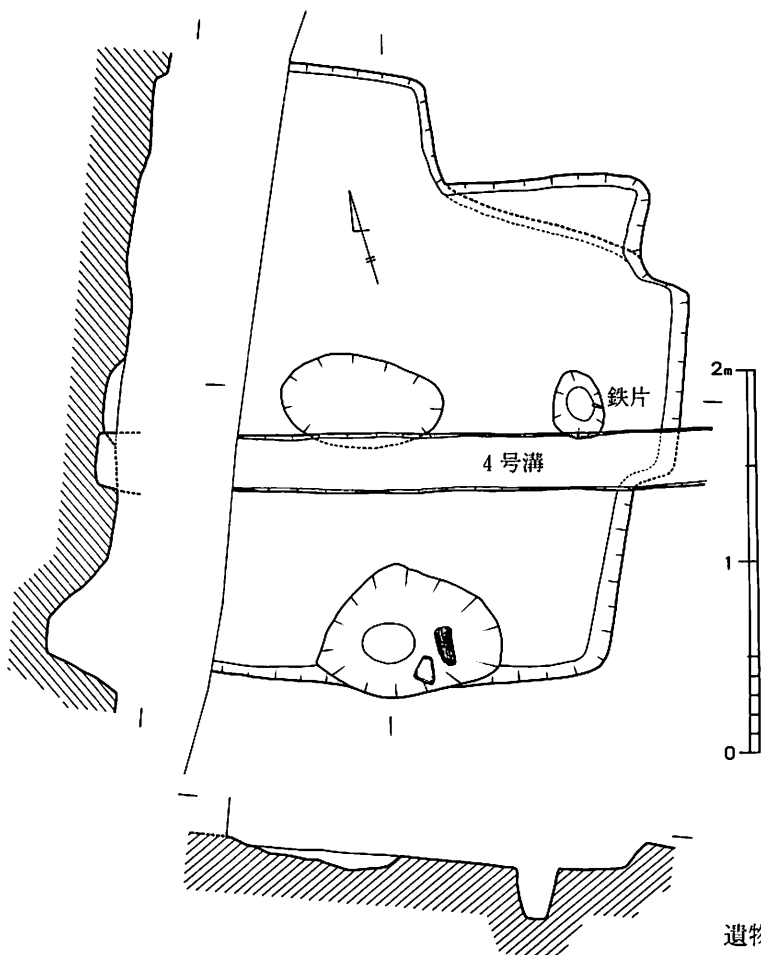
(第51図)

調査区の西端、F-2区に位置し、長軸をN-73°-Wにとる。西側から流れて2号溝に注ぐ4号溝が住居跡を東西に分断している。壁の周回は整った隅丸方形とはならず、東北隅付近ではかなり変則的な凹凸がある。床面は堅く締ってしっかりしたものであった。住居跡内施設としては、東壁寄りに柱穴1個、ほぼ中央に88cm×49cmの平面長楕円の皿状の炉跡、また、南壁に接して床面からの深さ約30cmの土壌1個を検出した。

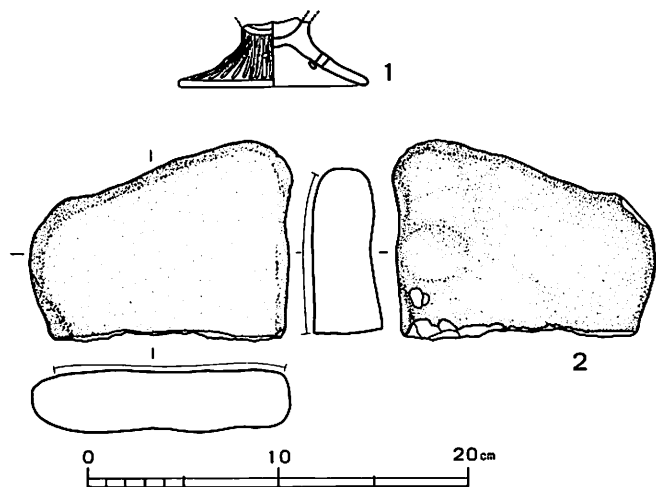
遺物 (第53・54図)

遺物の量は些程多くなく、また、ほとんど土器の細片であった。図示した石皿は土壌の上位で、また鉄片は柱穴の中程から出土している。

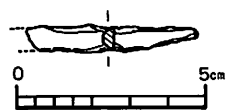
1は上部を欠く脚台である。裾部を大きく開き、中位には2個の円孔を3ヵ所に穿っている。器面は外面にはヘラ研磨、内面は全面ナデ調整



第 52 図 24号住居跡実測図



第 53 図 24号住居跡出土遺物実測図



第 54 図 24号住居跡出土遺物実測図

を施している。

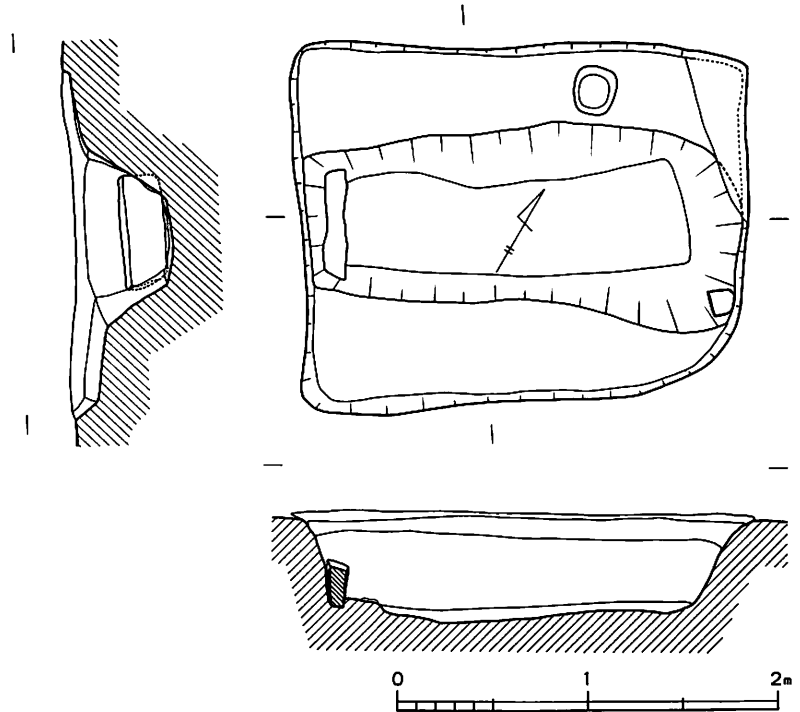
2は扁平な礫を利用した石皿である。使用面は一面で、表面には光沢を帯びる研磨が施され、ほぼ平坦な使用痕である。石器自体手ずれを生じて、特に折断面はなめらかである。

3は器種不明の鉄片である。一面は平面になっており、断面形はカマボコ状を呈している。

23 1号土墳墓

(図版6-1第55図)

C-2・3区にまたがって存在する。1号溝と15号住居跡に挟まれた位置にあるが切り合い関係はない。墓墳の上面は後世に削平を受けていると思われるが、2.37m×1.86mの現在のプランとさほど変らない隅丸長方形の平面プランであったと思われる。主体部はさらに一段深く掘り込まれており、掘込上面で長さ2.



第55図 1号土墳墓実測図

89m、幅0.89mを測り、深さは0.39mを測る。長軸方位をN-61°-Eに向ける。西南の端に端石を1枚立てている。この他に石材は遺存しておらず、抜き取られた痕跡も見られないので、造営当初から端石1枚のみ立てただけの施設であったものと思われる。また蓋石らしいものも見られなかった。

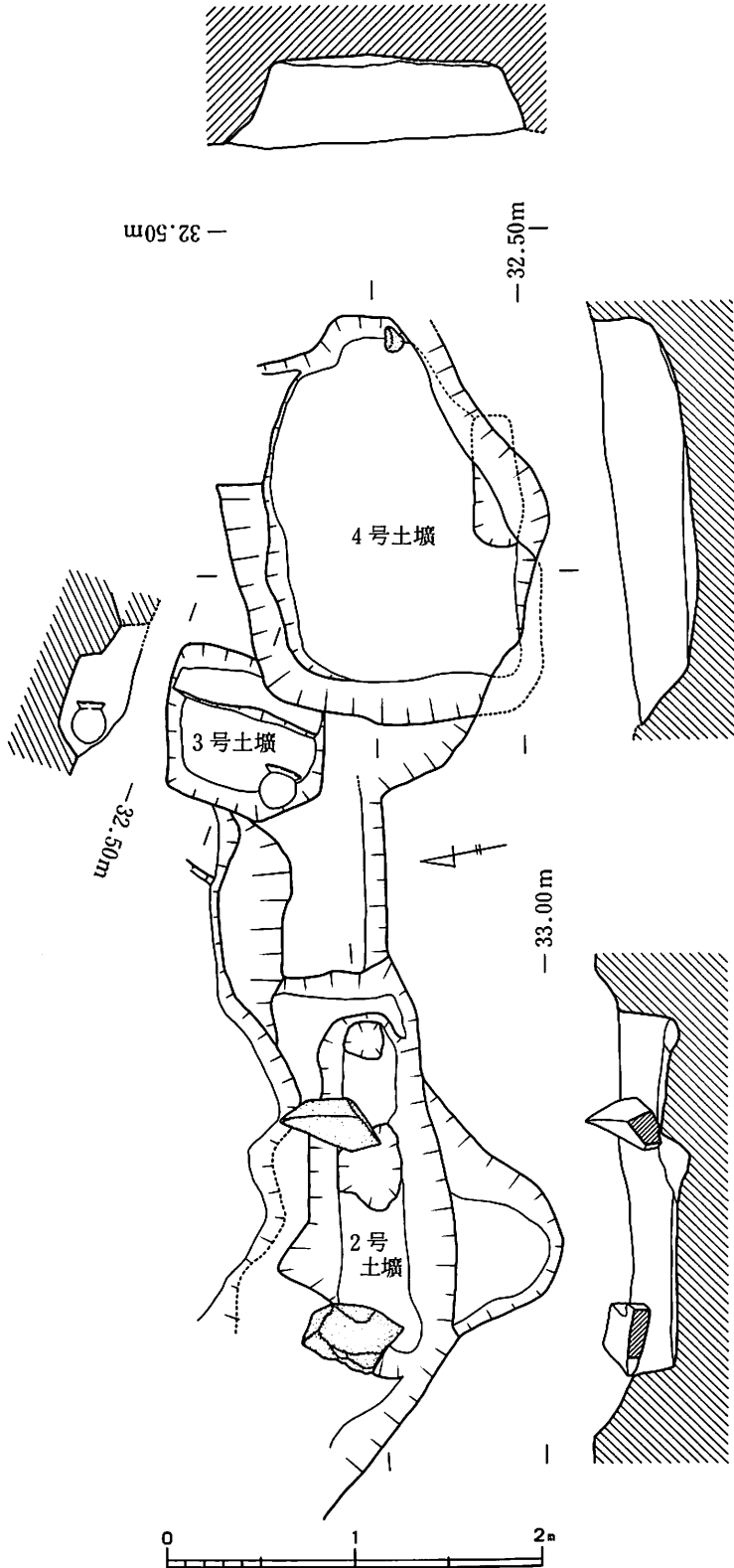
遺物は主体部の掘込上面の東南端より土器片が1点出土した以外幅葬品等は見られなかった。

24 2号土墳墓 (図版6-1第56図)

C-2区、1号溝の南壁に接して構築されている。長軸方位をN-70°-Wにとる。掘込上面での長さは1.95m、幅は中央部で0.77m、深さ0.25m前後を測る。西側に1枚と、東端から0.44mのところに1枚石材が見られるが、これは蓋石の石材の残存であろう。

副葬品等遺物は無かった。

25 3号土墳墓 (第56 図)



第 56 図 2、3、4号土墳墓実測図

C-2区、2号土墳墓から東へ1.15mの位置に存在し、東南端を4号土墳墓に切られている。土墳の上面には3~10cmの厚さに白粘土が被っていた。平面プランは0.8m×0.76mの方形を呈し、深さは中央部で0.23mを測る。東壁に接して幅18cm程に床面が一段高くなっている。

遺物 (図版10-1第57図)

西南隅に完形の甕が口縁部をやや下に向けた格好で出土している。

外来系の甕である。口縁部は内湾気味に「く」字形に開き、口唇部は平坦になり、浅い凹線をめぐらしている。胴部は倒卵形で、最大径を中位に配している。底部は尖り気味の丸底である。器面は口縁部では全面ヨコナデ、胴部は外面をハケ目、内面はヘラケズリと指圧痕を底部近くに残している。なお、肩部には波状文を配している。器壁は薄く仕上がり、胎土にも小さな砂粒を含んで、焼成は良い。底部近くでは、外面にスス、内面に焦げ付きが残る。

26 4号土墳墓 (第56図)

C-2区、1号溝の南壁に接して存在する。西北端のコーナーで3号土墳墓を切っている。長軸をN-72°-Wにとり、断面計測部で2.17m×1.6m、深さ0.43mを測る。土墳の幅は東側で狭くすばまっており、床面は西側が若干下り気味となる。

遺物は出土していない。

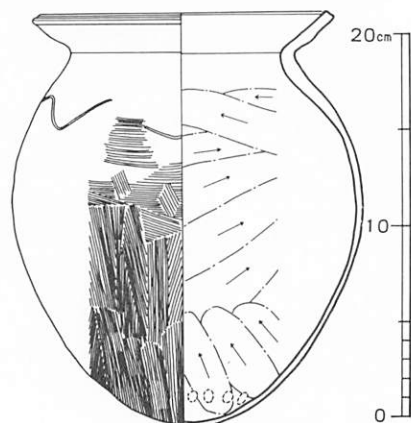
27 石蓋土墳墓 (図版5 第58図)

C-1区に位置する。大半の部分が調査区を南へ外れるため、区域を拡張して検出作業を行った。7枚の板石と1個の河原石を用いて蓋石にしており、長軸方位はN-16°-Eを示す。墓墳の上面の形態は不明である。石蓋の石材の隙間は白粘土で入念に目貼りを行なっている。土墳は長さ1.82m、幅は中央部で0.39m、深さ0.15mを測り、北側で幅が広がっていることから、頭位は北側であったと思われる。

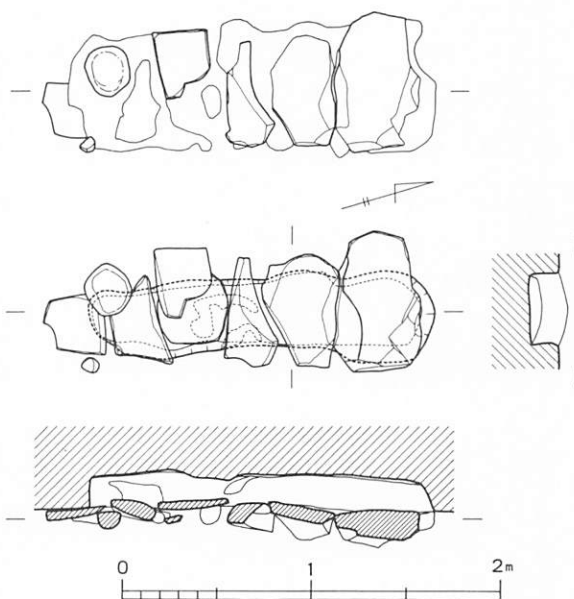
土墳内からは幅葬品、その他の出土は見られなかった。

28 1号溝 (図版6-1)

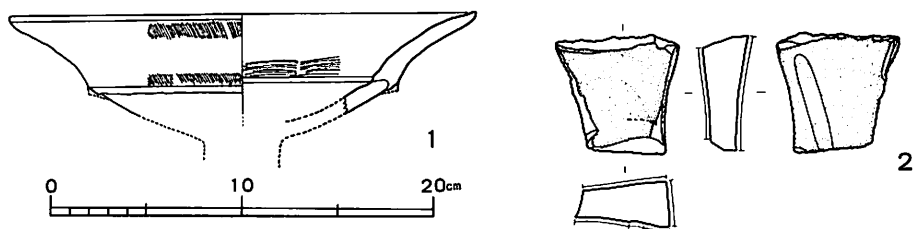
調査区北端に位置し、東西約13m、南北6m以上の規模を有している。形状は不整形で、西側においては端部を見ることができる。底は平坦で遺物の残存は少なく、埋土も一時期に堆積した可能性が高いと判断された。さらに、南側壁面では8号住居跡を切ったり、土墳墓や石棺が築かれていた。この遺構が果して溝であるということに関しては疑問が残るところである。溝であれば一定の幅をもったり、方向性が見られるが、この遺構にはこれらの点を確認することができない。むしろ遺構の全貌が明らかになっていない現段階では断定しかねるが、もし仮に溝でないとするれば何であろうか。壁面や、石棺破損の状態から土取りの為の土墳ではないかとも考えられる。この遺構の底には良質の白粘土層が在り、この白粘土採取用のものとも考えることができよう。



第57図 3号土墳墓出土遺物実測図



第58図 石蓋土墳墓実測図



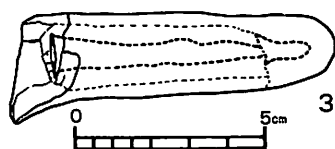
第 59 図 1 号溝出土遺物実測図

遺物（図版10－2第59・60図）

1 は口縁部のみの高坏である。口縁部は外反しつつ大きく開いており、胴部との接点には稜線をめぐらしている。器面は全面にハケ目とヨコナデを施しており、内面の一部には円塗りが施されている。しかし、文様としては不整形になっており、単なる彩色を施したものと思われた。胎土、焼成共に良く仕上がっている。

2 は砂岩製の砥石である。周辺を欠くが、研磨はかなり進んでいる。

3 は棒状土製品で基部を欠いている。内部は中空となり、先端部で粘土接合面が観察される。基部は次第に大きくなりつつあり、柄杓になるものと考えられる。なお、この土製品は粘土を板状にし、巻き上げて形を作り、周囲を粘土で整形している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。



第 60 図 1 号溝出土遺物実測図

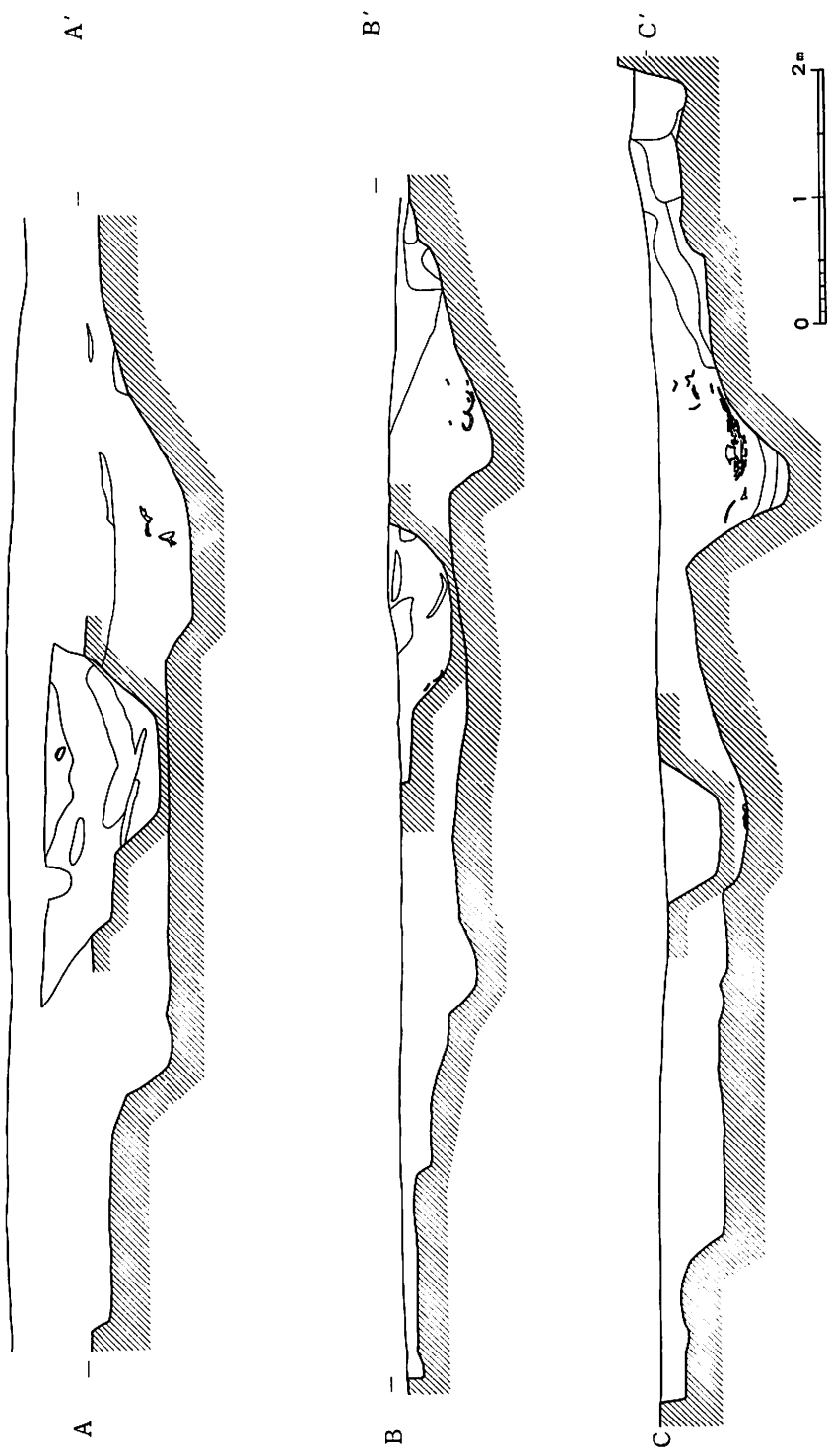
29 2号溝（図版6－2・3・7－1第61・62図）

調査区の西端、E－1、2、3 区を縦断して南北に走る溝状遺構である。溝上面を削平されているので2本の溝が別個に存在しているように見えるが、実際は1本の溝であり、その下部において掘込む位置を北側と南側で変えているに過ぎない。北側の溝においては溝の西壁に沿って、また、南側の溝においては溝の東壁に沿って、礫を敷いた非常に固く締った道路状遺構が見られる。これは第62図のA－A'における断面図で判るように、もともとは溝の中段に設けたステップであり、それを通路として使用したものであろう。床面はA－A'、B－B'、C－C'の各地点で標高33.42m、33.44m、33.50mを測り、南側に行くに従って低くなっている。

図からもわかるように2号溝は、3号溝に乗るかたちで作られており、しかも3号溝と同じ方向に走っている。このことは2号溝と3号溝の間に何らかの関連性を思わせるが、両溝の覆土の相違、また2号溝内から白磁片や近世のものと思われる磁器片の出土を見ることから、3号溝とは大幅な年代のへだたりがあり、調査区内においてはたまたま、3号溝の上に2号溝が掘られたものであろうと思われる。

溝の時期については、遺物が小片でさらに底面から浮いた状態で出土しており、断定は出来ないが、近世かあるいは中世のもので、それ以前までは溯らないと思われる。ちなみに、調査区西端に位置する24号住居跡を切断して東西方向に走る小溝（4号溝）は、この2号溝に注ぎ込む関係にあ

るので、2号溝の枝溝であり、同一時期の遺構と考えてよからう。



第 61 図 2、3 号溝断面図



第 62 图 2·3号溝実測図

30 3号溝 (図版6-23第61・62図)

調査区の西端に位置し、南北に走る大溝である。溝全体の幅はB-B'において7.4mを測る。この大溝内にさらに3本の溝を確認した。まず西側の溝であるが、ほぼ南北方向に走り、幅はC-C'地点で1.8m、B-B'地点で1.1mを測る。断面形状は北端部では、床面がやや幅広だが、所謂V字形を呈しているものの、B-B'地点ではその形が崩れ始めて西壁はかなり緩い傾斜になっている。また溝の深さも浅くなる。そして、調査区南端における形状はV字形ではなく、逆梯形を呈するに至り、東壁が低くなっている。この溝が環溝となるか否かは今回の調査面積が狭いので何とも言えないが、調査区内においては溝の湾曲は見られない。

溝内からは大量の遺物が出土した。溝の中位から上位にかけて密に出土し、下位及び底面からの出土は少ない。出土状態は、ある程度の期間に自然に堆積したような遺物もあれば、35のように破碎した土器の破片を重ね、一括して投げ込んだと思われるもの、また乱暴に投げ入れたのではなく、溝内に置いたという表現が適当な、完形に近い甕等も見られる。また、C-C'の断面図(第61図)に顕著に見られるように、一括して捨てられた土器片のかたまりが西から東へ傾斜しており、おそらく、土器を廃棄する場合もっぱら溝の西側から行なったものと思われる。

2本目は3号溝中央部を南北に走る浅い溝である。この溝はC-C'地点で確認したもので、床面に礫が散らばっていた。B-B'地点、A-A'地点では検出できなかった。

3本目の溝は大溝の東寄りを、若干蛇行気味に走っている。東側の掘込み面は壁を成して残るが、西壁は南側のB-B'地点、A-A'地点でわずかに見られる程度で、北側ではほとんど大溝の床面とフラットの状態になる。この溝からは遺物はほとんど出土せず、北寄りに礫が散在していた。

以上3本の溝及びそれらを含む大溝(3号溝)は、同一時期に一気掘られたものか、あるいは各々に先後関係があるのかは不明であるが、溝内の覆土にほとんど層位的変化が見られず、互いの切合い関係も見られないので、大溝全体がそれ程長い時間を経ないで埋まったか、あるいは人為的に埋められた可能性が強いであろう。

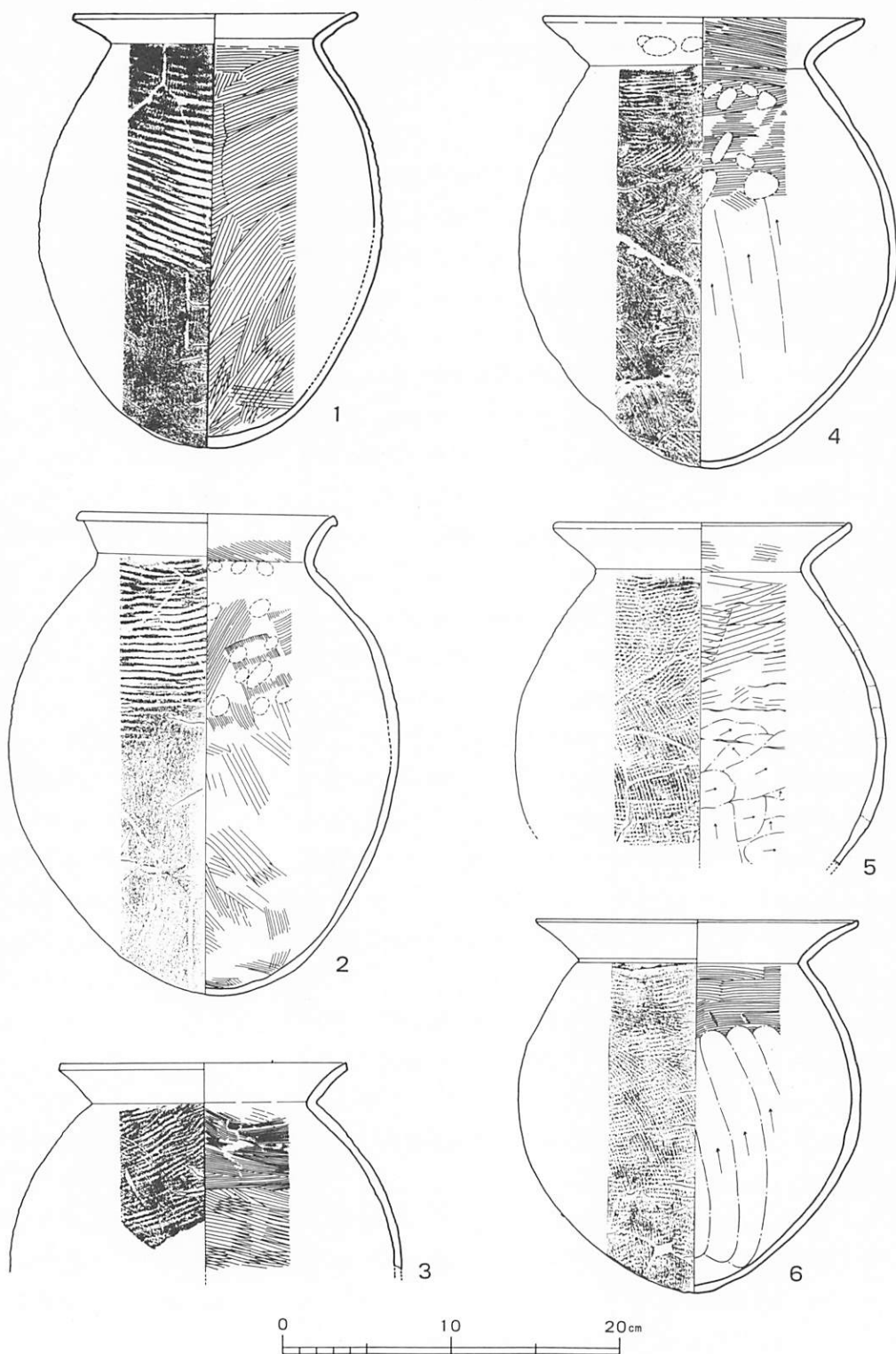
遺物 (図版10-4~9、11・12・13-1、4~6 第63~71図)

70~72、77、78の5点以外は全て西側の溝からの出土である。

1は完形の甕で口径16.6cm、器高25.4cm、胴部最大径20.3cm。口縁部は大きく外反して広がり、先端は丸まる。外面胴部の上半は斜位のタタキ目で締め、下半はハケ目とナデで仕上げる。内面はハケ目を施す。全体的に丁寧な作りである。

外面にはススが口縁部にまで付着しているが、片側に顕著に残っており、内面底部の焦げつきも同じ部位が最も濃い。また下から外面を見ると、底部にススが濃く付き、その回りに同心円状にススのふっ切れた部分があり、さらにその上位で再びススが濃くなっている。おそらく、支柱を立てたカマドにおいて使用されたものと思われる。

2もほぼ完形の甕で、口径14.8cm、器高28.1cm、胴部最大径22.9cm。口縁端部の外側がめくれたように突出している。胴部形状は均整がとれておらず歪になっている。外面は底部から肩部にかけ



第 63 图 3 号沟出土遗物实测图

てススが付着しており、内面は底部に焦げ付きが残る。

3は甕の破片で、復元口径17cm弱。外面は左下りのタタキ目と粗いハケ目、内面は目の大きいハケ目のあと肩部では目の細かいハケ目を施している。外面は全面ススが付着するが、内面の汚れは見られない。

4は完形の甕で口径18.8cm、器高26.6cm、胴部最大径22.3cm。口縁部はくの字に外反し先端は丸まる。胴部は丸く張り出し、底部はやや尖底気味である。外面は全面タタキ目を施し、そのあとナデとハケ目を施している。内面は口縁部から肩部にかけてハケ目、下半がヘラケズリである。また肩部には指頭痕が多く残っている。外面のススの付着は、1の甕と同様で底部と胴部中位に顕著で胴部下位はススがふっ切れた状態である。内面の胴部下位に焦げつき痕が残っている。

5は胴部下半を欠く甕である。口縁部平面形は楕円形を呈している。外面の調整は丁寧だが内面はやや雑で、ヘラケズリとハケ目を施しているが粘土紐の継目が明瞭に残る。内面の焦げつき痕は胴部中位以下に見られるのに対し、外面のススは中位以上に顕著に付着する。

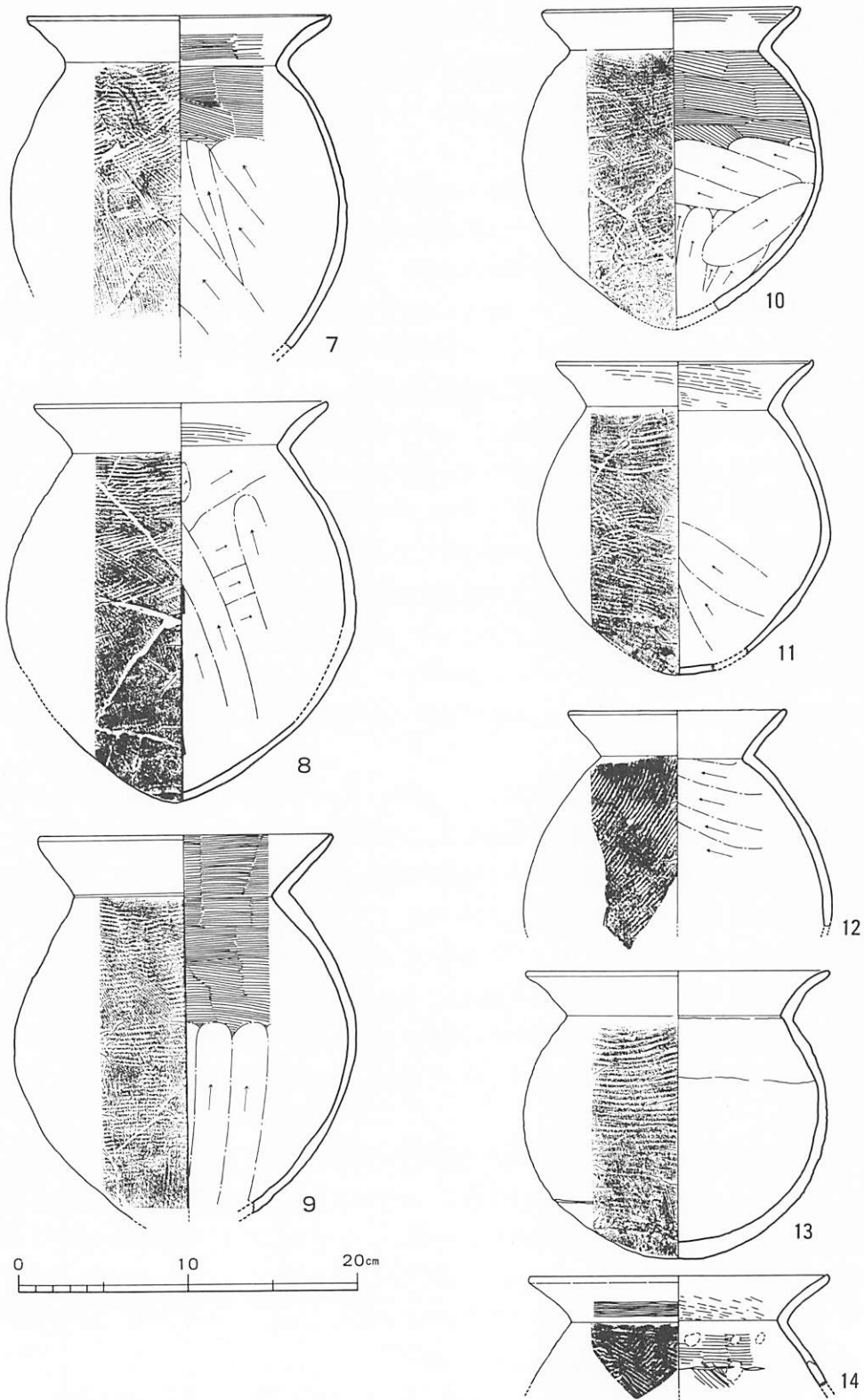
6は外来系の甕である。口縁部は外反しつつ大きく開き、口唇部は内側にわずかなつまみ上げが見られる。胴部は倒卵形で、最大径を中位に配している。底部は尖り気味になっている。器面は、口縁部では全面ナデ調整、胴部外面には全面タタキ目を施した後、ハケで掻き消している。タタキ目は底部では水平、中位ではやや右上がり、その下部ではさらに水平、底部では右上がりの方向を示している。胴部内面は、肩部にハケ目、それ以下をヘラケズリで調整を施している。器体外面には全面ススの付着が見られ、内面では胴部中位以下で焦げ付きが見られる。胎土には砂粒が少なく焼成は良い。

7は外来系の甕である。口縁部は外反し、口唇部は内側につまみ上げている。胴部はあまり張らず、中位に最大径を有し、底部は尖り気味になる。胴部外面には全面にタタキ目を施し、その後中位以下をハケ目で掻き消している。タタキ目は頸部近くは水平、肩部では右上がりの方向を示している。胴部内面は肩部にハケ目、中位以下はヘラケズリである。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成はきわめて良好である。そのため器壁がきわめて薄く仕上がっている。

8はほぼ完形の甕で口径17.1cm、器高23.4cm、胴部最大径は中位にあり20.5cmを測る。底部は尖底気味の丸底である。胴部の外面は頸部から底部までまずタタキ目を施し、そのあと主に下半部にハケ目を施している。内面はヘラケズリである。外面にはススの付着が顕著であるが、内面はほとんど汚れていない。

9は外来系の甕である。口縁部の開きは、他の外来系甕に比べゆるやかに開き、直口気味に口唇部へと続いている。胴部は中位に最大径を有し、張りは大きい。底部は欠いており、尖り気味の丸底になると思われる。器面は、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目。胴部外面は全面タタキ目の後、ハケ目を施している。タタキ目は水平に近い方向で全面に施されている。内面は肩部までハケ目、その下はヘラケズリを施している。底部は意識的に欠いたようである。外面には全面ススの付着が見られ、内面は底部近くに焦げ付きが見られる。

10は外来系の甕である。口縁部を「く」字形に開き、口唇部内側につまみ上げが観察される。頸部内面にはシャープな稜をめぐらし、胴部は球形をなす。そのため最大径を胴部中位に有している。



第 64 图 3 号溝出土遺物実測図

また、底部を欠いているが、わずかに尖り気味の丸底になると思われる。器面外側には全面にススの付着が著しい。器面調整として、口縁部外面はヨコナデ、内面にはわずかにハケ目を施している。胴部には水平および右上がりのタタキ目を、その後ハケ目を施している。さらに底部近くではヘラケズリで文様をかき消していた。内面では、肩部近くはハケ目、それより下部にはヘラケズリを施していた。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

11は口径14.8cm、器高18.4cmの甕である。口縁部は「く」の字形に外反し、先端はつまみ上げられている。最大径は胴部中位にあり、底部は丸底である。外面はタタキ目、ハケ目、ナデで調整し内面は下半をヘラケズリしている。外面にススの付着と変色が見られ、かなり使い込んでいる。

12は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。外面は左下りのタタキ目のあと右下りのハケ目を施し、内面はヘラケズリである。外面にはススが付着している。

13は外来系の甕である。口縁部は外反しつつ「く」字状に開き、胴部は球形をなしている。底部は丸底で、わずかに尖り気味となっている。特に胴部下位から底部にかけては、器面の剝離が著しい。器面調整は、口縁部では内外共にナデ調整、胴部には外面は、右上がりのタタキ目の後、ハケ目を施している。内面には粘土接合面を残し、全面ナデ調整を施している。底部は器面剝離のためナデたようになっている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

14は口縁部から肩部にかけて残る甕の破片で、口径17.3cm。外面はタタキ目のあとハケ目を施している。口縁部外面にススの付着が顕著に見られる。

15はほぼ完形の甕である。口径14.5cm、器高19.6cm、胴部最大径18cm。外面は傷みがひどいが、タタキ目をナデ潰したあとハケ目を施しているようである。内面はハケ目のあとナデている。外面は全面にススが付着し、胴部下半は器面の剝落が著しい。内面は底部付近に焦げ付き痕がある。

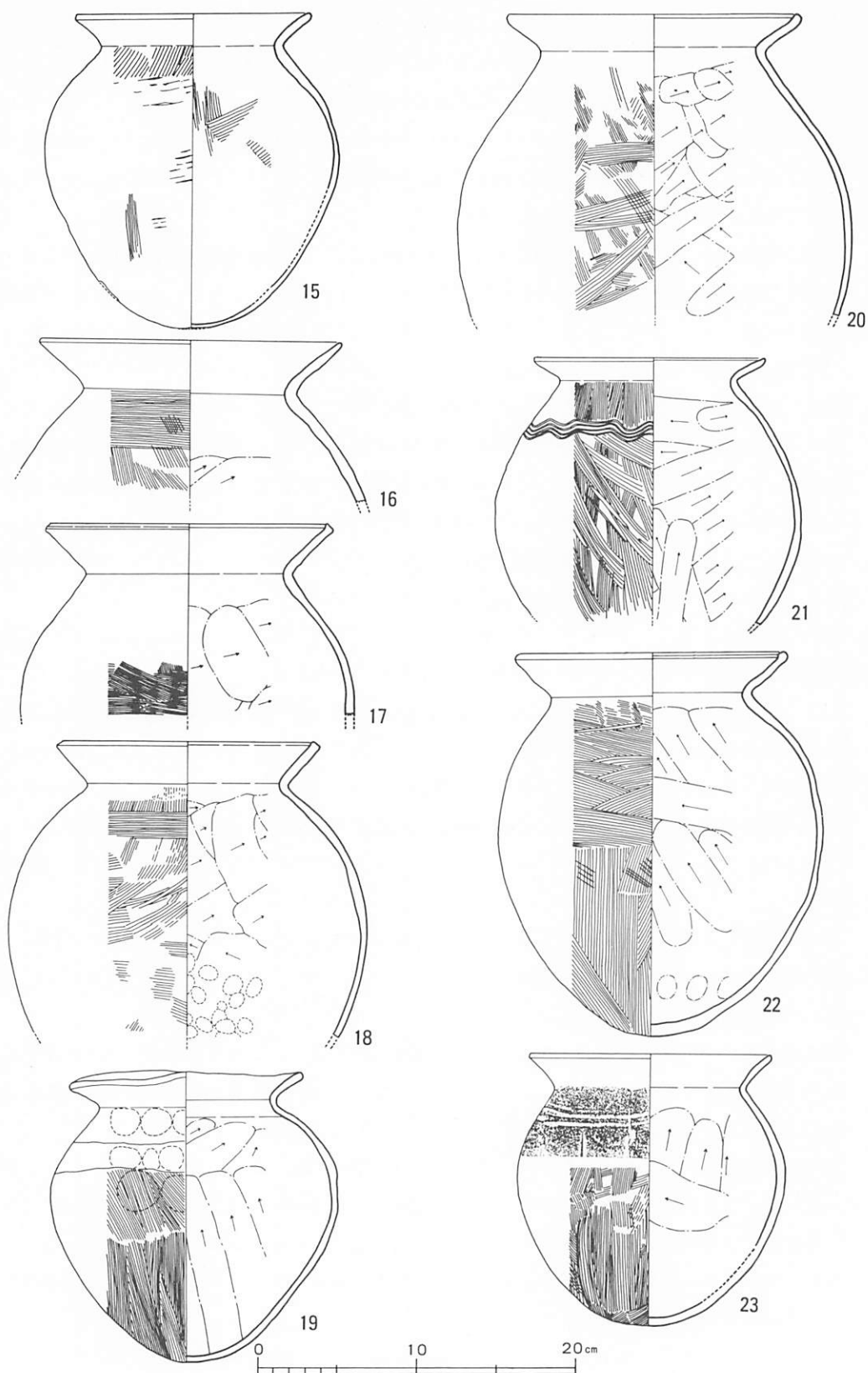
16は胴部中位以下を欠く甕で、口径18.6cm。口縁部は直線的に外反して伸び、端部は丸くおさまる。外面はハケ目、内面は肩部以下がヘラケズリである。ススの付着、及び内面の汚れは見られない。

17は口縁部から胴部中位にかけて残る破片で、復元口径17.4cm。口縁部は「く」の字形に外反し、端部で摘み上げられている。外面胴部中位以下にハケ目を施し、内面は横位のヘラケズリである。外面にススの付着が顕著である。

18は甕の破片で復元口径15.5cm。胴部は丸く膨らみ、外反した口縁部は端部の内側が横ナデにより突出気味になっている。外面はハケ目のあと薄くナデており、内面はヘラケズリで下位ではそのあと指頭によって調整している。外面には全面ススが付着し、内面下半に変色が見られる。

19の甕は手捏風の土器で、口縁部から肩部にかけて器面の凹凸が著しい。口縁部は「く」字状に開いているが、その形状は波状を呈している。胴部のやや上位に最大径を有して、肩が張った状態となっている。底部はやや尖り気味の丸底となっている。器面はハケ目とナデ調整を外面に、ヘラケズリを内面に施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。なお胴部外面にススの付着が著しい。

20は甕の破片で底部を欠損する。「く」の字形に外反した口縁部は先端内側で丸く膨らんでいる。外面は方向は不規則だが丁寧なハケ目を施したあと薄くナデており、内面はヘラケズリである。外



第 65 図 3 号溝出土遺物実測図

面にはススの付着が顕著である。

21は外来系の甕である。口縁部は短かく外反し、胴部中位に最大径を有している。底部は欠くが尖り気味の丸底になる。器面は胴部外面には全面ハケ目を施し、肩部には波状文をめぐらしている。

さらに、部分的にはタタキの痕を残している。胴部内面は全面ヘラケズリである。器壁は薄く、胎土・焼成共に良い状態である。

22は口縁部が内湾気味に「く」の字形に開く甕である。口唇部は内側に大きくつまみ上げ、全面ナデ調整を施している。胴部は中位に最大径を配し、底部はわずかに尖り気味である。胴部外面においては、ハケ目を主に施し、部分的にタタキ目を残している。なお肩部には沈線をめぐらしている。内面はヘラケズリで、底部近くには指圧痕を残している。底部外面にはススの付着が著しく、内面では焦げ付きが残っている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。

23はやや小振りの甕で口径15cm、器高17.1cm、胴部最大径16.9cmを測る。外面は目の細かいハケ目を施し、肩部には4条から2条の凹線文を廻らしている。内面はヘラケズリのあと、下半ではナデで仕上げている。外面肩以下にススが付着し、内面胴部中位以下に焦げ付きが見られる。

24は甕の破片である。外面はハケ目、内面は器壁が荒れており判別しにくいヘラケズリ調整であろう。外面にススの付着が顕著である。

25は小型の甕である。口縁部は「く」字に外反しつつ開き、胴部は球形を呈している。底部は尖り気味の丸底である。胴部外面においてはヘラ条痕による調整を施し、内面はナデ調整である。胎土には砂粒が少なく、焼成は良い。

26は在地系甕である。小形甕で底部は脚台となる。脚台は欠いているが、上部はよく残っている。

口縁部を「く」字に開き、口唇部は平坦に調整されている。胴部の張りは少なく、器面は平坦部を残し、ゆるやかな稜が3本めぐっている。調整段階で生じたものである。

27は甕の脚部である。所謂砂付土器であるが、この資料はその部分をナデ潰している。外面にススが斑点状に付着している。

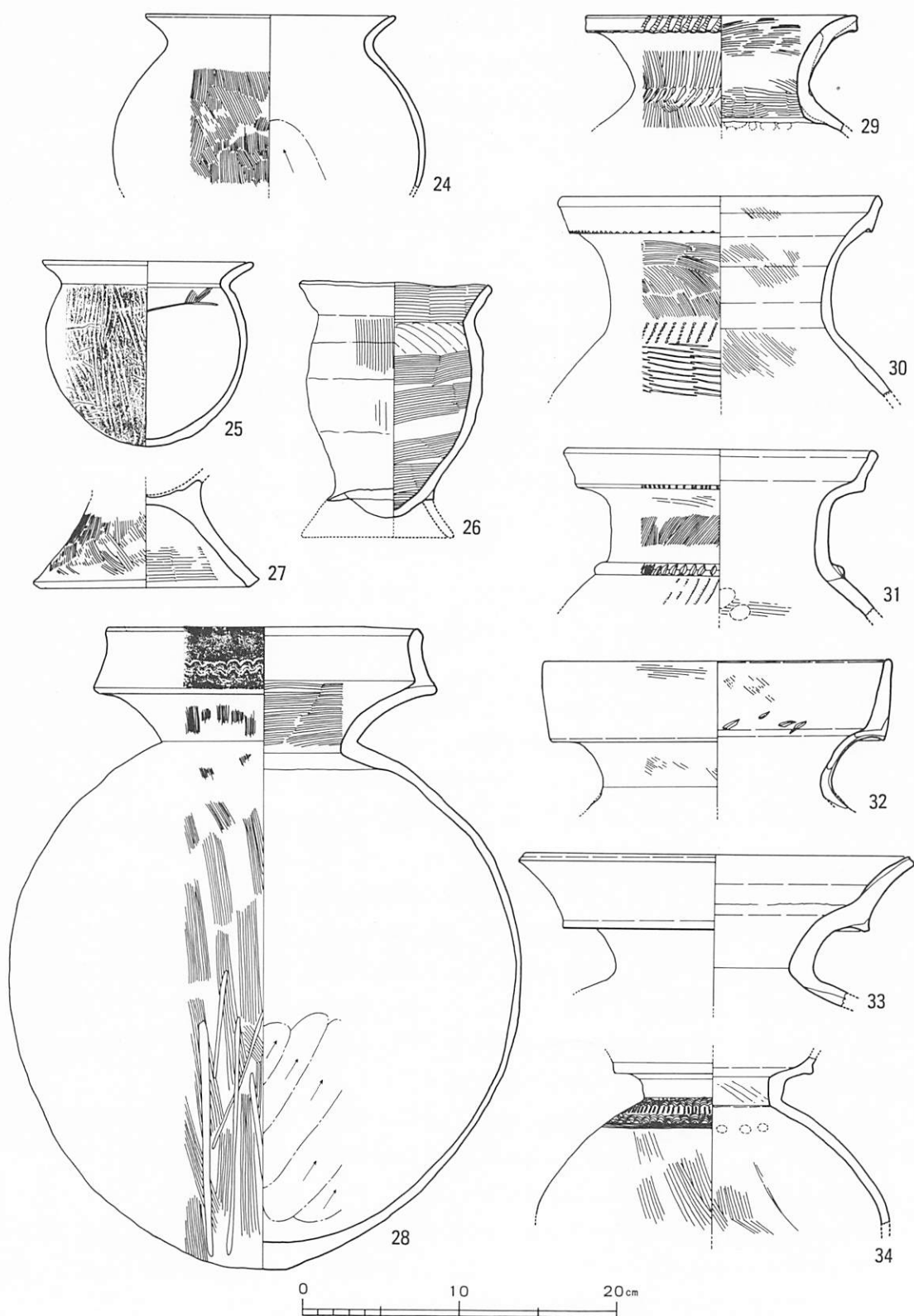
28は東九州的要素を多く含んだ複合口縁壺である。口縁部は内向気味に直口し、口唇部においてわずかに反っている。外面には櫛描波状文をめぐらしているが、文様は拙悪である。頸部は大きく開き、胴部へは鋭く折れて続く。胴部は球形を呈し、底部は小さな平底となっている。器面調整は頸部の内外面共にハケ目を施し、胴部では外面にハケ目とヘラ研磨、内面ではヘラケズリを施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成はあまり良くない。そのためハケ目が消えている部分が見られる。口縁部内面においてススの付着が著しい。

29は壺の口縁部片で、復元口径17.3cmを測る。口縁部は外湾して立ちがり、端部はほぼ垂直に仕上げられている。ハケ目原体によるものと思われる刻目を口縁端部と頸部に施している。

30は複合口縁を有する壺である。複合部は短かく直口し、下端に刻目をめぐらしている。頸部はゆるやかな曲線を描き、櫛描き刺突文をめぐらしており、器面にはきめ細かなハケ目を施している。

胴部は欠いているが、肩部にタタキ目を残している。頸部内面には、かすかに稜線を数本残し、全面にハケ目を施している。胎土には小さな砂粒をわずかに含み、焼成は良い。

31は複合口縁壺の破片である。頸部に凸帯をめぐらし刻目を付す。



第 66 図 3 号溝出土遺物実測図

32は複合口縁壺の口縁部で復元口径21.2cm。口縁部の製作過程がよく見てとれる資料である。内外面とも器面の荒れがひどいが少しハケ目が残っている。またそのハケ目に入り込んだ格好でスの付着が見られ、内面は煮沸により変色している。

33は複合口縁の壺である。頸部以下を欠いているが、外来系の土器といえる。

頸部は大きくなり、さらに口縁部も外反している。口縁部と頸部の接合部には粘土を貼付けて補強している。器面は全面ナデ調整であり、口縁部内面には特に焦げ付きが見られる。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

34は複合口縁をもつ壺である。頸部は短かく直口し、口縁部へは直角気味に開いている。そのため屈曲部はいずれも鋭い稜線を描いている。胴部は球状を呈し、肩部には櫛描文を施している。文様は、上から波状文、廉状文、波状文、沈線となっているが、技術的には未熟な面が多い。

35は複合口縁をもつ大型壺である。口縁複合部は内湾しつつ大きく開き、口唇部は平坦に調整されている。頸部には貼付凸帯をめぐらし、端部に刻目を施している。胴部中位に最大径を有するため球形を呈しており、下位では底部に向って直接的になっている。底部は平底で、ヘラケズリで平坦にしているが、不整形のため安定性に欠けている。器面調整は口縁部は両面ハケ目の後、ヘラ研磨を行なっている。頸部は外面をハケ目の後ナデ調整、内面はナデ調整の後にヘラ研磨。胴部外面はタタキ目を施した後、ハケ目を全面に行ない、さらにヘラ研磨を行なっている。内面はハケ目とナデ調整である。胎土には小さな砂粒を含んでいるが、焼成はきわめて良い。なお、この土器は外来系土器である。

36は口縁部が外反気味に大きく開く壺である。最大径を胴部中位に有し、底部は小さな平底となっている。胴部には2ヶ所に粘土接合面が残されている。器面調整は、口縁部は全面ヨコナデ、胴部外面はタタキの後ヘラ研磨。内面はナデ調整と、部分的にヘラによる線刻が見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

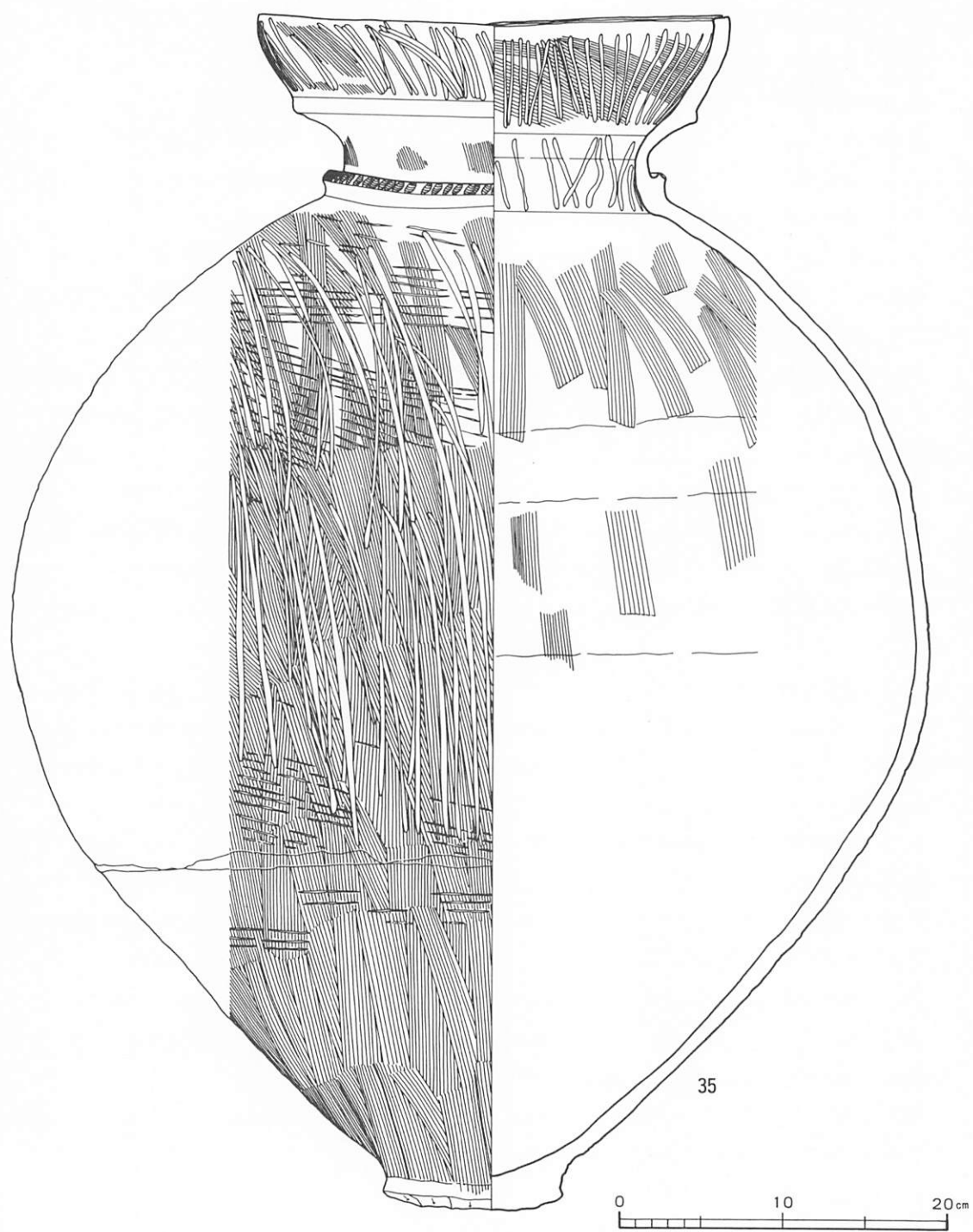
37は口縁部が外反しつつ大きく開く壺である。頸部は鋭く折れ胴部へと続いている。胴部には水平方向のタタキ目を施した後、部分的にハケ目を施している。口縁部外面はハケ目の後ヨコナデ調整を施し、内面にはハケ目を残している。さらに、器面剝離も見られる。胴部内面には指圧痕を施しハケ目とヘラケズリを施している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良くない。

38は上半部のみ残る壺で口径15.7cm。内面をハケ目で調整したあと肩部のみ粘土紐を貼り付けて補強し、頸部付近にハケ目を施している。調整は非常に雑であり、粘土紐を指頭で押圧しているが接合部が明瞭に残っている。外面は粗いハケ目調整である。

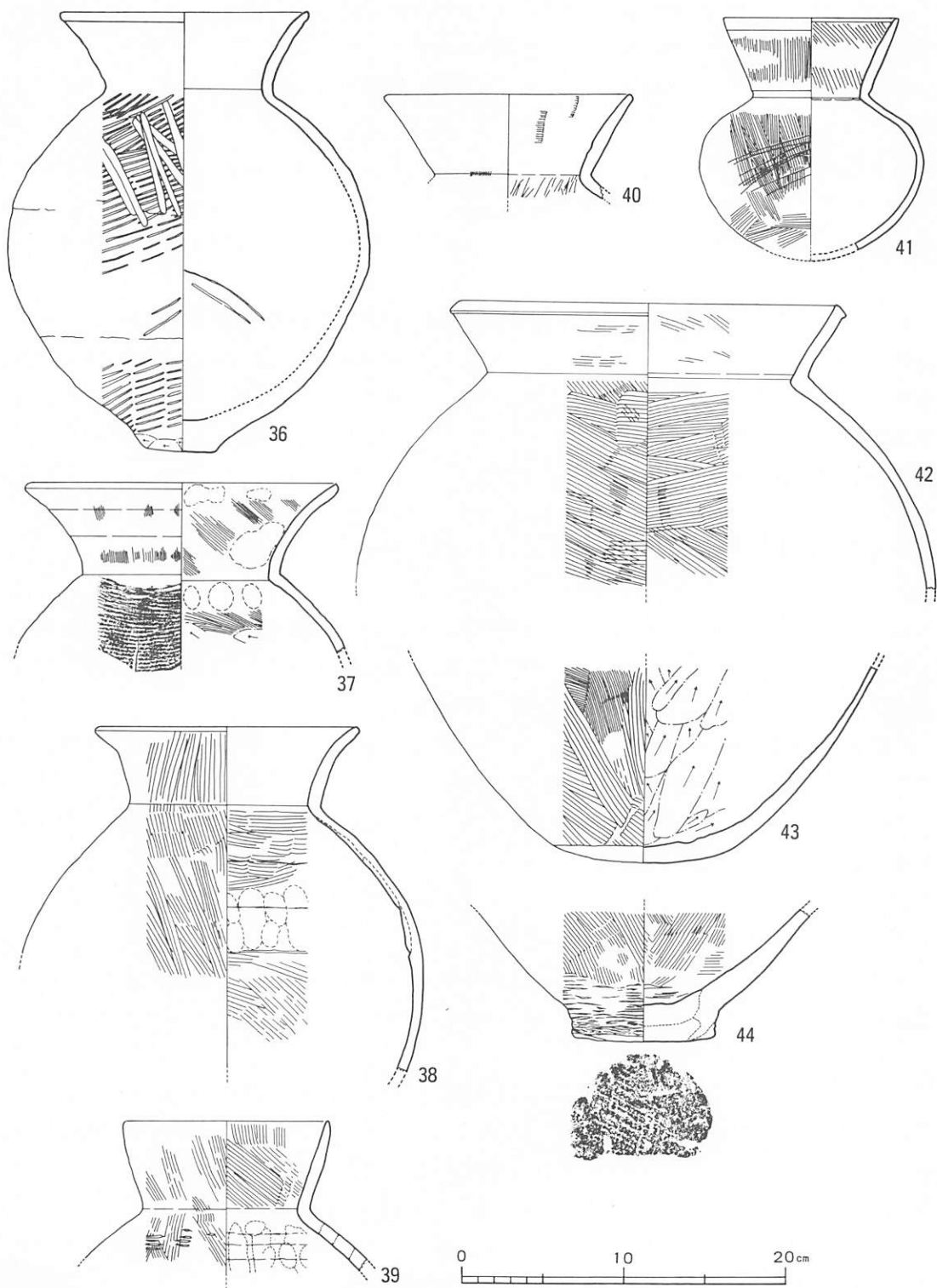
39は口縁部から肩部にかけて残る壺で、口径12.2cm。口縁部はやや外反して立ち上がり、先端は丸まる。外面胴部はタタキ目のあとハケ目を施している。内面は指頭によって調整しているが、粘土紐の接合部が見てとられる。

40は壺の口縁部で、口径14.8cm。内外面とも器壁の剝落が著しい。

41は口縁部が直線的に開く壺である。頸部は鋭くくびれている。胴部の張りは、やや上粒に有し大きく張っている。底部は欠いているが、丸底となる。器面調整は外面にハケ目とヨコナデ、内面はハケ目、ナデ調整を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。



第 67 图 3 号沟出土遗物实测图



第 68 图 3 号沟出土遗物实测图

42は壺の破片で、復元口径23cm強を測る。「く」の字形に外反した口縁部は先端で内外に突出する。胴部は丸く張り出し、内外面ともハケ目調整を施す。

43は壺の底部であろう。外面は目の細かいハケ目のあと粗いハケ目を施し、内面はヘラケズリで仕上げている。

44は壺の底部であろう。外面は底部付近にタタキ目が残る。また底部には、その原体ははっきりしないが格子目状のスタンプが薄く残っている。

45は高坏で口縁部と脚部を欠く。外面はナデ、内面はハケ目のあとナデ、そして底部付近では放射状にヘラ研磨している。

46は高坏で、脚部と坏胴部を欠いている。口縁部は長く大きく開いている。口唇部にはわずかに沈線をめぐらしている。坏胴部は極めて浅く、坏部の大半を口縁部が占めている。器面調整は、外面をナデ調整を行なった後、ヘラ研磨を行なっている。外面はナデ調整を施している。胎土には砂粒を含んでおらず、焼成は良好である。

47は脚台を欠く高坏である。口縁部は長く、内湾気味に大きく開いている。胎土には砂粒を多量に含むが焼成は良い。器面はハケ目調整を主に行なっている。

48は高坏の坏部である。外面は横位の粗いヘラ研磨、内面はハケ目調整のあとナデで仕上げている。

49は坏部のみ残る高坏である。口径23.5cmを測る。外面はハケ目を施したのちヨコナデしている。

50は高坏で、脚部を欠く。口径22.2cm、深さ 6.2cm。内面はヘラ調整、外面は斜位のハケ目のあと横位のヘラ研磨を行なっており、丁寧な仕上げである。

51は高坏の脚部の破片である。外面はハケ目をナデ消し、内面は柱状部はヘラケズリ、裾部はハケ目である。径 0.7cmの円孔を推定 4 個穿っている。

52は高坏の脚部である。内外面ともナデ調整であるが、内面に若干ハケ目が残っている。裾上部に径 0.9cmの円孔を 4 個穿っている。

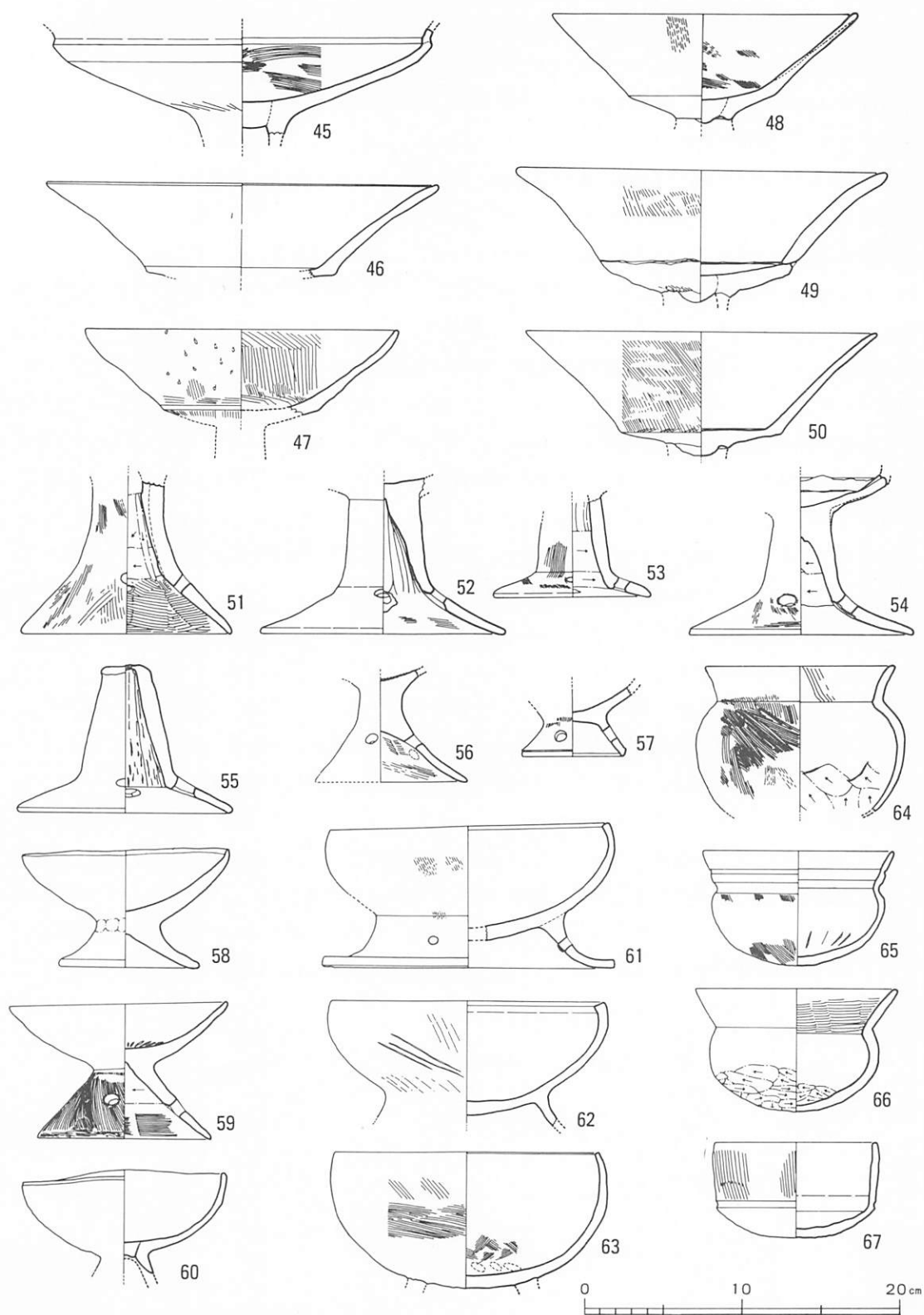
53は 3 号溝内西側溝の上面から出土している。裾端部径 9.8cmで、扁平に広がり、径 0.8cmの円孔を 4 個穿っている。

54は高坏で口縁部を欠く。口縁部は体部との接合部から剥がれ落ちている。坏部内外面、及び脚部外面は入念にヘラ研磨を行ない、脚部内面は柱状部で横位のヘラケズリ、裾部でナデ調整を行なっている。大変丁寧な作り方をしている。

55は土師器の高坏である。坏部を欠くが、柱上部以下は完全な姿をとどめている。柱状部は太く高く、裾部はほぼ水平に近い角度で開いている。さらに、くびれ部分には 4 個の円孔を配している。器面は柱状部外面ではナデ調整の後ヘラ研磨を施し、内面はシワを残しているが、ヘラケズリを行なっている。裾部は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

56は高坏の脚部である。全体的にいびつな形状を呈している。外面はヘラ研磨、内面はハケ目とナデで仕上げている。径 0.8cmの円孔 3 個を穿っている。

57は床面直上から出土したミニチュア土器との中間的な脚台である。脚裾部には 3 個の円孔を配している。端部はつまみ上げが見られ、外面では稜線をめぐらしている。胴部内面ではヘラ研磨を



第 69 图 3 号溝出土遺物実測図

施しており、他の面ではハケ目とナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。

58は脚台を有する鉢である。坏部は口縁部を大きく開き、口唇部は直口気味に山形を呈している。脚部は坏部に比べ小さく、短い裾部となっている。器面は全面ナデ調整を施している。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。

59は完形の高坏で坏部径13.8cm、器高 8.5cm、脚端部径10.9cmを測る。脚部に直径 0.9cmの円孔を3個穿っている。

60は口縁部が不整形で、わずかに波状を呈している。さらに口唇部直下には浅い沈線がめぐっている。胴部はヘラ研磨を全面に施し、脚部は欠損しているが、同様にヘラ研磨を施すものと思われる。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

61はほぼ完形の台付鉢である。口径17cm弱、器高 8.8cm。脚部に径0.6cmの円孔を2個対で3箇所合計6個穿っている。

62は脚台を有する鉢である。口縁部は内向しつつ大きく開き、外面には粗いハケ目を施し、内面は全面ナデ調整を施している。脚台は裾部を欠いているが、大きく開くと思われる。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

63は台付鉢であるが脚部を欠損している。口径16.2cm、高さ 8.7cmを測る。外面には全面にススが付着し、内面にも変色が見られる。

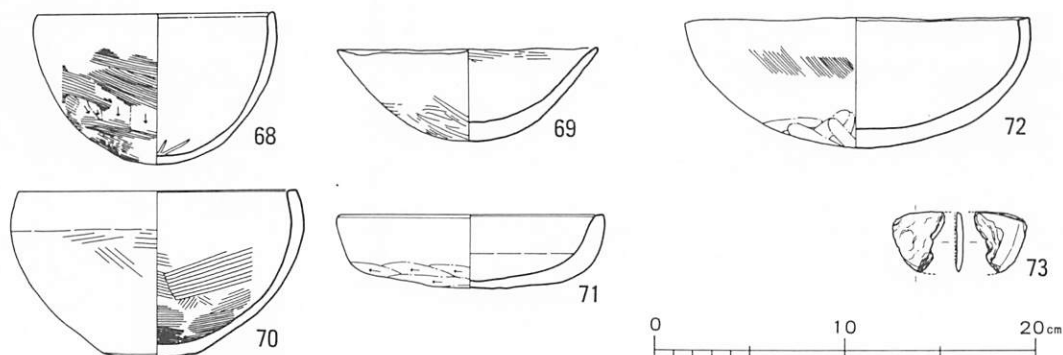
64は底部を欠く鉢で、口径11.8cm。内面の下位はヘラケズリを行なっている。外面には全面ススが付着し、内面には変色が見られる。

65は口縁部が大きく開き、中位には浅い凹線をめぐらし、頸部にも同様の凹線をめぐらしている。胴部の張りや上部に位置し、丸底となっている。そのため比較的深い胴部となっている。

器面調整は、胴部外面にきめ細かなハケ目を施しているが、全面にナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

66はほぼ完形の鉢で、口径12.5cm、器高 7.8cm。底部は内外面ともヘラケズリを行なっている。

67は口縁部が長く直口する鉢である。胴部は浅く、頸部には沈線をめぐらしている。器面調整は口縁部外面にハケ目を施し、その他全面ナデ調整を行なっている。胎土には砂粒と共に貝殻の細片を含んでいる。焼成は良い。



第70図 3号溝出土遺物実測図

68は完形の鉢で口径12.3cm、器高8cmを測る。外面はまず縦位のヘラケズリを行ない、ハケ目とナデ調整により仕上げている。内面はヘラケズリのあとナデている。

69は完形の鉢で、口径13.7cm、器高4.9cm。成形及び器面調整は雑である。

70は完形の平底の鉢で、口径13.6cm、器高8.8cmを測る。口縁部はやや内傾し、端部は水平に仕上げられている。内外面ともハケ目を施しており、外面はほとんどナデ消している。斑状のススの付着が見られる。

71は土師器の埴である。器壁が厚く仕上げられている。口縁部は短かく直口し、底部はヘラケズリによって整えられている。器面は底部以外は全面ナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

72は口径17cm、器高6.8cmの鉢である。口縁端部平坦で、若干凹むところもある。外面は右下りのハケ目を施し、底部はヘラケズリを行なっている。内面はナデ調整である。

73は結晶片岩製の石庖丁片である。側面は剝離し、端部を欠いている。

74は口縁部が「く」字状に外反し、肩部が張り、底部は平底になっている。胴部にはハケ目を施し、他はナデ調整を施している。

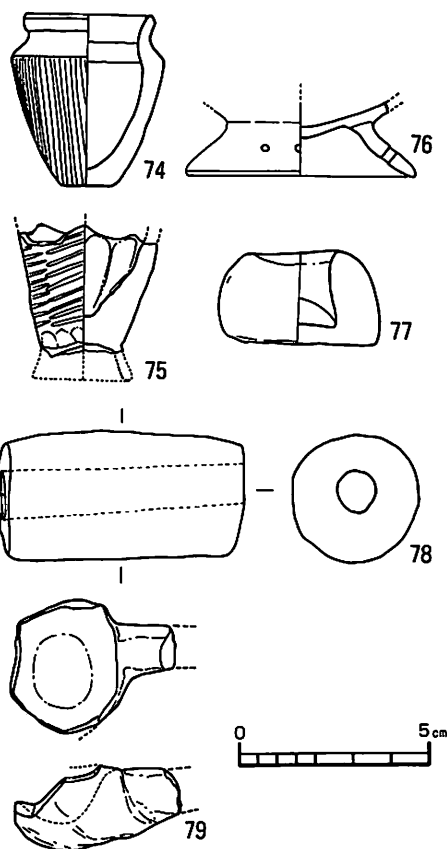
75は脚を有する甕である。口縁部と脚部を欠いている。胴部外面にはタタキ目を残し、内面には指圧痕を残している。胎土には砂粒が多いが、焼成は良い。

76は脚台部のミニチュアである。裾部には2個の円孔を有している。胎土には砂粒を含み、焼成は良くない。

77は使途不明の土製品である。中心に直径1.8cmの孔を穿っているが、土器を簡略化したものとも考えられる。

78は大型の土錘で、長さ6.3cm、直径3.3cmの大きさで、直径約1cmの孔を穿っていて、重さ81gを測る。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

79は土製柄杓であるが、口縁部と柄端部を欠いている。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。



第71図 3号溝出土ミニチュア土器実測図

31 E-2区Pit内（第72図）

1は3号溝に在る直径66cm、深さ50cmのピット内から底部に横たわるように出土した。口縁部から胴部上位にかけて欠いている甕である。在地系の甕で、底部に脚台を有している。胴部は長胴で器面には外面にわずかにタタキ目が残され、内面は全面ハケ目を施している。

脚台は高く、器壁も薄く仕上げられ、全面にハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。

32 遺構に伴わない遺物 (図版13-9~13、 第72~74図)

1は円塗りの甕の破片である。外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリで仕上げている。

2は長胴丸底の甕で、口縁部の一部を欠損する。口径17.8cm、器高34.1cm、胴部最大径20.1cmを測る。胴部はほとんど膨らまない。外面はタタキ目のあとナデで、ハケ目を下から上へ引き上げている。内面は胴部中位以上にハケ目を施している。ススは外面全域に付着するが、胴部下位に10cm内外の幅でススのふっ切れた部位が見られる。また底部に径6cm程に丸くススが付着しており、煮沸の際に支柱を使用したことを窺わせる。内面の焦げ付きは外面のススとは逆に胴部下位に約10cmの幅で帯状に廻っている。

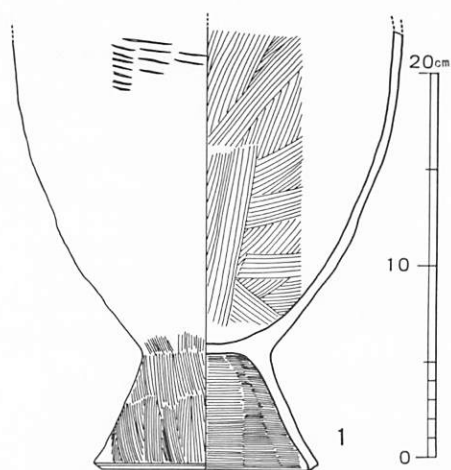
3は複合口縁壺である。複合口縁部は粘土接合面から上部を欠損しているが、口径は約20cm前後になると思われる。頸部は長く口縁部へは鋭く折れて続いている。内面には補強の為、粘土をめぐらしており、胴部との接合面で剝離している。器面は全面ハケ目を施しその後、部分的にヨコナデを行なっている。胎土には砂粒が少なく、焼成もきわめて良い。

4は外反気味に直口した口縁部をもつ鉢である。胴部の張りは大きく上位に配している。器面にはハケ目を主として施し、外面には一部タタキ目を残している。

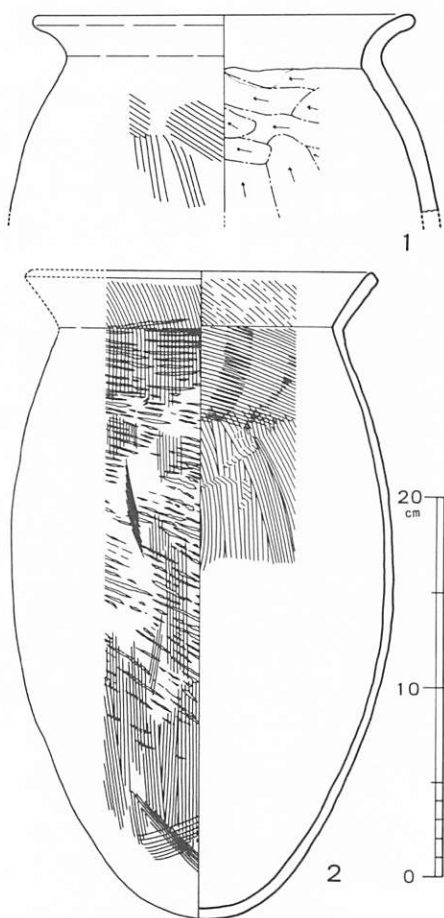
5は口縁部が直口した鉢である。底部は丸底で口径に対して器高がきわめて高く、容量が多い鉢である。器面は外面の一部にハケ目、底部外面はヘラケズリを施している。内面は全面ナデ調整である。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は良い。

6は脚台部を欠く高坏である。口縁部は外反しつつ大きく開き、胴部は浅いが大きい。柱状部との接合には粘土を詰めている。胎土には砂粒が少ないが、焼成は良くない。

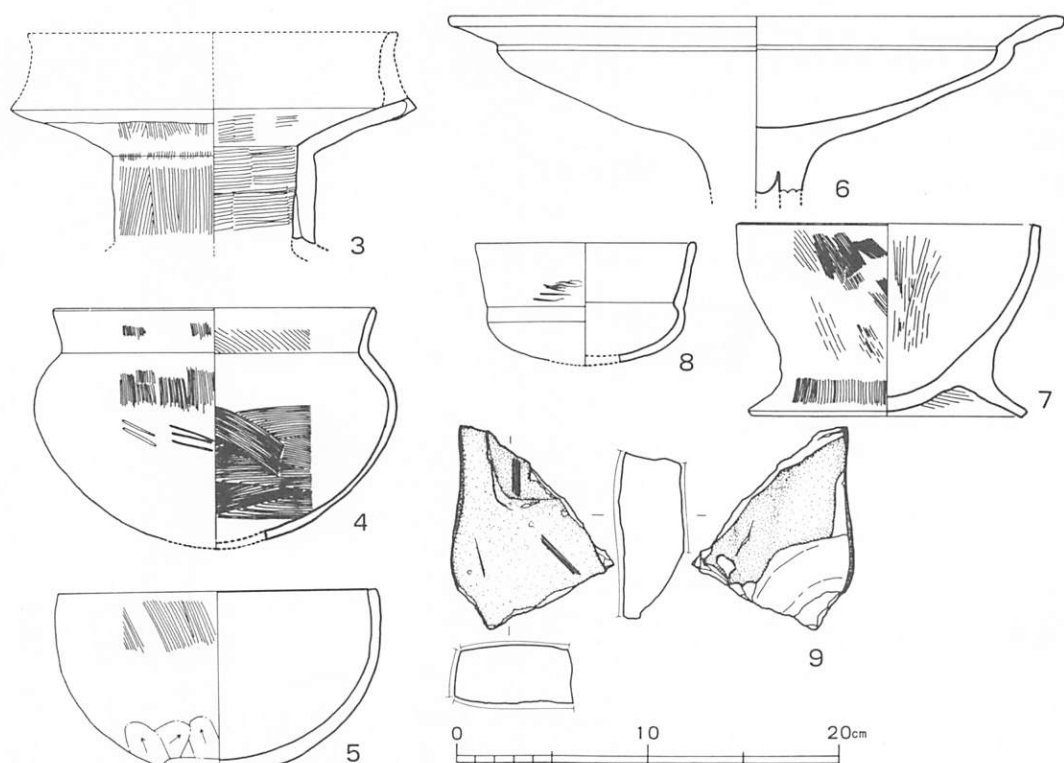
7は台付の鉢で、口径15.2cm、器高10.1cm。底部はやや尖り気味で、脚は短かく扁平に付いている。外面は3



第72図 E-2区Pit内出土遺物実測図



第73図 遺構に伴わない遺物実測図



第 74 図 遺構に伴わない遺物実測図

種類のハケ目原体より調整し、内面は全体ナデで、若干ハケ目を施している。成形は雑である。

8は口縁部は直口し、胴部は浅い。口縁部外面には線刻による引っ描き痕が見られる。その状態から焼成後、使用段階で生じたものと判断された。器面は全面ナデ調整を施している。

9は砂岩製の砥石である。周囲を欠くが、わずかに残った側面にも研磨が進んでいる。

遺構に伴わないミニチュア土器 (図版 13-2、3、6、8 第75図)

1は脚台を欠いた小型の鉢である。口縁部は直口し、胴部は深くなっている。器面にはハケ目を残しているが、焼成が良くないため消えかかっている。胎土には砂粒を多く含んでいる。

2は脚台を有する小型の鉢である。口縁部は長く直口し、胴部はわずかにふくらんでいる。脚台は短かく大きく開いている。器面は口縁部外面にハケ目を施し、その後ナデ調整を行なっている。

胎土には小さな砂粒をわずかに含んでいるが、焼成も良く出来の良い土器である。

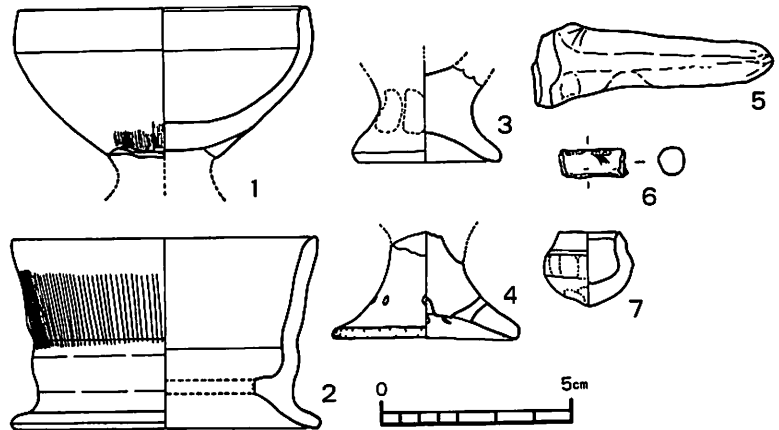
3は甕のミニチュア土器で、上部を欠き脚台部のみである。裾部は短かく、全面ナデ調整を施しくびれ部には指圧痕を残している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

4は高坏のミニチュア土器である。坏部を欠き脚部のみである。裾部には8個の刺突による孔を配しているが、その多くは先端が詰っている。器壁は厚く、全面ナデ仕上げである。

5は土製柄杓であるが、基部を欠いている。

6は棒状を呈した土製品である。直径7mmで現長1.6cmを測る。両端を欠くため器種は不明である。

7は高さ 1.9cm、幅 2.3cmの極小の無頸壺である。底部は尖り気味で、胴部の張りが大きい。



第 75 図 遺構に伴わないミニチュア土器実測図

遺構に伴わない鉄器 (第75図)

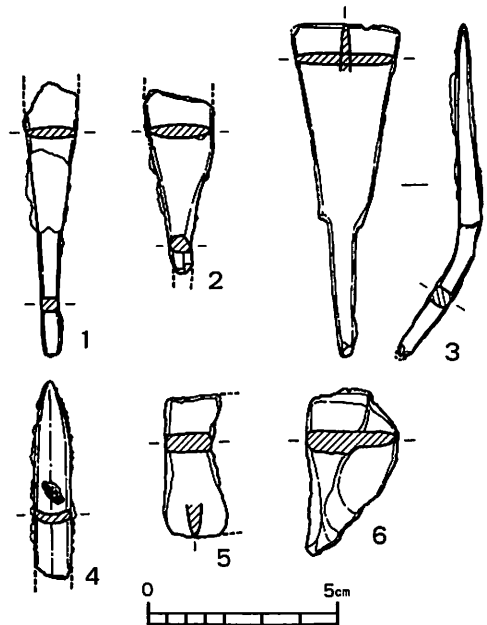
1は鉄鏃の茎部から身部にかけての破片で刀先を欠く。現存長 7.1cm、幅 1.3cm、厚さ0.25cm、重さ 7.2g。

2は破片で器種は不明であるが、おそらく鏃であろう。現存長 4.7cm、幅 1.6cm、厚さ 0.3cm、重さ 6.2g。

3は表土剥ぎの段階で出土した方頭広根式の鉄鏃で完形である。長さ約 9 cm、刀先幅 2.7cm、関部での厚さ 0.6cm、重さ17.7g。茎部が屈曲している。

4は鏃の破片で基部を欠く。現存長 5.2cm、幅約 1cm、厚さ0.25cm、重さ 3.7gである。

5と6はともに器種不明の破片である。重さは5が11.7g、6が9gを計る。



第 76 図 遺構に伴わない鉄器実測図

第 4 章 ま と め

1. 今回の調査では、遺跡の中心と考えられている地点（山鹿工業株式会社および相互建設所有地）と南端（発掘調査で遺構が検出された場所での）との空白部分を埋めるような形で行った。

その結果、住居跡24軒、溝状遺構4本（うち1本は中世）、石蓋土墳墓1基、土墳墓4基の遺構を検出することができた。



第 77 図 方保田東原遺跡遺構配置図

方保田東原遺跡は昭和57年3月までに数度の発掘調査が実施され、その成果は一応のまとめを行^{註1}っている。

過去の調査では、遺構が確認された最小限の範囲でも東西230m、南北220mを測り、遺跡の規模はこれよりもっと広がると考えられている。今回の調査では、空白部分においても遺構が存在していることを裏付ける結果となった。

これまでの調査総面積は2959.5㎡で、遺構確認最少面積に対しても僅か5.8%にしか過ぎないのである。ましてや、調査した部分の殆どから、何らかの遺構が検出されており、このことは単に遺跡の密度の高さを示すばかりでなく、遺跡の規模として考えても、住居跡などの遺構や、それに残された遺物の量は膨大なものになると考えられる。

2. 遺跡には9本の溝状遺構（うち1本は中世）が検出されたが、これらは溝のほんの一部が検出されたに過ぎず、どのように走るかは明らかではないが、その方向はまちまちである。

特に第Ⅲ次調査（昭和56年）で検出された近江工業内1～3号溝と、今回調査した2～3号溝は、直線で20mしか離れていないにもかかわらず直角に交叉する配置を示している。

この他の溝の配置からも、少なくとも遺跡の中心、もしくは遺跡内を走っていて、現状では遺跡をとり囲む環溝集落の形態をとどめているか否かは判断できないが、段階的に遺跡の規模が拡大していったものと推察することができよう。

註1 『方保田東原遺跡』山鹿市教育委員会 1982

方保田東原遺跡調査年次別遺構一覧

	調査面積	住居跡	石 棺	石蓋土坑	木棺墓	土坑墓	溝	土器溜め	遺 物
昭和30年 山鹿高校調査	20㎡	1	1						
昭和47年11月 予 備 調 査	20㎡	1	1						
昭和48年2月 Ⅰ 次 調 査	1080㎡	25		1					巴形銅器 1 銅 鉄 1
昭和49年5月 Ⅱ 次 調 査	528㎡	10	2		9	6		2	
昭和51年5月 石 棺 調 査	6㎡		1						
昭和55年10月 鹿本高校調査	825㎡	1							銅 鉄 1 ガラス小玉 1
昭和56年4月 Ⅲ 次 調 査	558㎡	33					5	1	
昭和57年1月 Ⅳ 次 調 査	154㎡	9						1	小形仿製鏡 1
昭和57年7月 Ⅴ 次 調 査	511㎡	24	2	1		1	4		ガラス小玉 3
計	2959.5㎡	104	7	2	9	7	9	4	

版 图



1 遺構全景



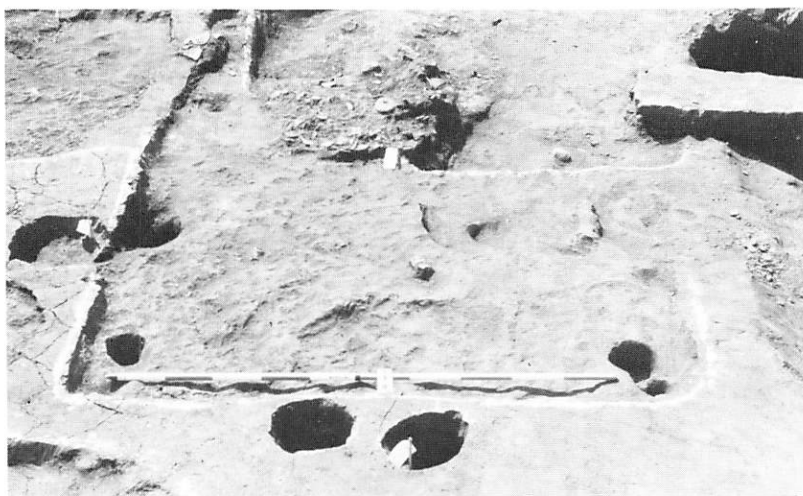
2 1～8号住居跡



3 1号住居跡



1 2号住居跡



2 3・8号住居跡



3 4号住居跡



1 5号住居跡



2 4～7号住居跡



3 14号住居跡



1 15号住居跡



2 16号住居跡



3 17号住居跡



石蓋土墳墓

1 露出状態



2 白粘土除去状態



3 石蓋除去状態



1 1号溝 1～2号土墳墓



2 2・3号溝発掘前



3 2・3号溝完掘



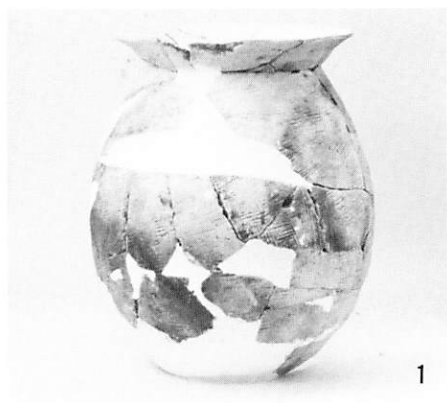
1 2号沟



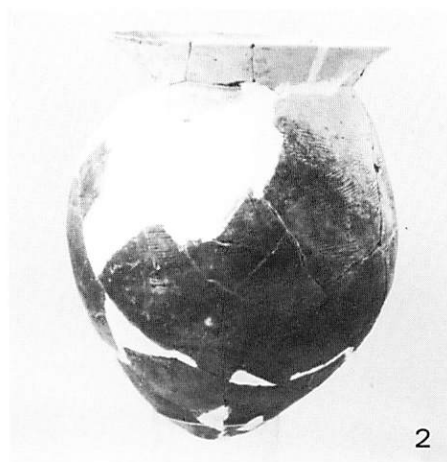
2 2号沟



3 3号沟



1



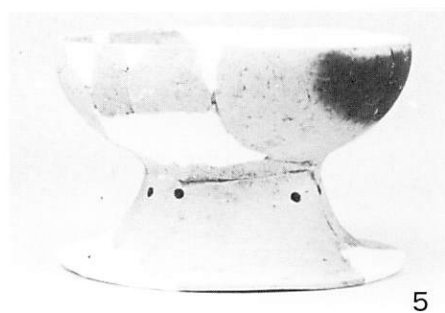
2



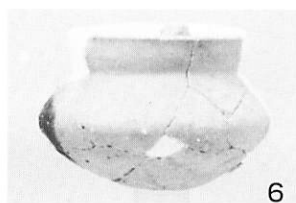
3



4



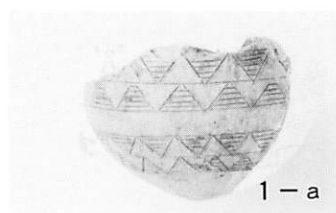
5



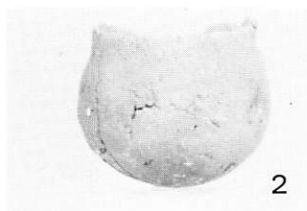
6



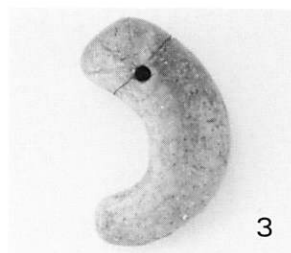
7



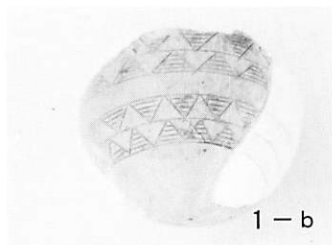
1 - a



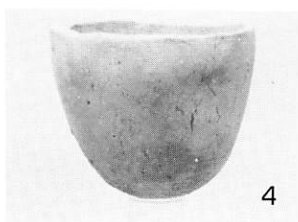
2



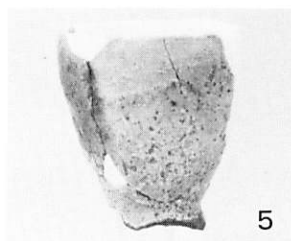
3



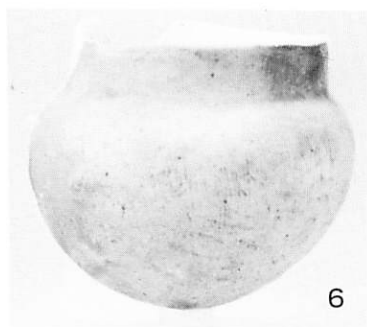
1 - b



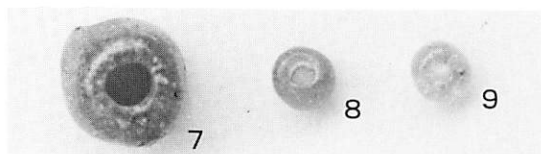
4



5



6



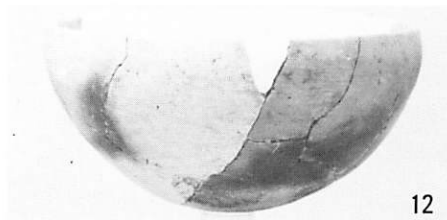
7



8



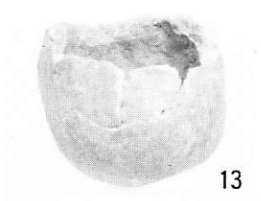
9



12



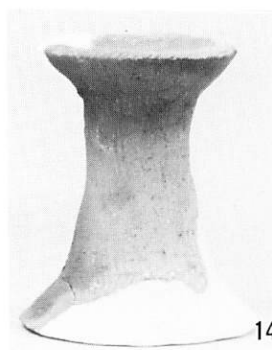
11



13



10



14



1



2



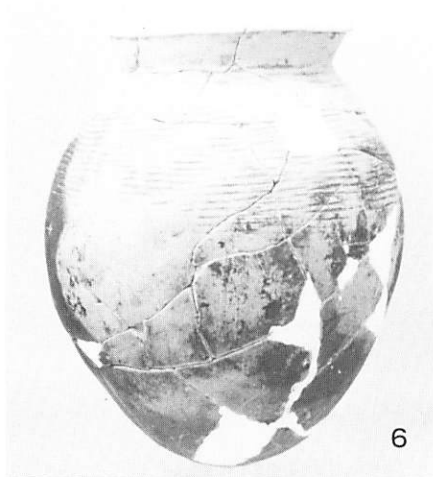
3



5



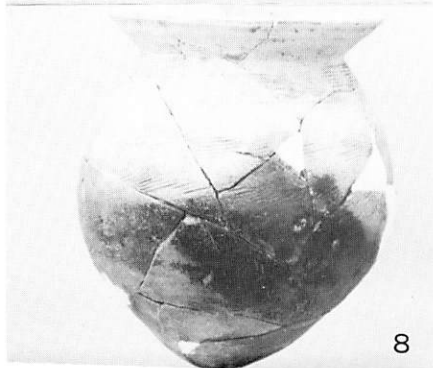
4



6



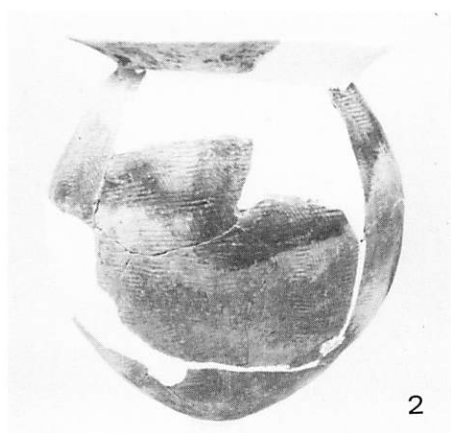
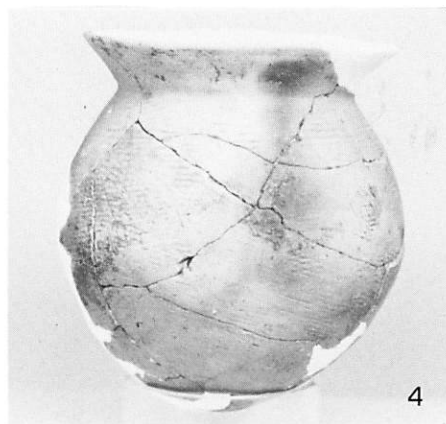
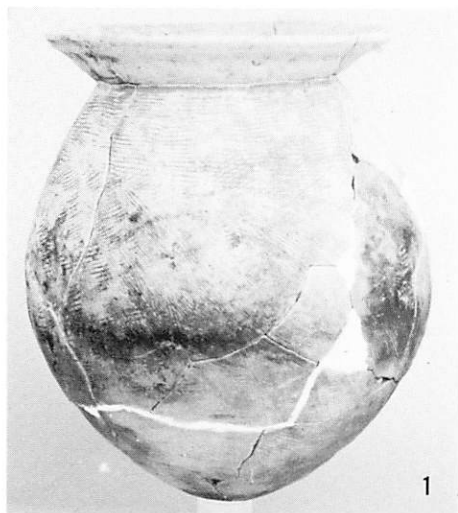
7



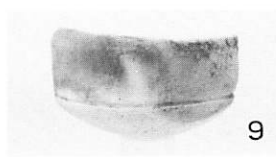
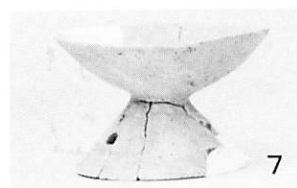
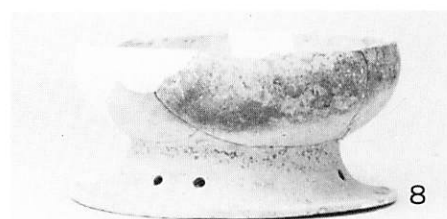
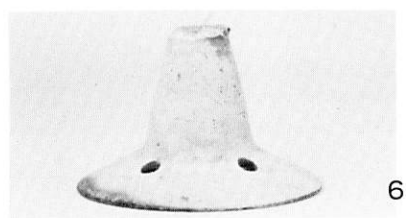
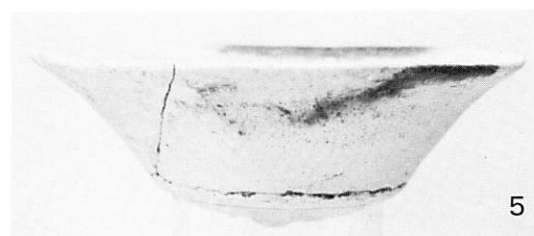
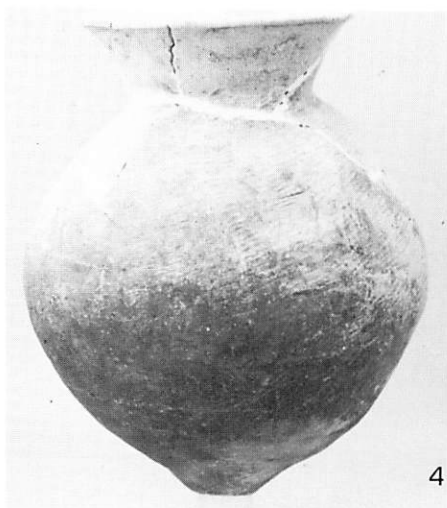
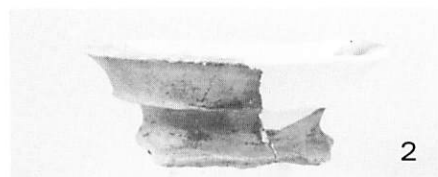
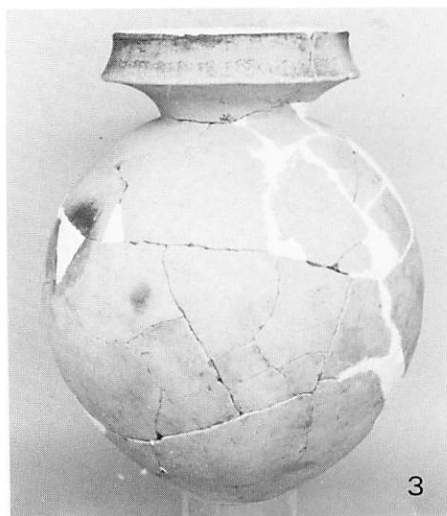
8



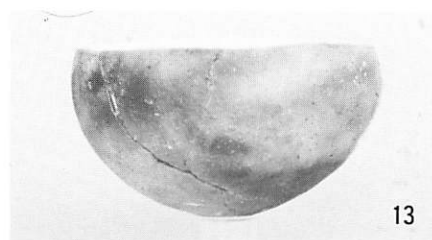
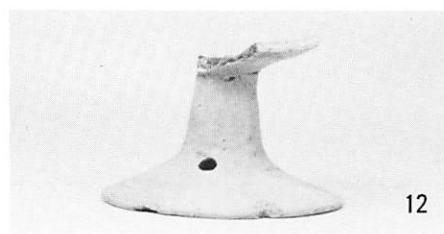
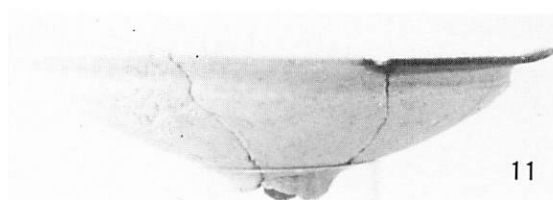
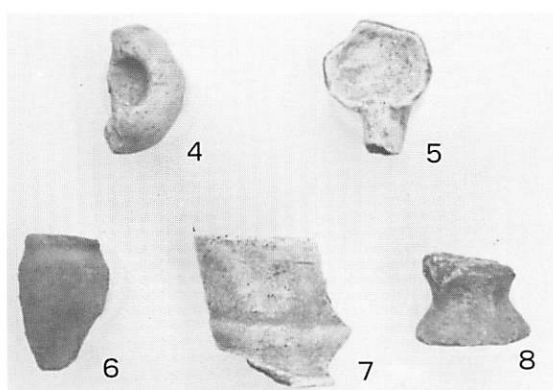
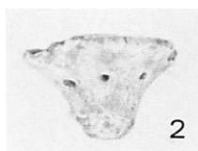
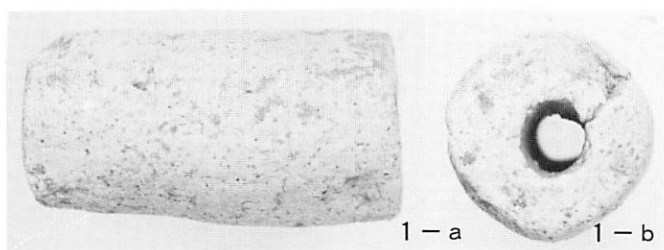
9



3号溝出土遺物



3号溝出土遺物



大道小学校校庭遺跡

山鹿市立博物館調査報告書

第 4 集

1 9 8 4

山鹿市教育委員会

例 言

1. 本書は、山鹿市大字方保田字本村1792番地に所在する大道小学校校庭遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大道小学校校舎改築に伴って実施したものである。
3. 調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
4. 本書の執筆は、第1章を中村幸史郎、第2章は遺構を中村、遺物は中村と坂本重義、第3章を中村があたった。
5. 本書の遺構、遺物の実測図作成は挿図目次に示すとおりである。また、製図は坂本があたった。
6. 本書に掲載した写真は中村が撮影し、焼付けは倉原謙治が行った。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の組織	2
第2章 遺跡の環境	3
第3章 遺構と遺物	5
1 北区	5
2 東区	16
3 西区	24
4 第1トレンチ	30
5 第2トレンチ	31
6 第3～第5トレンチ	34
7 第6トレンチ	37
第4章 まとめ	37

図版目次

図版 1	1 遺跡遠景
	2 1、2号住居跡
	3 3～5号住居跡
2	1 貯蔵穴
	2 C集石
	3 D集石
3	1 1号石棺
	2 鉄剣出土状況
	3 鉄斧出土状況
4	1 2号石棺
	2 祭祀遺物

- 3 拡大
- 5 1 3トレンチ
- 2 4トレンチ
- 3 6トレンチ
- 6 1 4号住居出土遺物
- 2 4号住居出土遺物
- 3 5号住居跡出土遺物
- 4 2トレンチ出土遺物
- 5 西区出土遺物
- 6 1号石棺内出土鉄器
- 7 1号石棺内出土鉄器
- 8 1号石棺内出土鉄器
- 7 1～5 1号石棺内出土鉄剣

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図（1／10,000）（中村作成）	4
第 2 図	トレンチ配置図	折込み
第 3 図	北区遺構配置図（倉原実測、坂本製図）	折込み
第 4 図	1号住居跡実測図（中村・倉原実測、坂本製図）	6
第 5 図	2号住居跡実測図（中村・倉原実測、坂本製図）	7
第 6 図	2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	8
第 7 図	3号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	9
第 8 図	4号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	10
第 9 図	4号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）	11
第 10 図	5号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	12
第 11 図	5号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	14
第 12 図	貯蔵穴実測図（中村実測、坂本製図）	14
第 13 図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	15
第 14 図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	16
第 15 図	東区遺構配置図（倉原実測、坂本製図）	17
第 16 図	集石遺構A群実測図（倉原実測、坂本製図）	17
第 17 図	集石遺構B、C群実測図（倉原実測、坂本製図）	18
第 18 図	集石遺構D群実測図（中村実測、坂本製図）	18

第19図	1号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	19
第20図	1号土壙墓実測図（倉原実測、坂本製図）	19
第21図	その他の遺構実測図（倉原実測、坂本製図）	20
第22図	その他の遺構出土遺物実測図（坂本実測、製図）	21
第23図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	22
第24図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	22
第25図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	23
第26図	遺構に伴わない遺物実測図（坂本実測、製図）	24
第27図	西区遺構配置図（大森実測、坂本製図）	25
第28図	1号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）	25
第29図	1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	25
第30図	1号石棺実測図（中村実測、坂本製図）	26
第31図	1号石棺出土遺物実測図（坂本実測、製図）	27
第32図	2号石棺実測図（倉原実測、坂本製図）	28
第33図	祭祀遺構実測図（倉原実測、坂本製図）	29
第34図	祭祀遺構出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	29
第35図	遺構に伴わない遺物（中村拓影）	30
第36図	第1トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	30
第37図	第2トレンチ遺構実測図（中村実測、坂本製図）	折込み
第38図	第2トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）	32
第39図	第2トレンチ出土遺物実測図（坂本実測、製図）	34
第40図	3～5トレンチ配置図（中村・最上実測、坂本製図）	折込み
第41図	3～5トレンチ断面図（中村・倉原実測、坂本製図）	折込み
第42図	3トレンチ出土遺物実測図（坂本実測、製図）	35
第43図	6トレンチ配置図（中村実測、中村製図）	36
第44図	6トレンチ断面図（大森実測、坂本製図）	36

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

山鹿市教育委員会では、市内の小・中学校校舎老朽化のため、順次改築工事を行なっている。昭和56年度は大道小学校が予定されていた。工事は夏休み期間中から始まる計画で、各種手続きを進めていた。

しかし、大道小学校は弥生時代中期後半の甕棺、丹塗袋状口縁長頸壺等が出土し、中世方保田城の跡とされ、大道小学校校庭遺跡として周知されていたのである。そのため、文化財保護の立場から発掘調査を実施することになったのが、56年6月中旬のことであった。

調査は山鹿市立博物館が担当することとなったが、博物館では国庫補助を得て、方保田東原遺跡の重要遺跡確認調査を4月から実施していたため、調査期間の調整を行なわなければならなくなかった。その結果、校舎改築の関係から7月1日から並行して調査し、遅くとも8月15日までに終了するというので、その間、休日無しの強行発掘であった。

調査に当っては中村・倉原が当り、補助員として山鹿市役所市民課大森勲氏（山鹿文化財を守る会会員）の応援を要請した。大森氏の出向に対しては、市民課の全面的な協力を得た。

また、調査期間中は大道小学校校長八木田房雄先生をはじめとした職員の方々の協力と、発掘調査に関して花籠組、本山建設の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

第2節 調査の経過

校舎改築工事は夏休み中に解体、基礎工事、仮校舎建設といった手順で行なわれる予定であった。

発掘調査は、新たに校舎を建設する部分の調査を主として行ない、工事進行状況に合せて調査区域を設定した。

校舎解体は夏休みに入った7月23日から始まり8月1日までに終了するため、7月1日から22日まで、校舎の間を主として調査し、解体後校舎下を調査することとした。

調査日誌

- 7月1日(水) 学校長へ調査開始の挨拶を行った後、給食室建設予定地に調査区を設定し北区とする。
表土剥ぎは県文化課からブルドーザーを借り入れ、授業の妨げにならぬよう休み時間を中心に機械を入れ、授業中は作動しても極力音をたてぬよう注意して行なう。
- 7月2日(木) 北区の表土剥ぎを終了し、精査段階に入る。

- 7月3日(金) 北区で遺構の存在を確認する。校舎中庭に1、2トレンチを設定し、ブルで表土剥ぎを開始する。
- 7月4日(土) 北区で住居跡を確認、1号住居跡とする。1、2トレンチの精査を並行して行なう。
- 7月5～8日 北区で住居跡5軒を検出する。1、2トレンチの発掘
- 7月9日(木) 北区の発掘を終え、実測段階に入る。住居跡5軒、貯蔵穴1基を検出する。
- 7月10日(金) 校舎西側の斜面に3トレンチを設定し、発掘にかかる。
- 7月14日(火) 北区の実測を完了し、ブルにより埋め戻す。
- 7月16日(木) 第2トレンチ発掘終了、ピットを多く検出したが、時期の判断が困難。遺構としてもとらえられない。
- 7月19日(日) 第1トレンチ発掘終了、遺構の検出は少なかった。
- 7月21日(火) 校舎西側の斜面に、4、5トレンチを設定、花籠組の協力でユンボによる表土剥ぎを行ってもらう。3トレンチ完掘、溝状遺構を検出し南北に向かうことを確認した。
- 7月23～31日 本日から、いよいよ校舎解体開始
4、5トレンチを完掘、4トレンチで溝状遺構を検出する。
- 8月2日(日) 校舎解体終了、新校舎建設予定地の東西両端に東区、西区を設定。表土剥ぎは花籠組の協力を得て行なう。
- 8月3日(月) 西区で石棺2基を検出、露出作業を行う。
- 8月5日(水) 西区で住居跡を確認、さらに溝状遺構内から須恵器壺と土師器皿5枚のセットで出土する。
- 8月6～8日 西区内検出の遺構や遺物の実測を行ない、西区の調査を終る。
- 8月9日(日) 東区に調査主体を移動、集石遺構とピット群を検出する。
- 8月10～12日 東区内遺構の実測を行なう。
- 8月13日(木) 旧校舎基礎部分除去作業中にV字溝を確認。6トレンチとして追跡し、実測を行なう。
本日で全ての調査を終了し、工事起工式にどうにか間に合う。

第3節 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

総 括 弓掛 正久（山鹿市教育長）

調査団長 原口 長之（山鹿市立博物館館長）

調査事務 鶴田 正（庶務課長）
立山 哲夫（庶務課長補佐）

調 査 員 中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）
倉原 謙治（ 〃 ）

調査補助員 大森 勲（山鹿市役所市民課）

作業員 前川誠一、吉里勝正、野田辰起、高森芳喜、飯田啓詩、山城敏昭、最上敏、中村徹也
原一倫、原田智文、鶴田省二、早田順二、米加田昌寿、守部知明、宮崎誠郎、川端康
臣、竹下欣也、山下靖、江藤敏法、山下洋子、池田一子、高森ミサヲ、石橋朝子、
緒方春江、城よう子、早田宜江、緒方ひとみ、菊原瑞江、出雲勝代、青木ひとみ、
古閑昭子、矢野愛子

地元協力者 大道小学校

調査協力者 熊本県文化課、山鹿文化財を守る会、鹿本高校考古学部、本山建設、花籠組

遺物整理 坂本重義、城よう子、原久美子、古閑則子、坂梨たまよ

第2章 遺跡の環境

山鹿市立大道小学校の敷地を中心として広がる遺跡で、熊本県山鹿市大字方保田字本村1792番地に位置している。

遺跡は方保田東原遺跡の西隣りにあたり、舌状台地の西端部に立地している。この地は、菊池川と方保田川との合流点を西に見下ろし、南には千田川との合流点を見下ろすことができる。

そのため川沿いには肥沃な沖積平野が形成され、台地裾部には湧水地も点在している。

遺跡の周辺には、方保田東原遺跡を中心とした弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡群と、古墳時代中期の古墳が多く分布^{註1}し、県下で最も密集した地域の一つと言える。遺跡や古墳については、方保田東原遺跡と重複する部分が多くここでは省くこととする。

この遺跡は、昭和44年10月体育館建設に際し弥生時代中期後半の丹塗り袋状口縁壺をはじめとした祭祀遺物^{註2}が出土している。また、中世方保田城の所在地としても知られている^{註3}。方保田城は『古城考』によると「菊池氏庶流方保田與三郎重兼、其後方保田三郎武明在城と云、地は今の方保田の東村外にあり」とされている。現在は方保田の西端に位置するため、古城考の記載内容とは異なっている。しかしこの地は周辺を川に挟まれ、崖面を形成していてわずかに東側が地続きとなっている。このためこの地からの展望はよくきき、築城には最適の地と言えよう。

現在村の中には五輪塔を多く出土する地区が残っており、土塁の跡も見ることができる。さらに小学校南西の坂には「城^{いい}ん坂」と呼ばれる坂が残されている^{註4}。また、学校西側の斜面には戦前まで土塁が残されていたということである^{註5}。

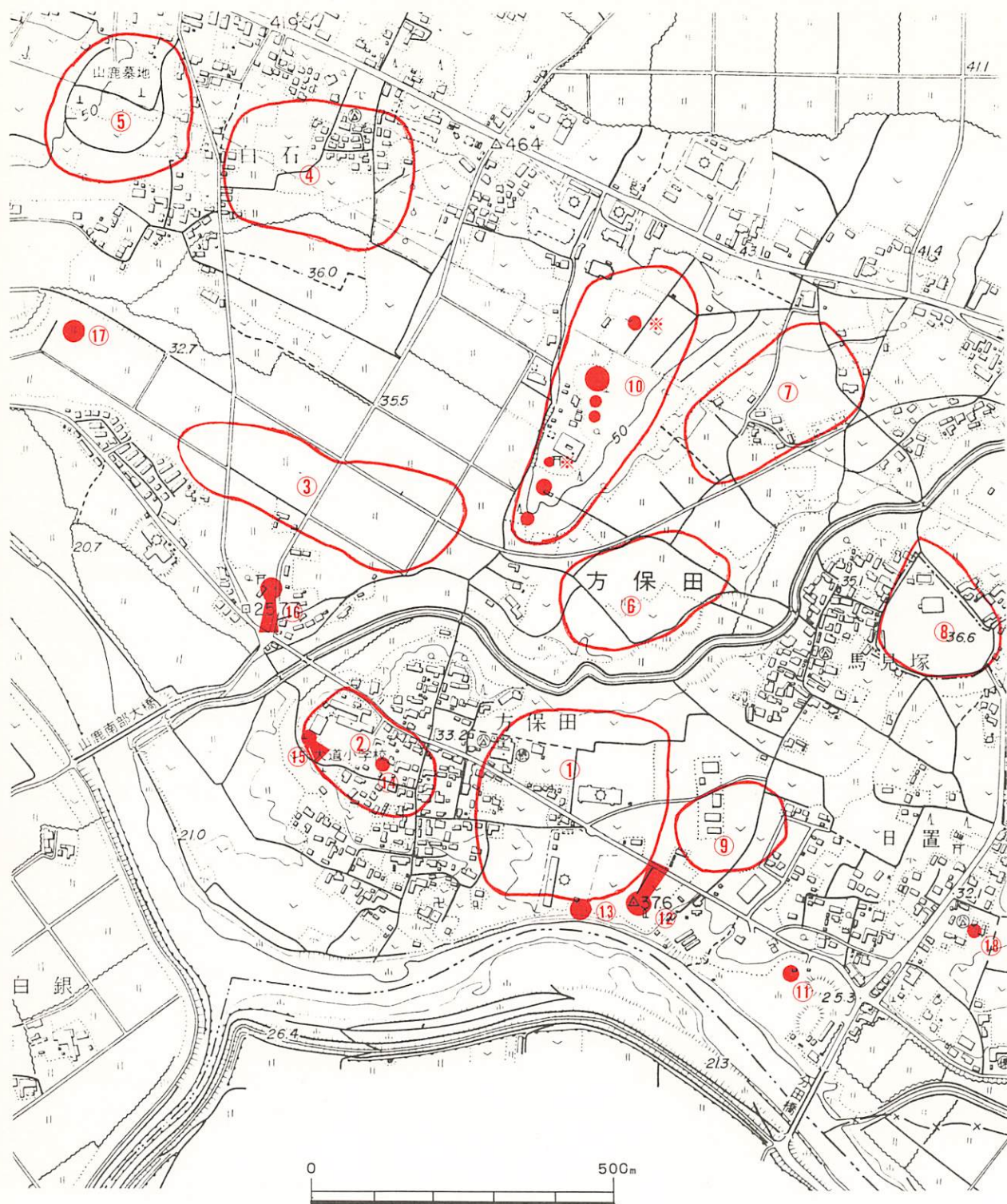
註1 中村幸史郎「遺跡の環境」『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書第2集1982に詳細に紹介し、本書においても前章で紹介している。

註2 隈昭志「熊本県山鹿市 大道小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第69巻第1号1983

註3 熊本県教育委員会「熊本県の中世城跡」熊本県文化財調査報告第30集1978

註4 前川誠一氏教示

註5 註4に同じ



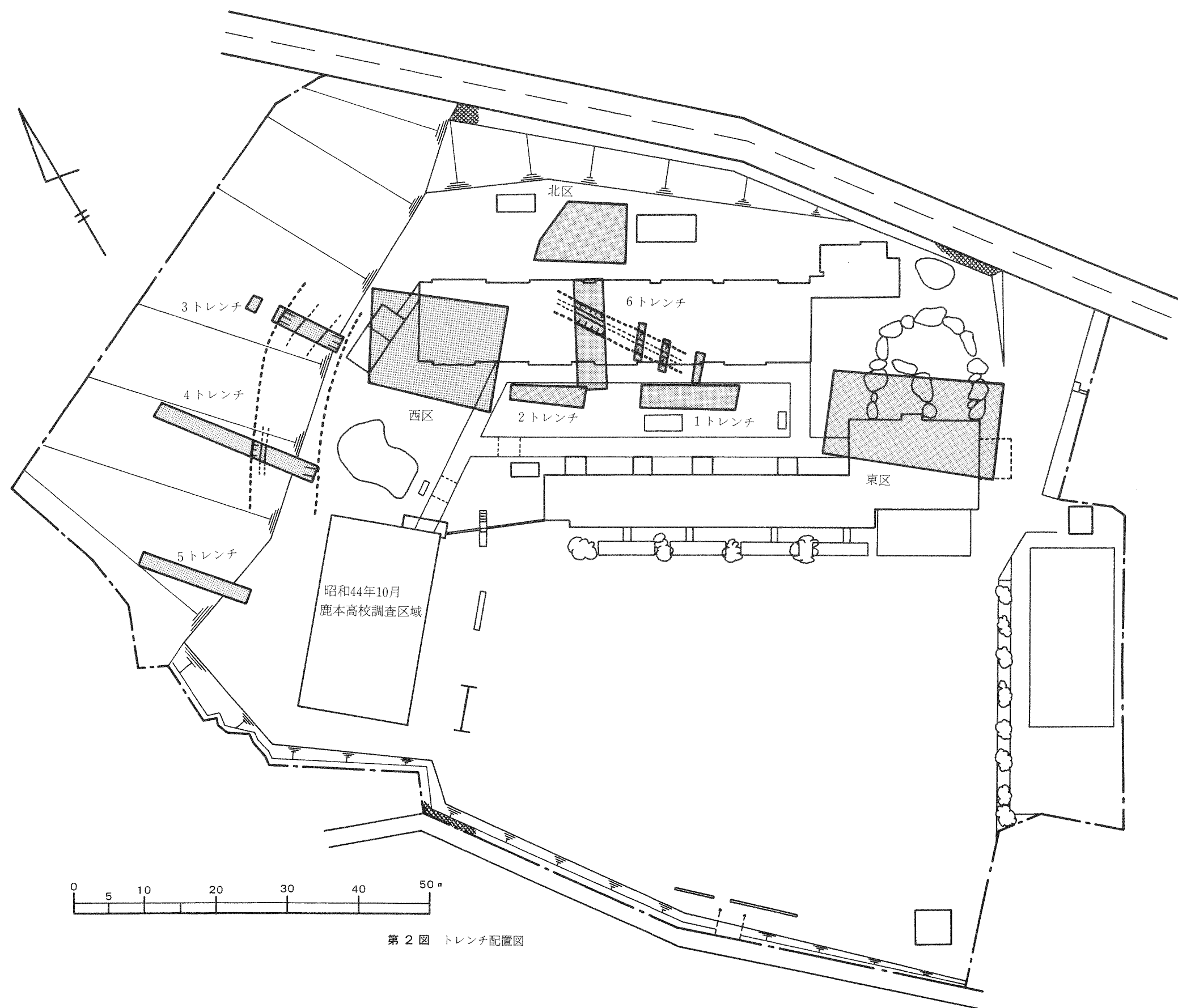
- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| 1 方保田東原遺跡 | 7 馬見塚遺跡 | 13 端山塚古墳 |
| 2 大道小学校校庭遺跡 | 8 旧大道中学校校庭遺跡 | 14 方保田古墳※ |
| 3 方保田遺跡 | 9 塚の本遺跡 | 15 経塚古墳※ |
| 4 白石遺跡 | 10 馬見塚古墳群 | 16 神社裏古墳 |
| 5 古閑ノ上遺跡 | 11 清水山古墳 | 17 木下古墳※ |
| 6 石原遺跡 | 12 亀塚古墳 | 18 日置古墳 |

※は消滅

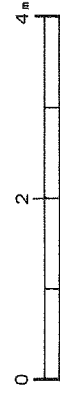
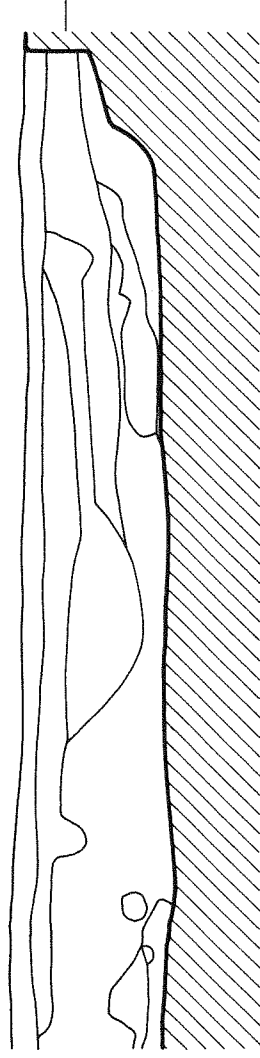
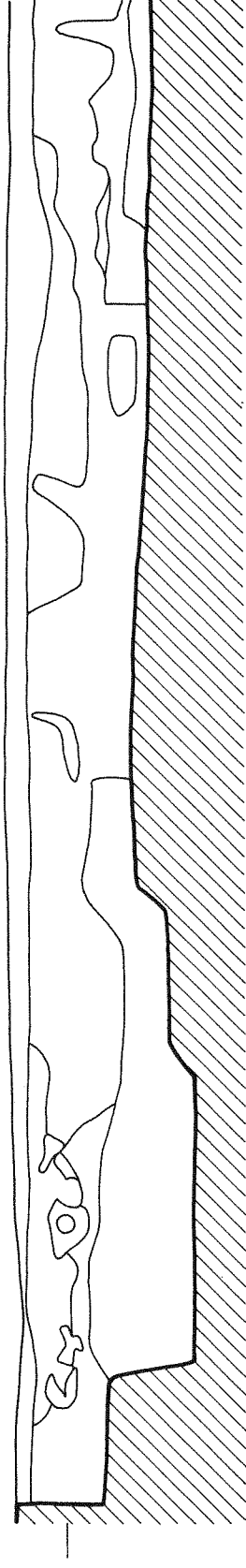
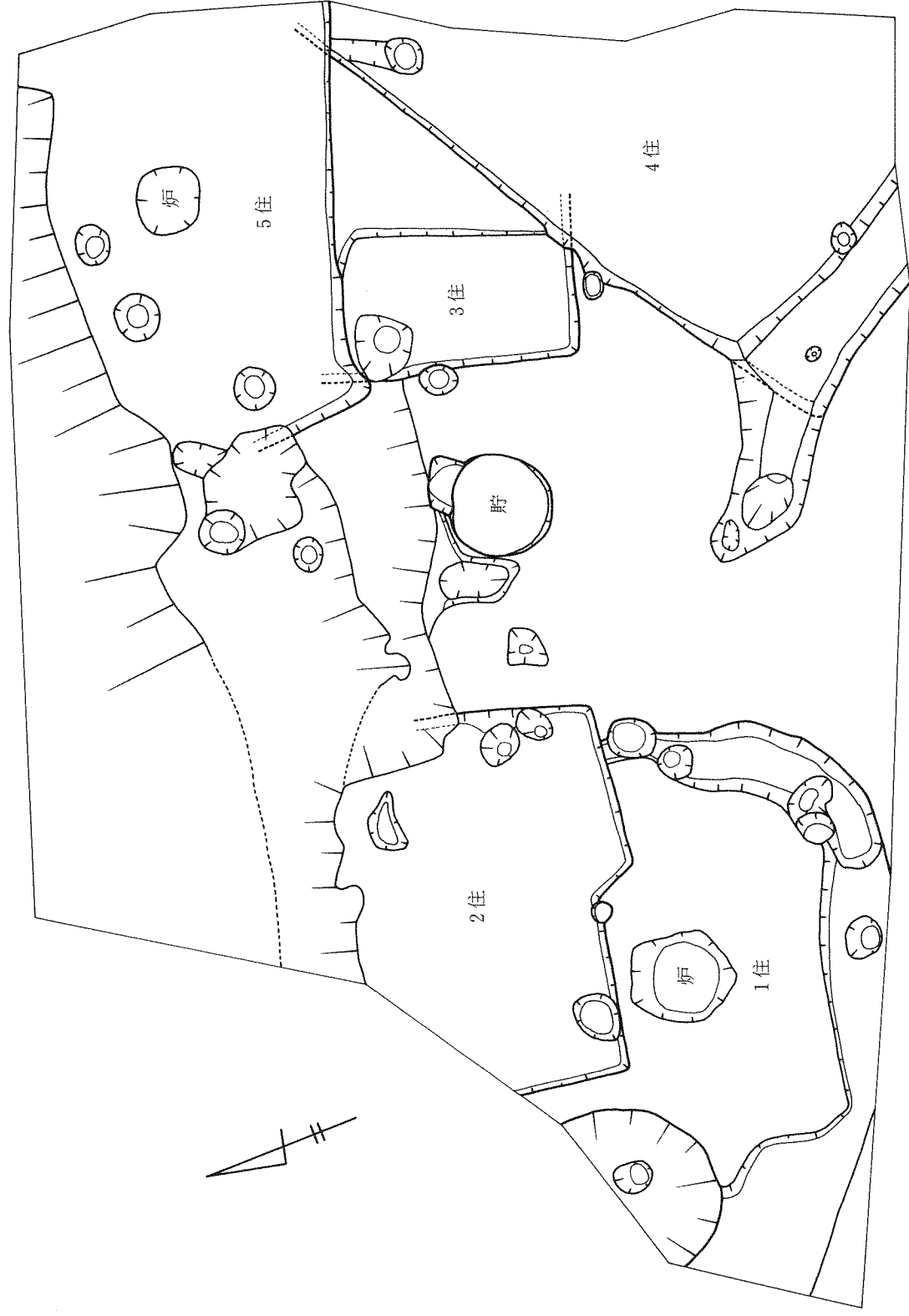
●は円墳

■は前方後円墳

第 1 図 周辺遺跡分布図



第 2 図 トレンチ配置図



第 3 図 北区遺構配置図

第3章 遺構と遺物

1 北 区 (図版 1 第 3 図)

この調査区は校舎の北側に位置し、給食室の建設予定地になっている。北側は斜面となり、県道へと続いている。調査区は、樹木の関係から不整形な形となったが、東西12.2m、南北8.5mの規模で調査を実施した。

調査の結果重複した竪穴住居5軒と貯蔵穴1基を検出することができた。

1号住居跡 (図版 1-2 第 4 図)

調査区内の南西部に位置し、2号住居跡から切られている。中央に直径約1m、深さ17cmの炉を配し、床面は堅く締った状態となっている。しかし、壁面は見られず、それに相当するように、周囲には浅い溝状の凹みが見られる。プランも現状では判断しかねるが、恐らく隅丸方形になるものとする。

遺物の出土は無く、遺物を全て持ち去り、この住居を廃棄したものとする。

2号住居跡 (図版 1-2 第 5 図)

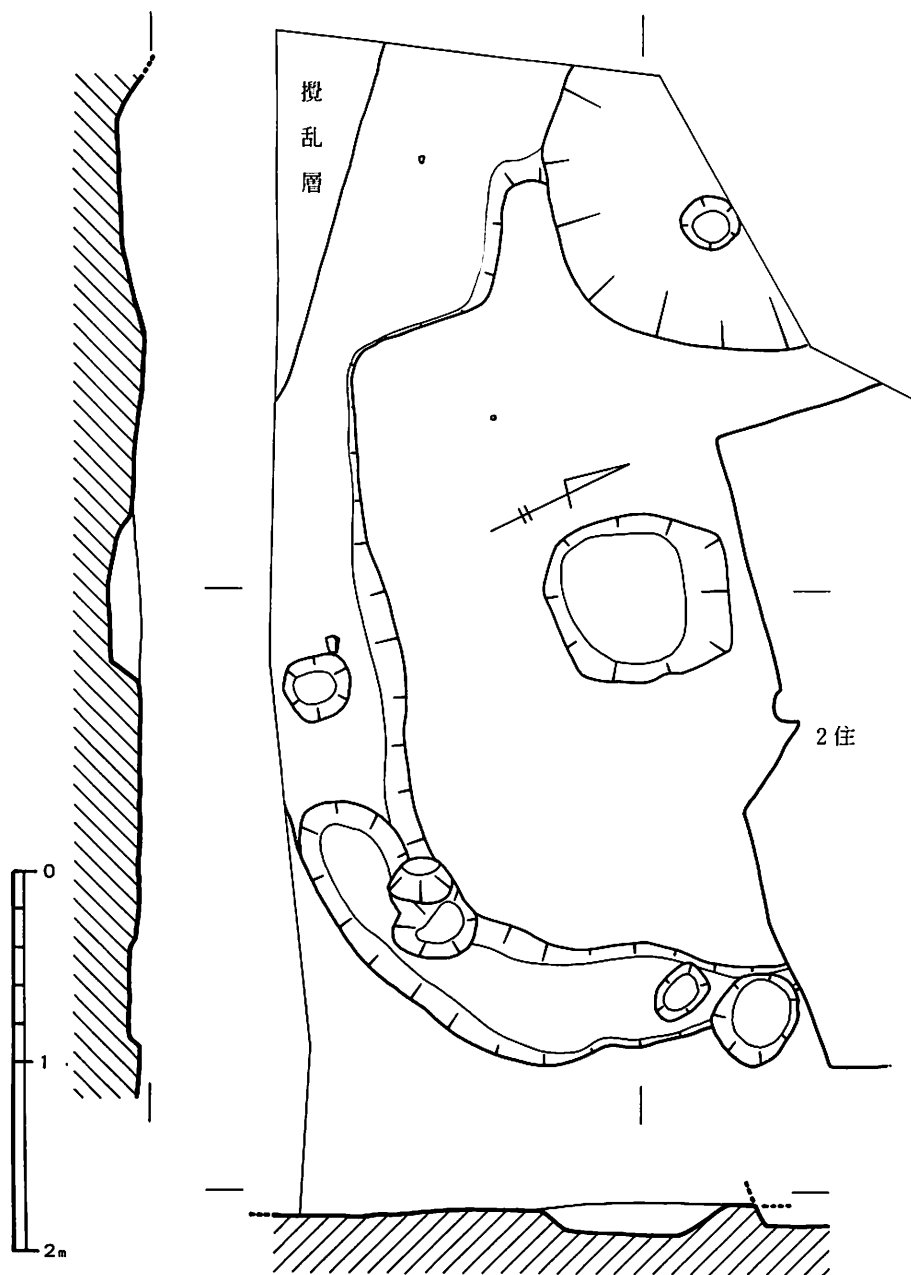
1号住居跡の北側に位置し、北側壁面は攪乱を受け、全体の半分を残すのみである。南側壁面は直線にならず、一部張り出しているが、長さ3.4mを測る。他の壁面は全体を残しておらず、住居跡の規模は不明である。床面は部分的に堅くなっている。壁面にそってピットも検出された。

遺物 (第 6 図)

床面全域に散在し、完全な姿をとどめる土器は少なかった。廃棄した状態での出土と思われる。

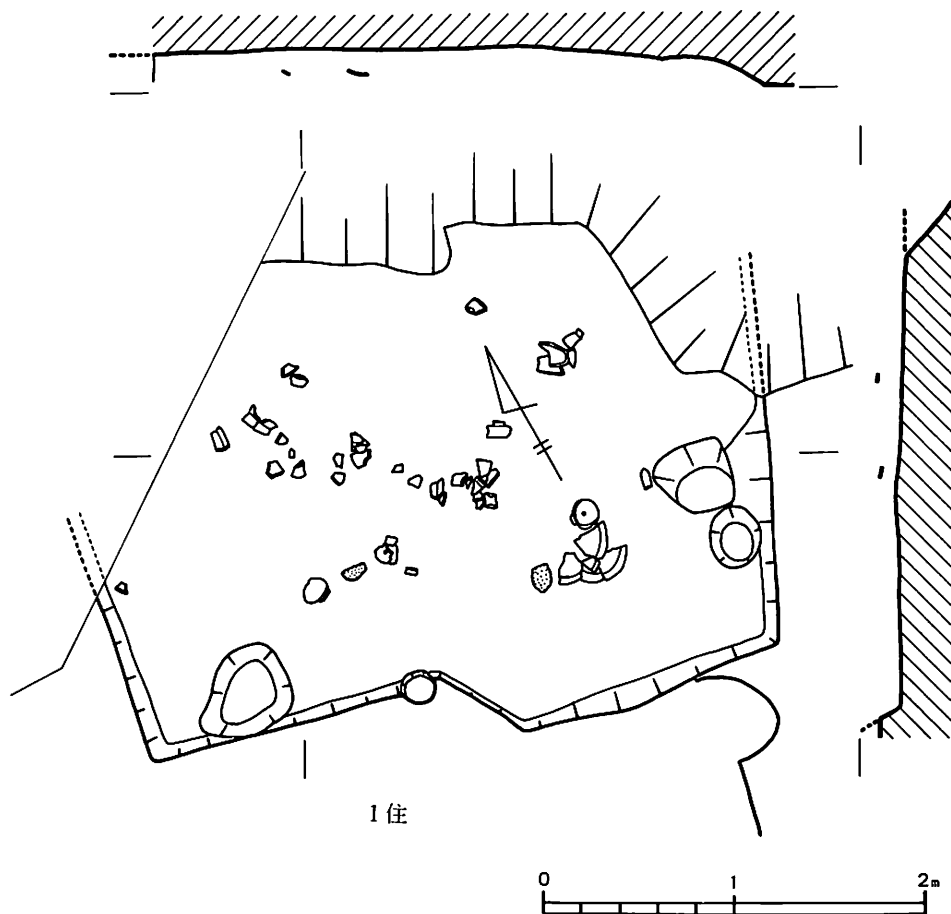
1は、甕の口縁部片である。口縁部は直線的に「く」字状に折れ、口唇部は平坦にナデられている。頸部の内面においてはシャープな稜を残し、肩部の張りは少なく、最大径は胴部中位になるものと思われる。底部については、脚台を有するものである。器面調整は、全面ハケ目を施し、胎土には小さな砂粒を含み、焼成も良い。胴部にススの付着が見られるが、内面は褐色を呈している。

2は甕で、胴部以下を欠いている。口縁部はゆるやかに「く」字状に開き、手捏風に不整形である。胴部の張りは小さく、最大径は中位に配している。底部は欠いているが、脚台を有すると思われる。器面調整は、外面には全面ナデ調整を行ない、内面にはナデ調整後、頸部近くに板状工具



第 4 図 1号住居跡実測図

の端部を利用したナデ調整が行なわれている。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。色調は褐色を呈している。3は脚台を有した甕である。脚部中位から口縁部にかけて欠いている。この甕は小型に類しており、脚台部は手捏風である。脚台裾端部には粘土のシワが見られ、不整形である。最大径は胴部中位に配し、脚台との接合部の径は小さい。器面調整は基本的にはナデ調整を行なっ



第 5 図 2 号住居跡実測図

ている。脚部の外面ではヘラ研磨が、内面では粗いハケ目とナデ調整が行なわれている。胎土には砂粒がわずかに含まれ、焼成も良い。色調は暗褐色で、胴部下位にススの付着が見られる。

4 は脚台部で上部を欠いている。欠損部において粘土接合面を観察される。裾端部はつまみ上げ気味である。器面調整は、外面でハケ目の後、部分的にナデ消している。内面はヨコ方向のハケ目を施している。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。色調は暗褐色で灰色がかっている。

5 は脚台で、上部を欠いている。裾部は直線的に広がっていて、端部は内側にわずかなつまみ上げが見られる。器面調整は、全面にタタキ目を施していて、裾端部にも見られる。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。そのため、くびれ部や脚部内面において器面の剝離が見られる。

6 は脚台で、上部を欠いている。上部は鉢になるものと思われ、上部とは粘土接合面で剝離している。器面調整は、外面でハケ目を、内面はナデ調整であるが、胎土に砂粒を含み、焼成も良くないため、器面が剝離しかけ、ザラザラとした感じとなっている。黄褐色を呈している。

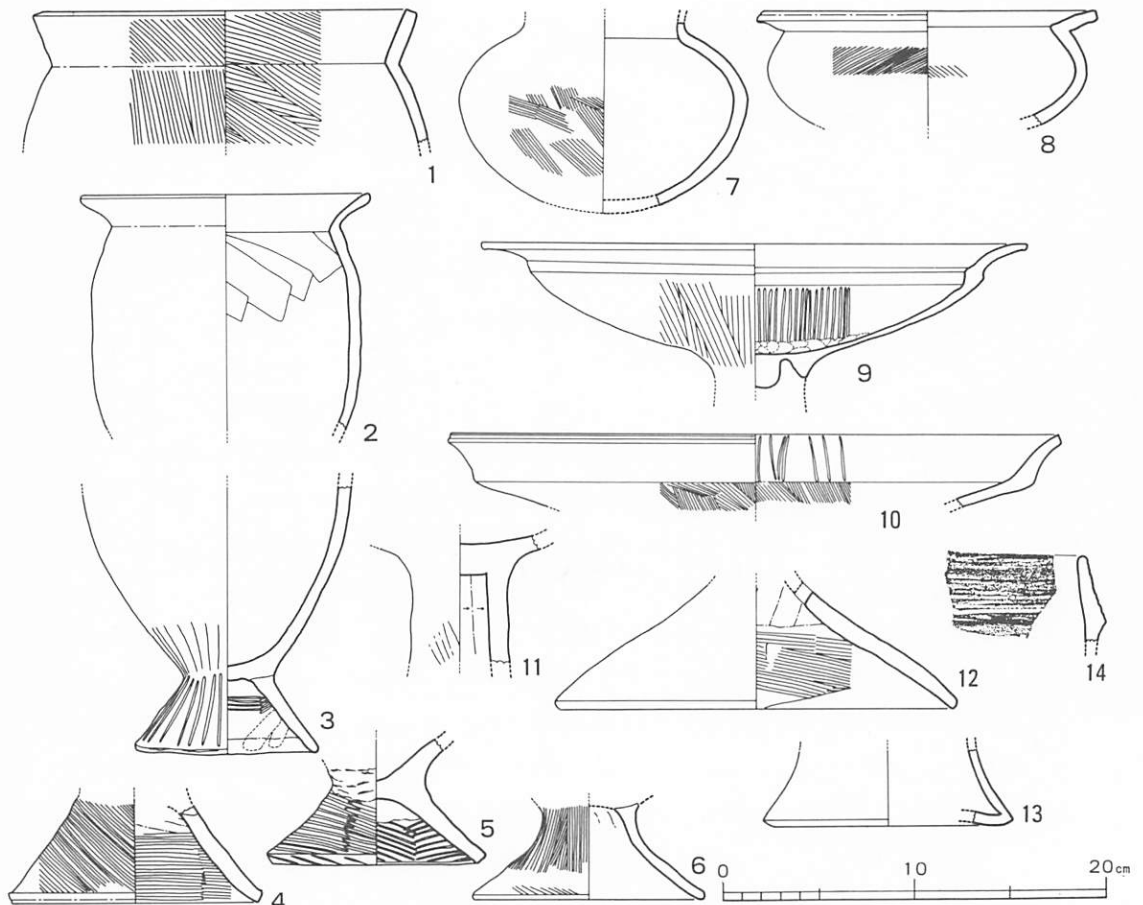
7 は、口縁部と底部を欠いた壺である。最大径は胴部やや上位に有しており、器高に比べ大きくなっている。器面調整は、外面ではハケ目を施し、その後肩部ではヨコナデを行なっている。

内面は全面にナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。色調は乳白色を呈している。8は口縁部を「く」字状に開く鉢である。頸部にはシャープな稜を描き、胴部は浅い。器面調整は外面肩部にハケ目を残しているが、下部はナデ消している。内面は一部にハケ目を残しているが、ほぼ全面にわたりナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成も良い。赤味を帯びた褐色を呈している。

9は高坏で、脚部を欠いている。坏部は正円にならず、わずかに歪んでいる。口縁部は短かく外反し、端部をわずかにつまみ上げている。胴部は大きいが浅い。器面調整は外面をナデ調整後、胴部のみにひっかいたような条痕が見られる。内面は全面ナデ調整を行ない、胴部のみにタテ方向のヘラ研磨を施している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。そのため、内面において器面の剝離が著しい。口縁部の一部に黒斑が見られる。色調は褐色である。

10は高坏で、坏部の多くと脚部を欠いている。坏部は大きいが、口縁部は短かく「く」字形に外反している。器面調整は、外面胴部にはハケ目を施し、文様をヘラ状工具で消している部分も見られる。口縁部はナデ調整である。内面は口縁部がナデ調整の後で、ヘラ研磨を縦方向に施している。

胴部にはハケ目を施している。胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良い。色調は褐色を呈して



第 6 図 2 号住居跡出土遺物実測図

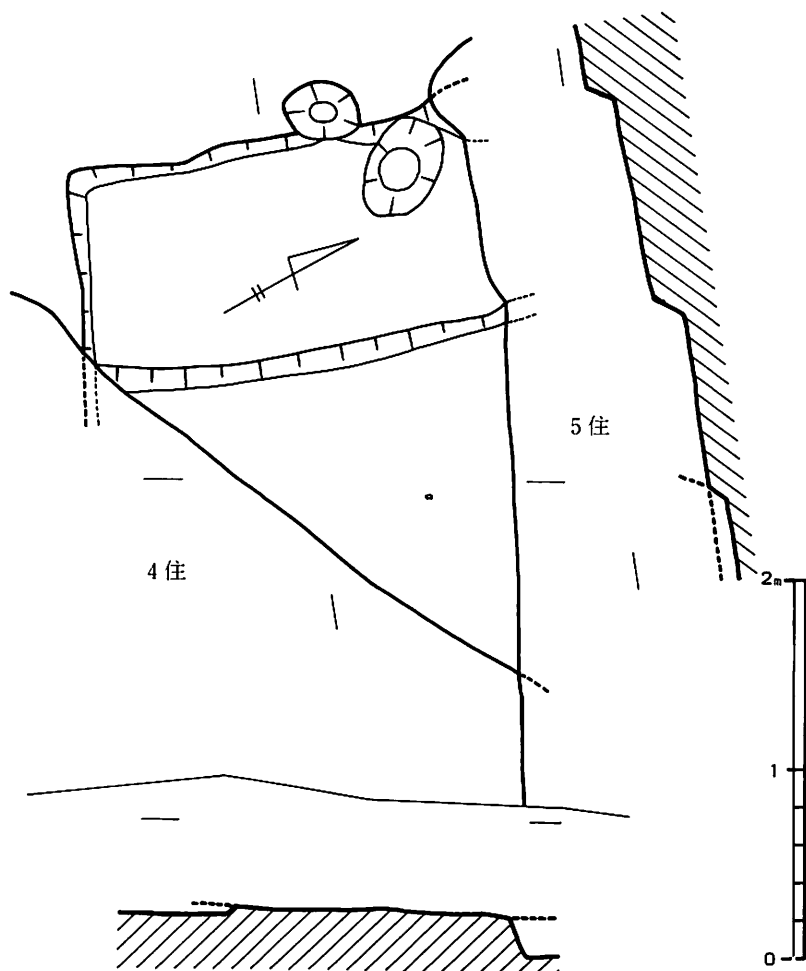
いる。11は高坏の坏部と脚部の接合部分である。坏部と脚部は共に欠いていて、全体の器形は不明である。柱状部は長くなり径も大きい。器面調整は、外面ではナデ調整の後、部分的にハケ目が見られる。柱状部内面はヘラケズリで、坏部はナデ調整で、部分的に器面の剝離が見られる。胎土には砂粒を含み焼成は良い。乳白色を呈している。

12は高坏の脚部で、9と同一物と考えられる。裾部は内湾気味に開く。上部には円孔を有しているが、何個配するかについては不明である。器面調整は、外面でナデ調整とヨコナデを施している。

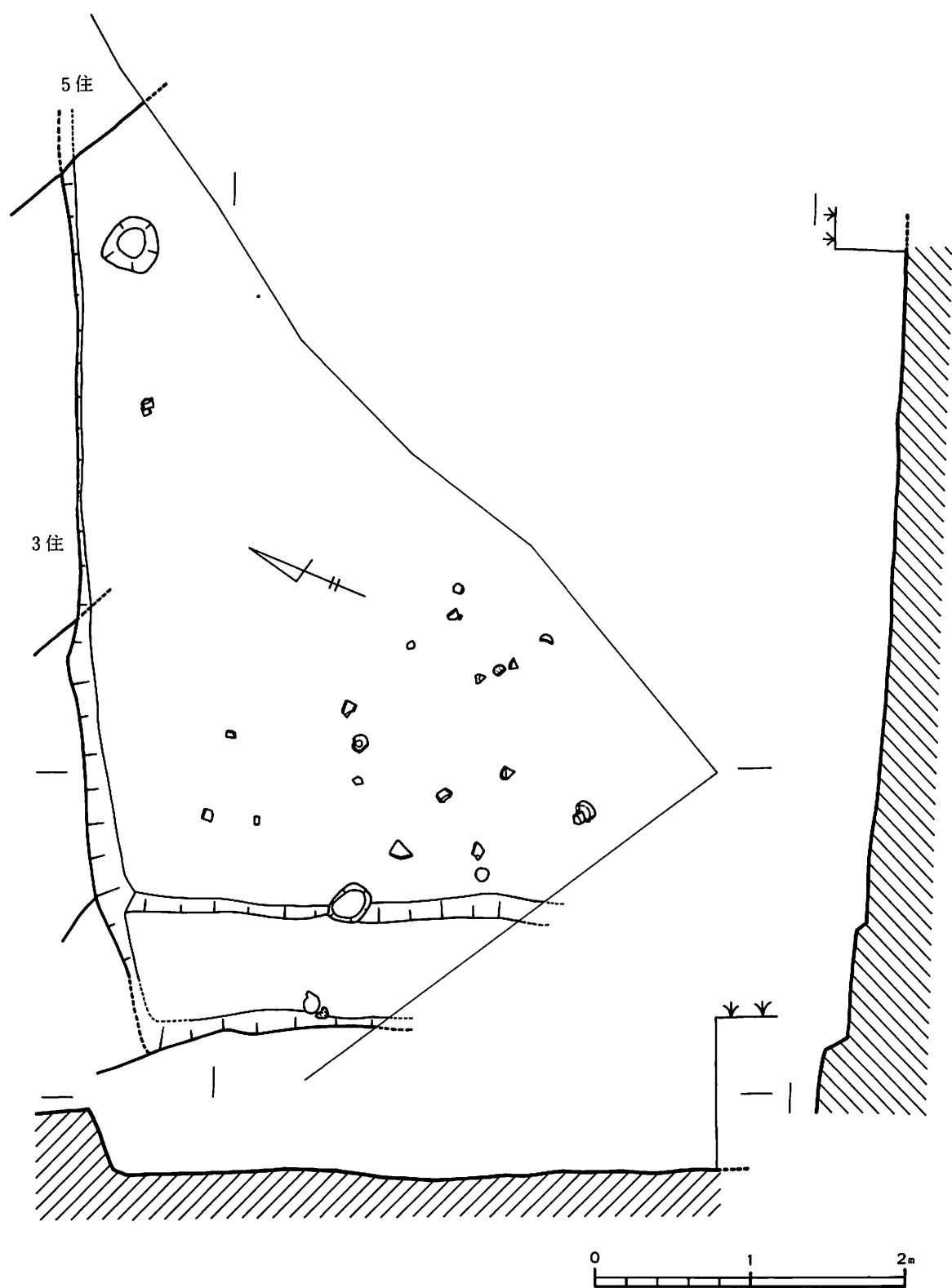
内面は柱状部をヘラケズリ、裾部はハケ目の後にナデ消している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。褐色を呈している。13はジョッキ型土器の底部片である。胴部のくびれが大きく、底部にはシャープな稜をもつ。胎土はきめ細かな土で、焼成も良い。把手の有無については細片のため不明。14は、縄文式土器である。晩期に属する深鉢で、口縁部が直口し、貝殻条痕文を施している。

3号住居跡 (図版1-3 第7図)

調査区の東側に位置し、4号住居跡と5号住居跡から切られ、西側壁面と南側壁面の一部を残している。残された部分から、プランは方形を呈し、西側壁面に沿って幅1.1mのベッドを有していることが判る。床面は堅く、壁面の状態もきわめて良い。1号住居跡と同様、遺物の出土は見られない。



第7図 3号住居跡実測図



第 8 図 4 号住居跡実測図

4号住居跡 (図版1-3 第8図)

3号住居跡を切り、5号住居跡から切られる関係にある。プランは長方形を呈し、北側壁面は現長5.8mを測り6m以上の長さになるものと考ええる。また、西側壁面に沿って幅0.7mのベッドを有している。床面は堅く、壁面の状態も良い。

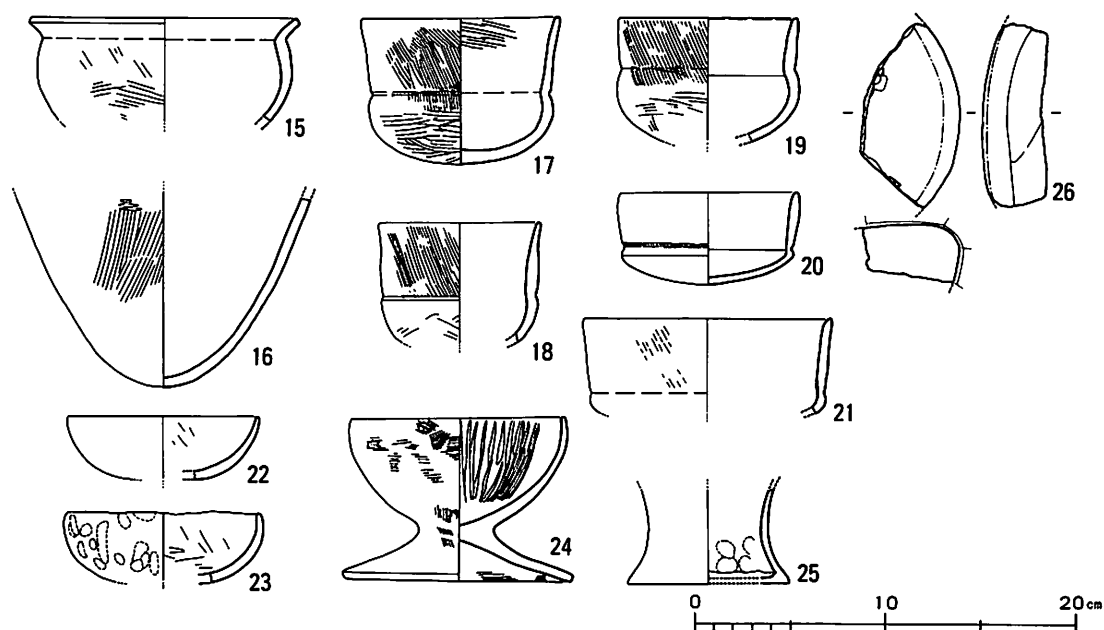
遺物 (図版6-12 第9図)

住居内西側に主として散在していた。その多くは破碎された状態であった。

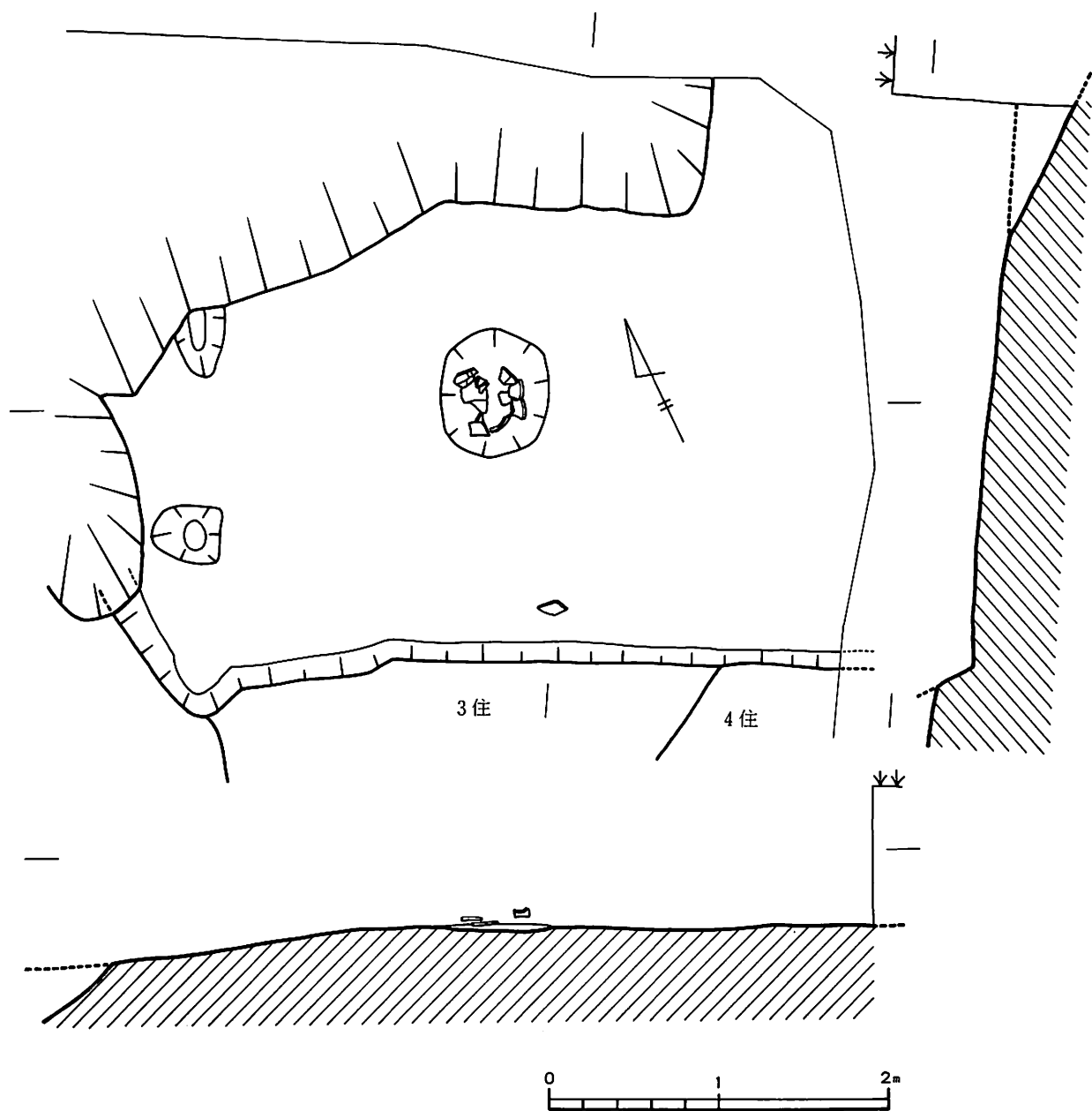
15は鉢の破片で、復元口径14cm弱。焼成は良好で、やや赤味を帯びた色調を呈す。外面はおおよそ斜位と横位のハケ目を施したのち、それをナデ消しており、内面は斜位のナデである。

16は、甕の底部片である。全体形は長胴丸底になるものと思われる。外面上位に若干タタキ目が見られ、下位はハケ目を施している。底部はナデ仕上げである。外面には全面ススの付着痕が見られ、特に底部の頂点には、直径4cm程度のススの付着が見られる。この部分は、火にかけたときの支柱に接する部分で、強い火熱を受けずにススがふっ切れなかったものであろう。使い込みによる器面の荒れが顕著である。内面は、底部の中心から少しずれて、直径6cm前後のコゲツキの見られない範囲があり、その上位はコゲツキによる変色帯が周回している。

17は、鉢の胴部の破片である。復元口径9.9cm。焼成は、極めて良好である。口縁部外面は斜位のハケ目、胴部は3方向のハケ目を施したのちに少しナデしており、内面はハケ目のあとナデとヘラによる仕上げを行っている。なお、口縁部と胴部のハケ目原体は異なる。スス等の汚れは見られな



第9図 4号住居跡出土遺物実測図



第10図 5号住居跡実測図

い。18は鉢の破片で、復元口径8cm。口縁部外面に斜位のハケ目を施し、そのあとヨコナデを行っている。胴部も不規則な方向のハケ目のあとナデ消している。内面は全面ヨコナデである。焼成は良好である。19は鉢の破片で、復元口径8.8cm。極めて均整のとれた形状を呈し、内外面の調整も丁寧で、焼成も良好である。口縁部から肩部にかけて、斜位のハケ目、胴部下半は横位のハケ目を施したのちナデで仕上げている。

20は、ほぼ完形の鉢である。口径9cm、器高4.8cmを測る。口縁部は中位で肥厚し、端部は丸くおさまっている。頸部は明瞭な段を有し、短かいハケ目を施す。肩部が張り出し、胴部は扁平となる。内外面ともに器壁がまだら状に剝落している。

21は鉢の破片で、復元口径12.6cmを測る。口縁部は、やや開いて長く伸び、胴部は扁平なものとなる。外面口縁部に斜位のハケ目が若干残っているが、ほとんどナデ消されている。縦長のススの付着痕が少し残る。内外面ともに器壁の剝落が著しい。

22は鉢の破片で、復元口径10cm弱。手捏土器と言ってもよく、全面指頭によるナデであるが、外面の調整は粗く、内面は丁寧である。

23は鉢の破片で、22によく似る。復元口径10cm弱で内外面ともナデ調整であり、外面に指頭痕が顕著に残る。内面の調整は丁寧である。

24は土師器の台付鉢で、体部と脚部の一部を欠く。焼成は良く、堅く焼き締まっている。口径10.6cm、器高8.7cm、脚部の端部径11.6cmを測る。内外面の調整は大変丁寧で、外面はハケ目のあとナデ潰しており、内面はナデ調整のあと放射状のヘラ描き暗文を施している。暗文は胴部下位と、口縁部に近いところと二段に別れて描かれている箇所もある。脚部内面にもハケ目が若干残っているが、胴部外面に残るハケ目よりはその間隔が広い。また、ネズミが齧った痕と思われる小さい疵が内面底部近くに蛇行して残る。

25はジョッキ形土器の破片で、底部復元径8.5cmを測る。底部復元径8.5cmを測る。底部から鋭く内傾して立ち上った胴部は、口縁部に向かって逆に広がる。把手が着いたものと思われるが、小片のため確認できない。内外面ともナデ仕上げで、胴部内面下位に指頭痕が残る。

26は磨石の破片で、全面よく使い込んでいる。特に側面が最も摩耗している。

5号住居跡 (図版1-3 第10図)

この住居跡は、南側壁面と西側壁面の一部を残している。南側壁面は3号住居跡と4号住居跡を切っている。住居の北側は大きく攪乱を受けているため、全体の規模は不明である。

住居のほぼ中心と思われる所に直径約80cmの炉を配している。床面は堅くしっかりしている。

遺物 (図版6-3 第11図)

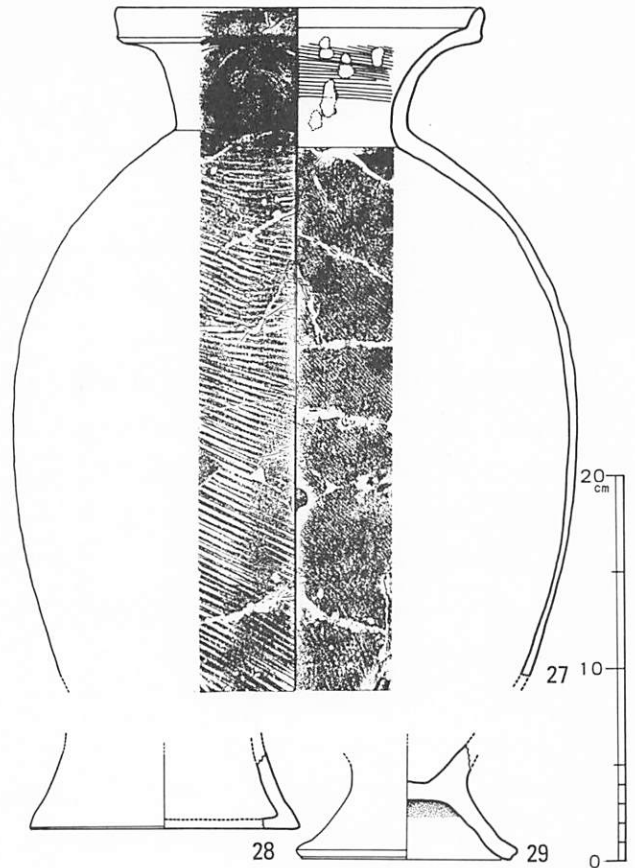
炉趾の炭化物の上から複合口縁壺が出土した他には、あまり多く出土しなかった。

27は複合口縁の壺である。複合部は短かく直口しているが、ナデ調整のため中位がわずかに曲線を描いている。胴部は張りが大きく、最大径を中位に有している。底部は欠いているが丸底になると思われる。器面調整は、外面の口縁部はナデ調整、頸部はハケ目、胴部は全面右下がりのタタキ

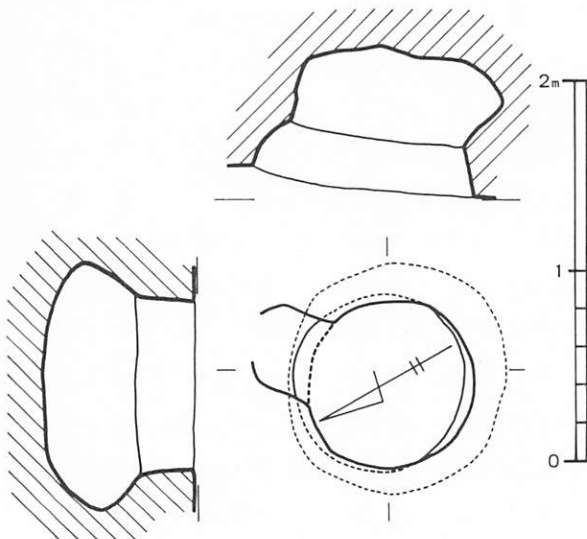
目を施している。内面は、口縁部でナデ調整、頸部はヨコ方向のハケ目、胴部には全面右下がりのハケ目を施している。特に、胴部外面においてはタタキ目を施したため器面に平坦な部分が多く見られる。胎土には小さな砂粒をわずかに含んでいるが、焼成はあまり良くない。そのため口縁部内面や、肩部において器面の剥離が見られる。なお、この土器は炉跡から出土したものであるが、器面にススの付着は見られない。

28は、ジョッキ形土器の底部片である。把手の有無については破片のため断定できない。器面調整は全面ナデを施している。胎土には砂粒を含み、焼成もあまり良くない。

29は脚台で、上部を欠いている。裾部は大きく開き、端部はナデ調整を行なっている。内面には砂粒の付着が見られる。器面調整はナデ調整を全面に施している。胎土には砂粒を含み焼成は良いようである。ただ、くびれ部においては部分的に器面の剥離が見られる。



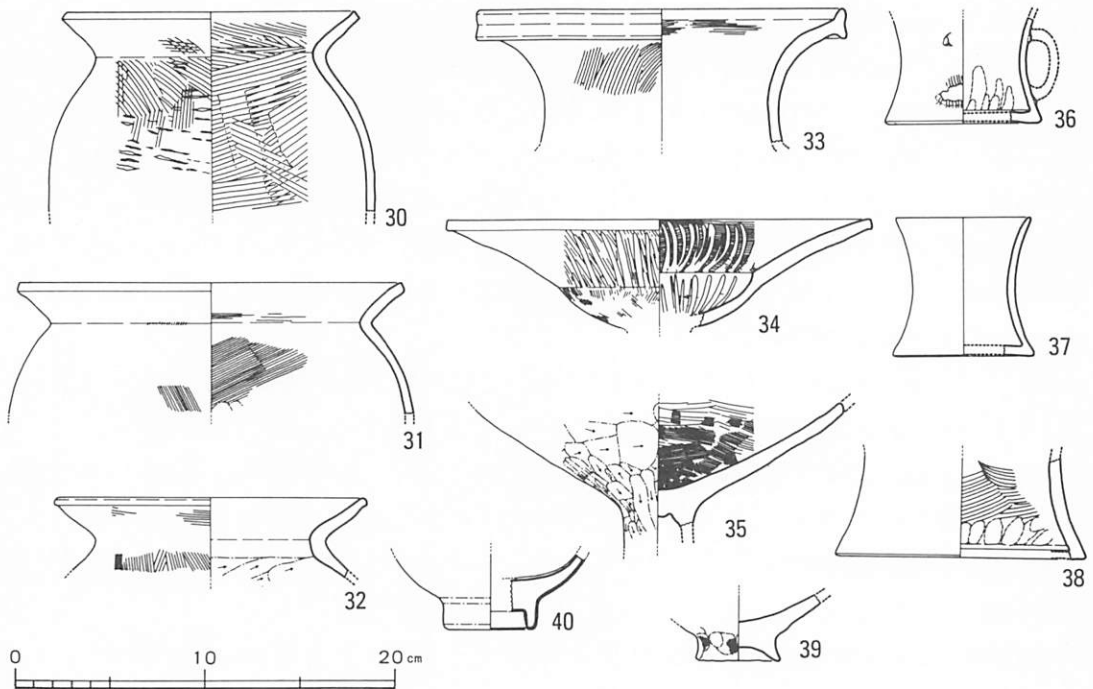
第11図 5号住居跡出土遺物実測図



第12図 貯蔵穴実測図

貯蔵穴 (図版2-1 第12図)

袋状を呈し、上部径0.9m、下部径1.3m、深さ0.8mを測る。内部から遺物の出土は無く、時期は不明である。



第13図 遺構に伴わない遺物実測図

北区一括

遺物（第13・14図）

30は口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は15cmを測る。肩部はやや張り出し、口縁部は「く」字形に外反し、端部は鋭い角を持ち平坦となる。外面は横位のタタキ目をナデ潰し、そのあと肩部では斜位、あるいは縦位のハケ目を施す。内面は全面ハケ目を施し、口縁部ではそれをナデ消している。外面に部分的にススが付着している。内面の汚れは見られない。

31は甕の口縁部片で、復元口径約20cm。口縁部は「く」字形に外反し、端部は外側が丸く、内側が角ばって平坦面を持つ。外面は口縁部から肩部にかけてはヨコナデで、その下位にハケ目が見られる。内面は肩部に斜位のハケ目、その下がヘラケズリである。口縁部、頸部はヨコナデ。外面には、全面ススが付着し、内面にも口縁部に幅2cm前後の変色帯がめぐる。

32は甕の口縁部片で、復元口径15.8cm。外反した口縁部はやや内湾して開き、端部は外側が丸くふくらむ。外面肩にハケ目を施し、その他はヨコナデである。内面は口縁部、頸部がヨコナデ、肩部以下が右上りのヘラケズリである。ススやコゲツキの痕跡は見られない。

33は複合口縁壺の口縁部片で、復元口径18.8cm。外湾して広がった口縁部は端部で上下に摘み出され、丸まっておさまる。外面に斜位のハケ目、内面口唇部に近い部分に横位のハケ目を施し、ともにそのあとナデている。外面にはススの付着が顕著で、内面にも口唇部付近に変色が見られる。

断面にも変色を来しているの、破砕後火熱を受けたものと思われる。焼成はさほど良くなく脆い。34は高環の坏部片で、脚部を欠いている。復元口径22.2cm。基部から内湾して立ち上った坏部

は口縁部で逆に外湾気味に大きく広がる。その境目の内面には明瞭な稜を有する。外面は全面ハケ目を施し、そのあと口縁部は放射状のヘラ描き暗文を、体部はハケ目をナデ消している。内面も口縁部はハケ目のあとヘラ描き暗文を施し、体部はナデのあとヘラ研磨で仕上げている。内外面にスス、あるいは火熱による変色が見られ、光沢がある。

35は高坏で、口縁部と脚部を欠く。外面はヘラケズリだが、基部に近い部分のそれは、方向がほとんど下へ向っているところから、土器を逆さにしてヘラケズリを行なったものと思われる。内面は2種類のハケ目原体を用いて調整し、そのあとナデている。胎土に多量に砂粒を含んでいる。また、口縁部は接合部から剝離している。

36はジョッキ形土器の破片で、復元底部径8.2cm。把手を取り付けた痕跡がわずかに見受けられる。把手の付き方から推察すると、器高は現状から、やや伸びる程度であると思われる。

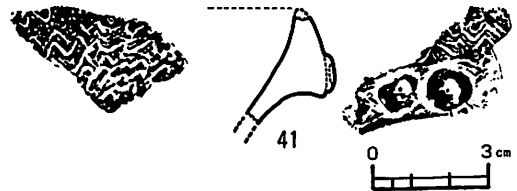
37はジョッキ形土器で、復元口径6.8cm、底部径7.4cm、器高7.2cm強を測る。均整のとれた形状を呈し、ナデによる器面調整も丁寧である。破片のため把手については不詳。

38はジョッキ形土器の破片で、復元底部径13.2cm。外面はナデ、内面はハケ目を施したあと底部に近い部分は指頭による調整を行なっている。把手については不詳。

39は器種不明。脚台か、蓋の摘みの部分であろう。外面に若干のハケ目と指頭痕が残る。

40は青磁碗の底部片である。高台の復元径4.8cm。

41は、複合口縁壺の口縁部小片である。小片のため、口径は不明。外面に2段の、内面に3段に渡る櫛描波状文を施し、外面には直径1cm程の円形浮文を貼り付け、さらにそのあと中心から右に寄った部分を押圧して凹ませている。



第14図 遺構に伴わない遺物実測図

2 東 区 (図版2-23 第15図)

校舎解体後、新校舎建設予定地の東端に設定した調査区で、23.5m×13mの広がりをもっている。校舎の下にあったため上層の攪乱がひどく、調査区中央では職員用便所によって大きく攪乱を受けていた。

調査区は東側と西側が大きく落ち込み、中央部は平坦で高くなっていた。

東側の落ち込みでは大小合せて3箇所の集石遺構が検出された。(A～C群) 中央部では土壌を1基と多数のピットが検出されたが、構造物を構成するような配列は確認されなかった。

西側の落ち込みでは集石遺構(D群)が見られ、落ち込みの各所で遺物の出土があった。集石の隣りには住居跡の一部も検出することができた。

集石遺構A群 (第16図)

直径約1.5mの広がりをもつ集石遺構で、こぶし大の礫を多く分布している。一部には弥生後期の土器も含んでいるが、混入の可能性が強く果して時期として決定しうるか疑問である。

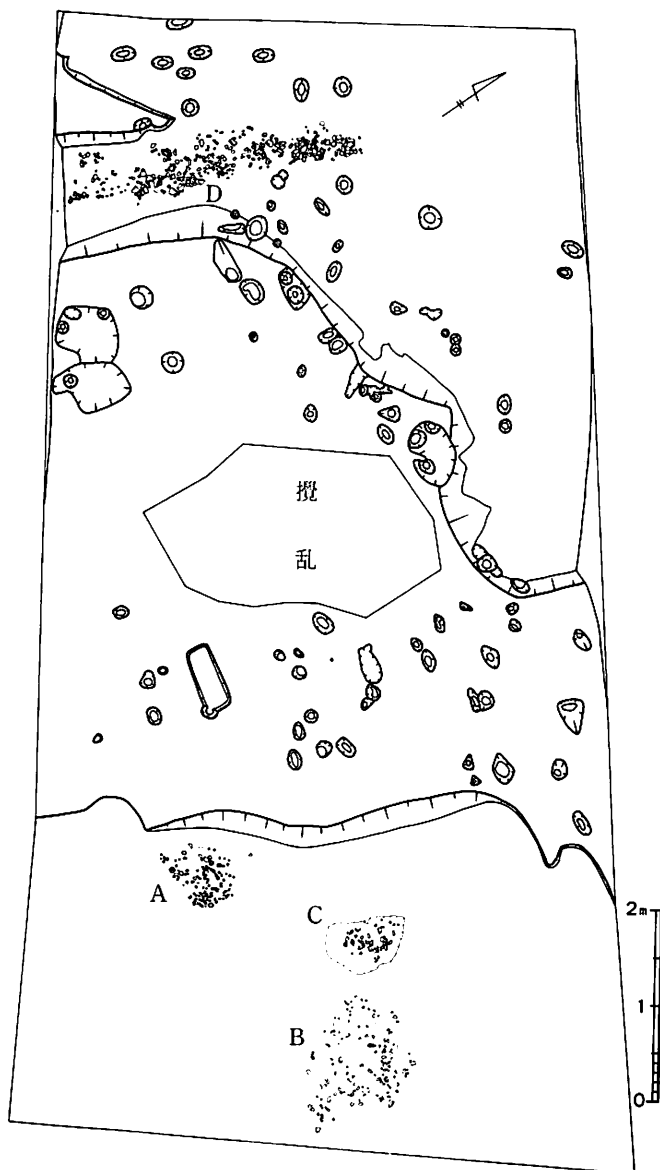
集石遺構B・C群

(図版2-2 第17図)

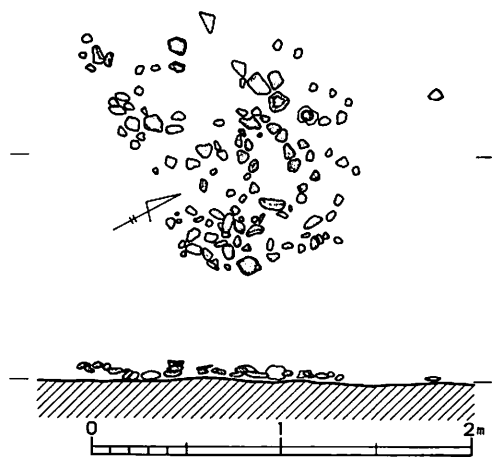
B群とC群は隣接し、同一集石とも考えられたが、C群がピット内に見られるところから、別の礫群として考えた。

B群は直径2.5mの広がりを持ち、A群やC群に見られるような密集でなく、散在した状態と言える。礫の下は浅く平坦となっている。

C群は長径1.6m、短径1.1m、深さ13cmの不整形なピットに集中して見られる。これらは、いずれも遺物が少なく瓦質土器や、磁器片が出土



第15図 東区遺構配置図



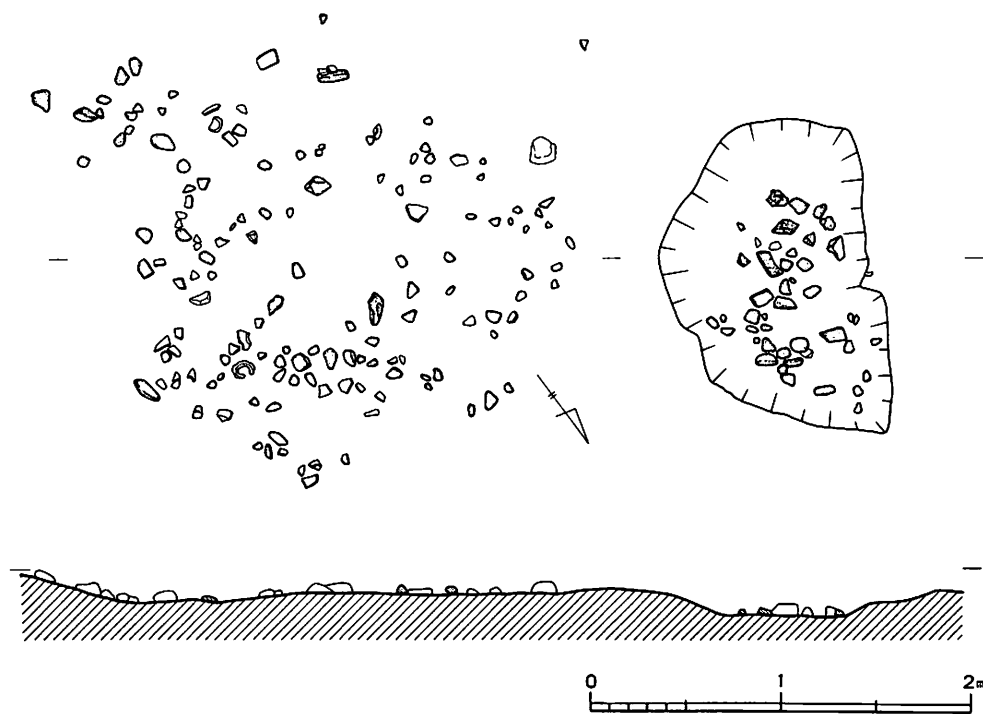
第16図 集石遺構A群実測図

— している。

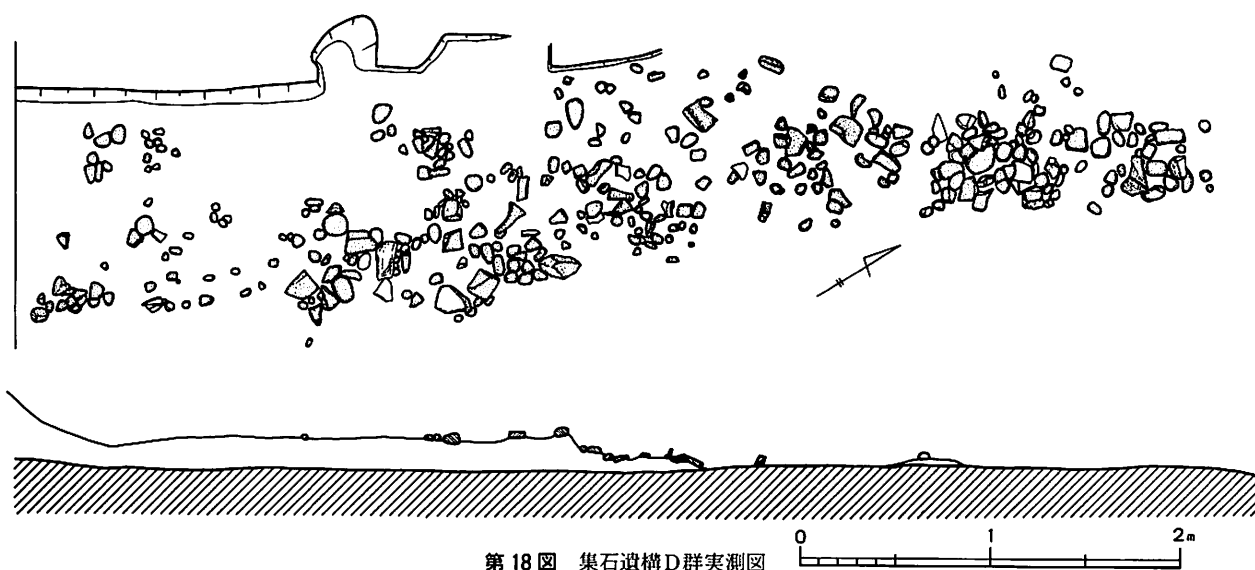
集石遺構D群 (図版2-3 第18図)

調査区の西側落ち込みに沿って在る集石遺構で、長さ6.3m、幅1m、主軸をN-24°-Eに向けている。

集石の中から瓦質土器が数点見られた。



第 17 図 集石遺構 B・C 群実測図



第 18 図 集石遺構 D 群実測図

1号住居跡（第19図）

調査区西端に位置し、壁面の一部を残すのみで、その大半は調査区の外へと延びている。また、残された壁面も先端をD集石群によって切られている。そのため規模は明らかでない。遺物の出土は見られなかった。

1号土壌（第20図）

調査区中央部に位置し、長さ1.4m、幅54cm、深さ20cmの長方形を呈している。土壌の西側と南東コーナーにピットが見られる。遺物の出土は見られない。

その他の遺構（第21図）

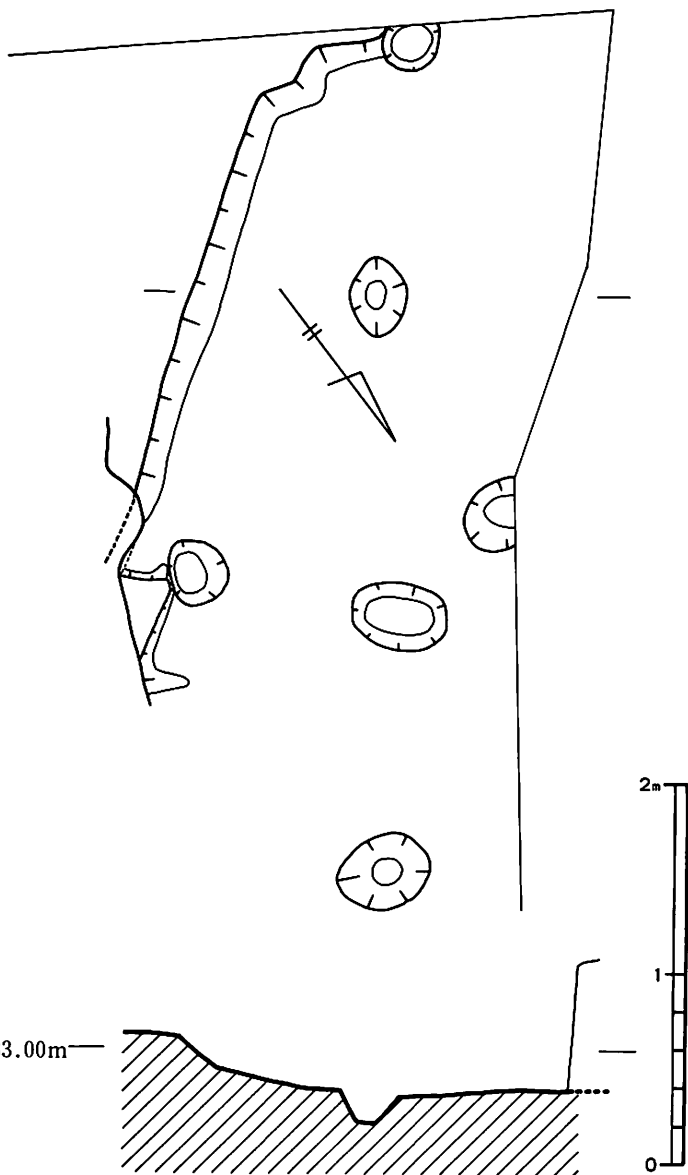
調査区北端部で、西側落ち込みに沿って遺物が出土した。住居跡とも考えられたが、壁面や床面が落ち込みと同一であるところから住居跡の可能性は薄い。しかし石皿や砥石が一括して出土しているところから、何らかの遺構であろうと考えられる。

遺物（第22図）

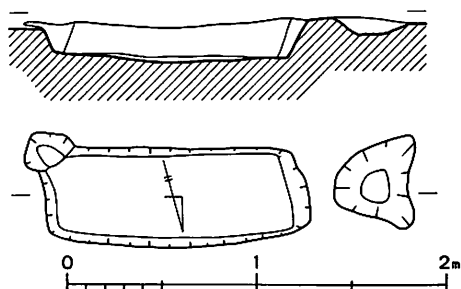
落ち込みのラインから約1m離れて集中して出土している。

1は石皿の半欠品である。表裏両面ともよく使い込んでおり、凹レンズ状に凹んでいる。側面は、打ち欠いて形を整えたものであろう。

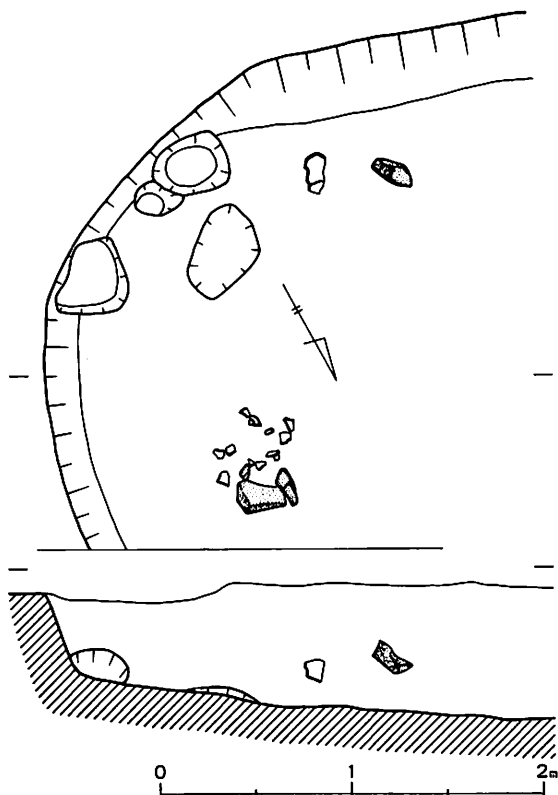
2は砂岩製の砥石である。磨面は1面で、側面に若干摩耗が見られる。磨面はほぼ扁平で周縁が少し丸くなる。このことから現状のまま使用されていた



第19図 1号住居跡実測図



第20図 1号土壌実測図



第 21 図 その他の遺構実測図

ことがわかる。擦痕が数条残っている。

3 はアルコーズ質砂岩製の砥石である。表裏面、側面とともに磨面として使用している。

遺構に伴わない遺物 (第23～26図)

調査区全域で出土しているが、遺構に伴う出土は少なく一括資料として取り扱った。

4 は長胴の甕の口縁部片で、復元口径20.6 cm。胴部の張りは少なく、下へ流れるものと思われる。

口縁部は外湾して開き、端部は角ばり、内側は強くナデられて突出している。外面口縁部はタタキ目をナデ潰したあとハケ目、胴部はタタキ目で調整する。内面は全面ハケ目であり、薄くナデている。極めて焼きが良く、堅く締っている。

5 は壺の口縁部片で、復元口径15.2m。口縁部は外湾して開き、端部は丸味のある角を有し、中央がやや凹む。頸部に断面三角形の貼付突帯を有し、胴部は鋭く張り出す。外面は口縁部体部にハケ目、内面は胴部にハケ目を施し、他はヨコナデを行なっている。内面口縁部にススが付着している。

6 は器台である。裾端部径12.8cm。外面はハケ目を施し、裾端部近くをナデ消している。内面は指頭による調整である。スス等の付着は見られない。

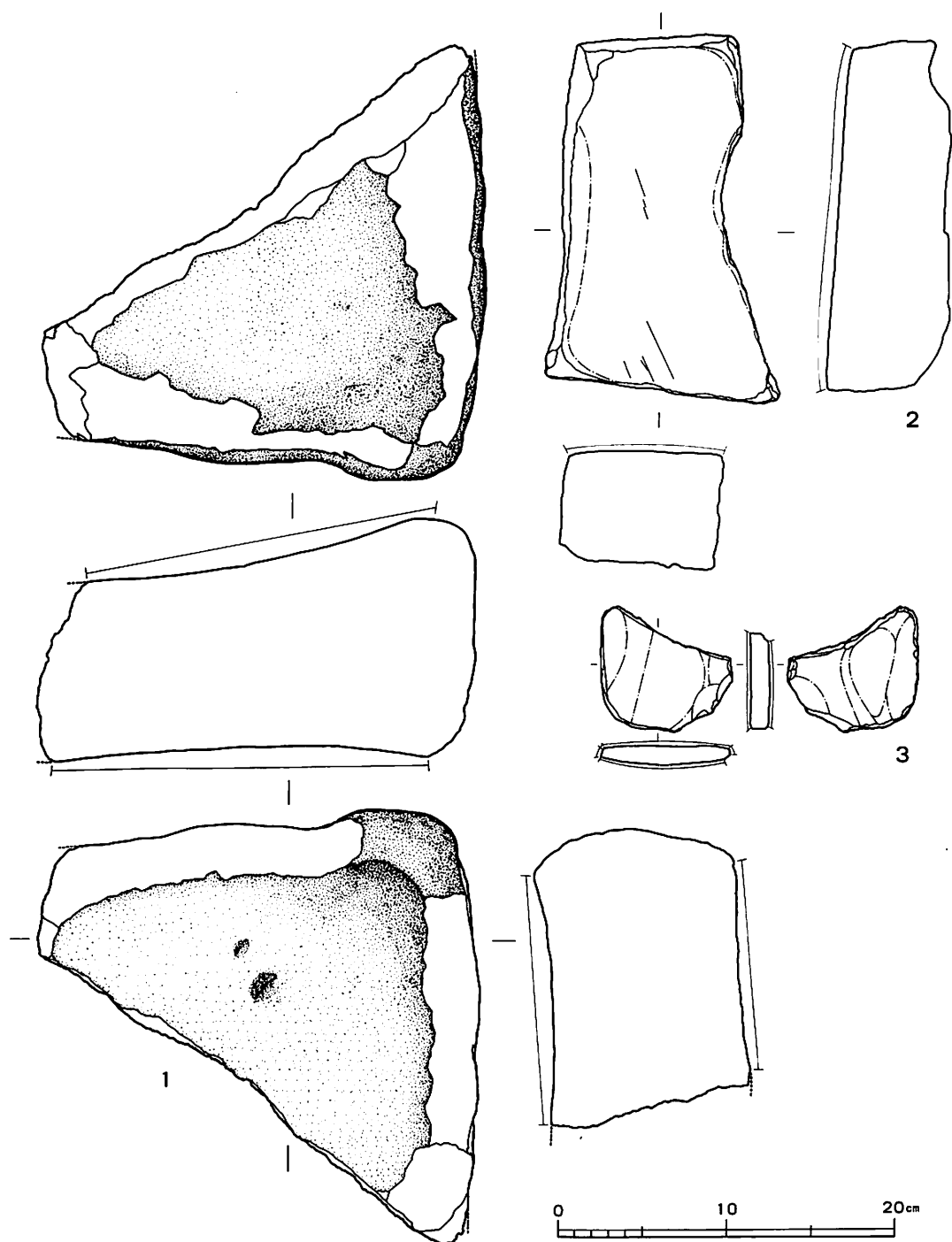
7 は高坏の脚部から坏底部にかけて残る資料である。裾端部径8.5cmを測る。内面で柱状部と裾部の境目に稜を有する。円孔を穿った痕跡はない。坏部内面はナデ、外面は横位のヘラケズリで、脚部との接合部ではハケ目で調整している。柱状部以下は縦位のハケ目を施したあと薄くナデている。脚部内面は柱状部がヘラケズリ、裾部はヨコナデである。

8 は鉢の破片で、復元口径17.2cm、器高6.9cmを測る。外面は粗いハケ目のあと薄くナデており内面は粗いハケ目のあと下半に細かいハケ目を左上りで施している。外面にはススの付着が顕著で、底部付近は強い火熱によって赤変しているが、内面の汚れはない。

9 は鉢の口縁部片で、復元口径19.2cm、全体形は半球形より少し深くなるものと思われる。内外面ともにハケ目調整で口縁部をヨコナデしている。

10 は高坏の口縁部片で、復元口径29.8m。2度折れて開いた口縁部は肥厚し、端部は丸まる。外面胴部はヘラケズリのあとナデで仕上げている。

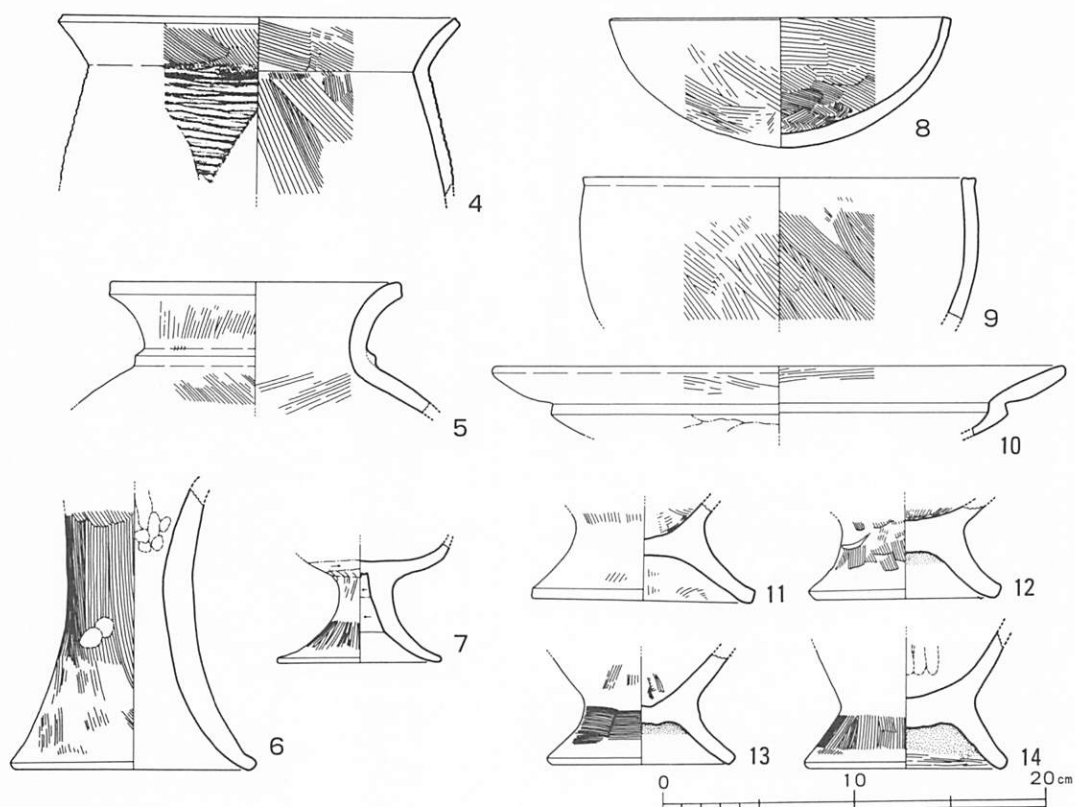
11 は甕の脚台で、端部径11.2cmを測る。外面胴部の半面にススが付着し光沢がある。内面の汚れ



第 22 図 その他の遺構出土遺物実測図

はない。

12は甕の底部で、裾端部径9.3cm。砂付土器である。外面は全面ヨコナデのあとハケ目を短かく



第 23 図 遺構に伴わない遺物実測図

引き上げるように施している。内面もハケ目である。スス等の付着は見られない。

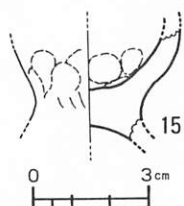
13は甕の脚台で、端部径9.1cm。砂付土器である。外面脚部は横位の細かいハケ目を施し、胴部は火熱による器面の荒れでよく確認することができないがハケ目調整であろう。内面は幅1.3cm程の板状の工具によって調整している。内面の汚れは見られない。

14は甕の底部で、裾端部径10cmを測る。所謂砂付土器である。脚部外面に縦位のハケ目を施している。脚部に若干ススが付着する。

15はミニチュアの脚付甕か鉢であろう。底部のくびれ部径は2.8cmを測る。くびれ部に若干ハケ目が残るが、全体指頭による仕上げである。

16は甕の口縁部片で、復元口径21.2cm。胴部は17に比べると膨みが大きく口縁部は「く」字形に外反し、やや湾曲する。外面は口縁部で右上りのタタキ目を指頭によってかなり潰しており、頸部以下は右下りのタタキ目のあと、下から上へハケ目を引き上げている。内面はハケ目による丁寧な調整を行っている。口縁部外面に若干ススが付着する。

17は甕の口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径15.8cmを測る。体部に比べ口縁部は極端に薄く仕上げられ、直線的に外反し、端部はやや肥厚する。外面口縁部は斜位のハケ目、頸部以下は右下りのタタキ目を施している。内面は口縁部が横位の、胴部は斜位のハケ目である。外面にススが全面付着している。



第 24 図 遺構に伴わない遺物実測図

18は複合口縁壺の口縁部片で、復元口径20cm。外面下位に縦位のハケ目、内面は横位のハケ目を施す。

19は複合口縁壺の口縁部片である。復元口径17.4cm。口唇部は上端に粘土を継ぎ足して断面方形の口唇部を作り出しており、さらにその上面と側面に刻目を施している。外面は概ね縦位の、内面は横位のハケ目を施し、内面ではナデ消している。また、外面にはハケ目原体を押圧した痕が見られ、その幅は1.8cmで、刻みは7個である。

20は石庖丁未製品の半欠品で、石材は粘板岩である。周縁を細かく打ち欠いて調整する段階で、半分に折れ、製作を断念したのであろう。研磨の痕跡は見られない。

21は陶石製の砥石である。上下面及び側面も良く使用している。上下面の中央部は縦長に凹む。

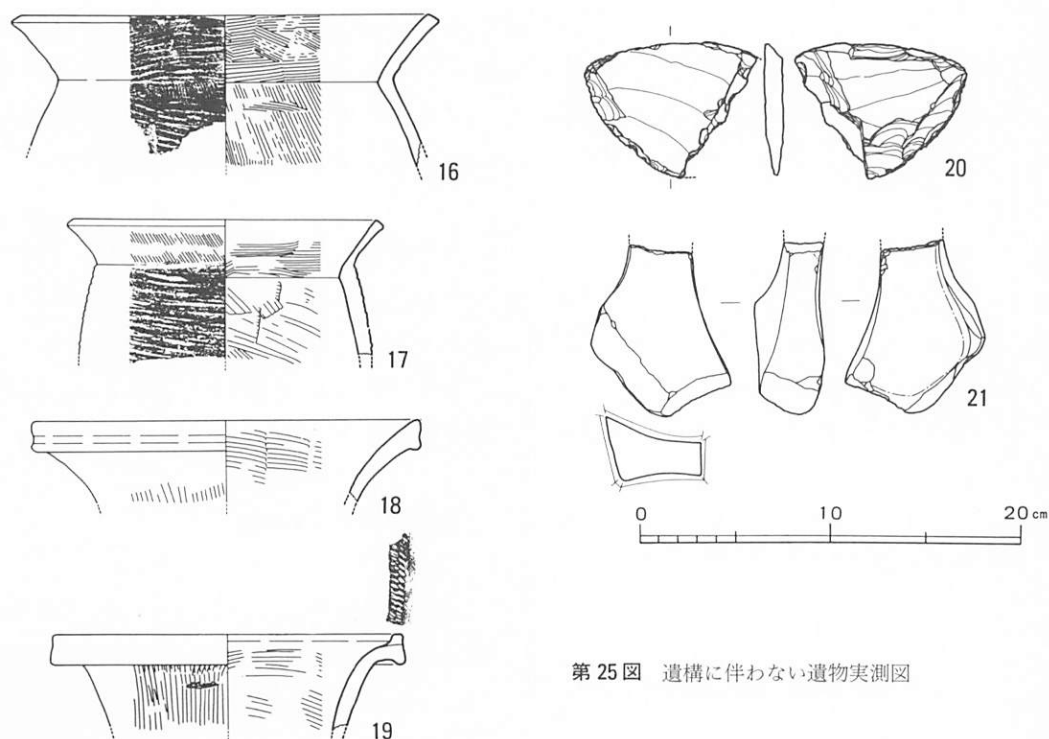
22は胴部以下を欠く甕の破片である。口縁部はわずかに外反気味に「く」字状に広がっている。

口唇部はナデによって中央部がわずかに凹んでいる。胴部の張りは少なく長胴となっている。底部は欠いているが丸底になるものと思われる。器面調整は、外面では、口縁部はヨコナデ、胴部はタタキの後にハケ目を施している。タタキは、頸部近くでは水平に近く、それ以下では右下がりとなっている。内面は、全面にハケ目を施している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

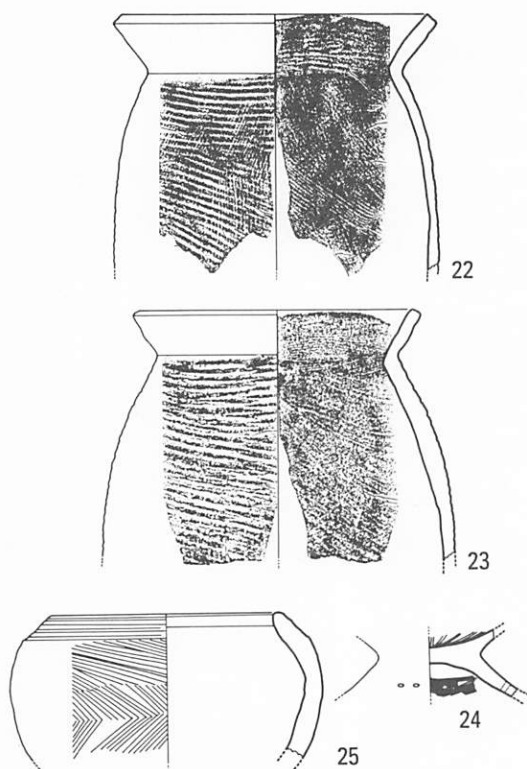
そのため吸水性が強い。外面は全面にススの付着が見られる。

23は口縁部をやや内湾気味に「く」字に開く甕で、在地系の脚付長胴になる。胴部には外面に粗いタタキ目を施し、内面には全面ハケ目を施している。胎土にはわずかに砂粒を含み、焼成も良い。

24は台付鉢の底部であらう。体部内面に径5.5cm程の焦げつき痕が見られるが、この焦げつきの



第25図 遺構に伴わない遺物実測図

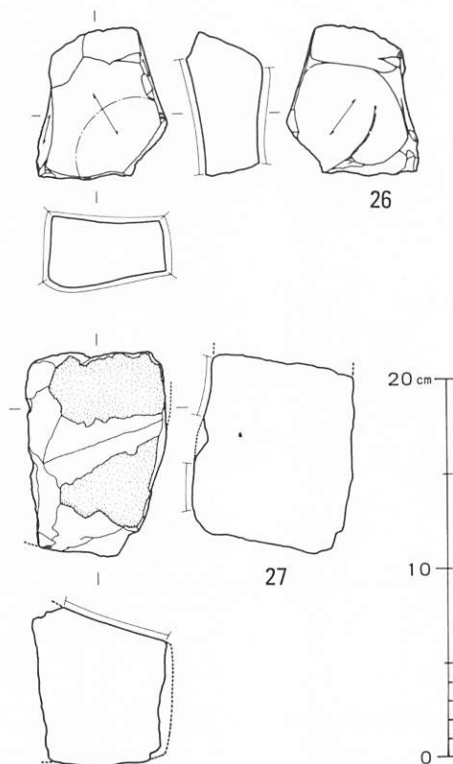


のちに、放射状にヘラ描き暗文を施している。

25は、土師器の無頸壺である。口縁部は内向し、口唇部は山形を呈している。頸部には稜をめぐらし、粗いヨコナデを施している。胴部にも粗いハケ目を施している。内面は全面ナデ調整を施している。器壁は厚く仕上がっている。胎土には砂粒を含まず、焼成は良くない。

26は陶石製の仕上げ砥石である。研磨面は上下二面を主にしているが、片面の研磨はあまり進んでおらず、自然面の姿をわずかに残している。研磨面は中央部が凹んでいて、使用の頻度を物語っているといえよう。

27はアルコーズ質砂岩製の砥石片である。磨面は一面で、中央部に断面三角形の溝状の切り欠きが見られるが、これは砥石として使用された当時のものではなく、後世の何らかの要因で削れたものであろう。



第26図 遺構に伴わない遺物実測図

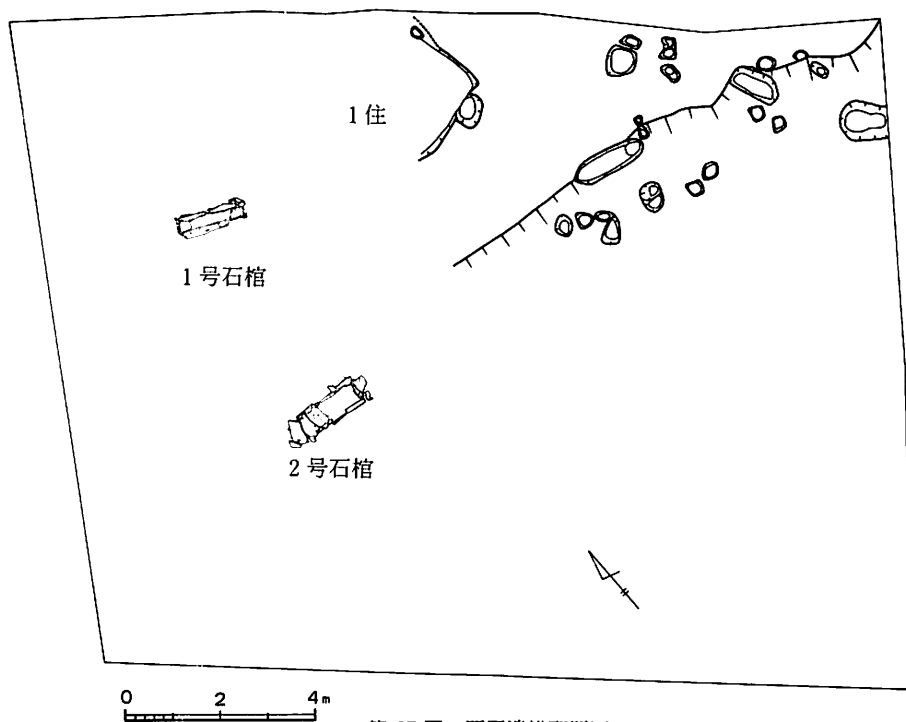
3 西 区 (図版3・4 第27図)

校舎解体後、西側端部近くに設定した調査区である。調査に際しては花籠組のユンボによって表土剥ぎを行っていただいた。

調査の結果、住居跡1軒、石棺2基、祭祀遺構を検出することができた。

1号住居跡 (第28図)

調査区の南端において検出された。南側と東側の壁面の一部を残すのみで、北側は調査区域外へと伸びていた。壁面は明確に残り、住居内には炭化物が一部に厚く堆積していた。

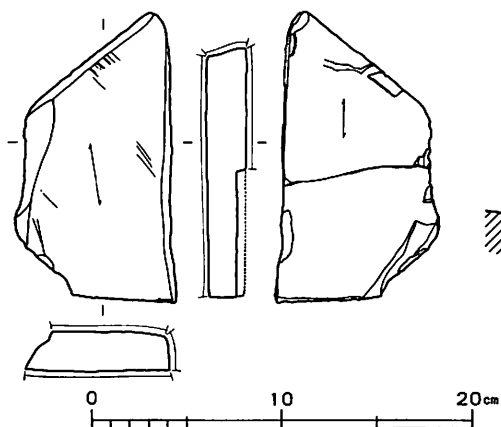


第 27 図 西区遺構配置図

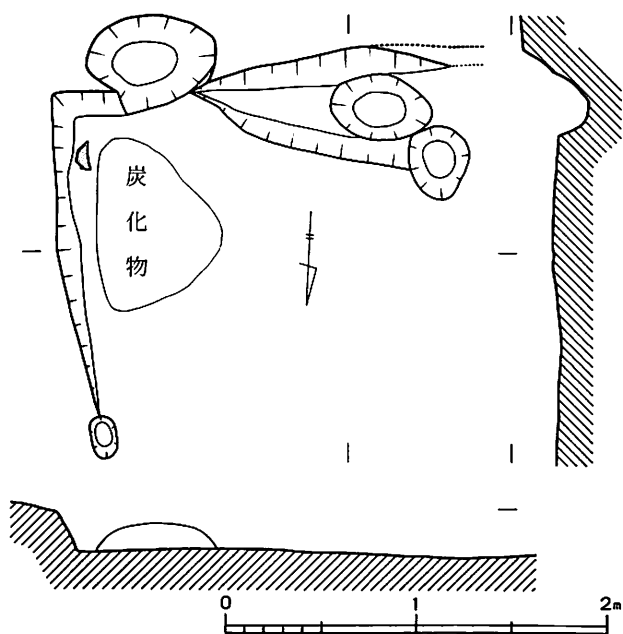
遺物（第29図）

遺物としては砥石が 1 点出土したのみである。砥石は東側壁面に沿って出土した。

1 は砂岩製砥石で、扁平に研磨されている。側面使用されていて、かなり使いこんだ砥石である。



第 29 図 1 号住居跡出土遺物実測図



第 28 図 1 号住居跡実測図

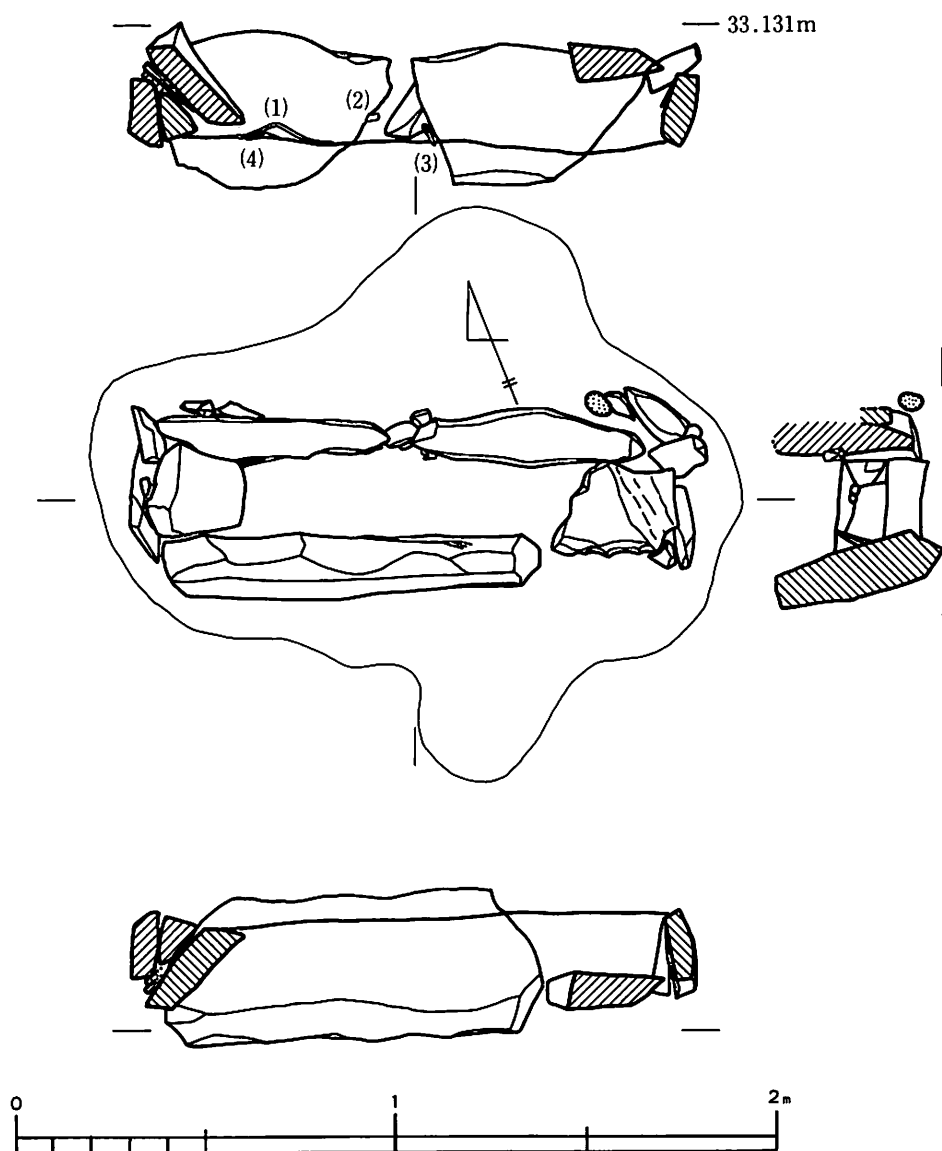
1号石棺（図版3 第30図）

凝灰岩を利用した組合せ箱式石棺である。校舎の下にあったため、すでに蓋石を欠いていた。

石棺は主軸を $N-68^{\circ}-W$ にとり、全長1.5m、幅0.5mを測り、内測で長さ1.3m、幅0.2mを測る。これらから、埋葬された人物は子供であると考えられる。

遺物（図版3・6-7・8、7、第31図）

副葬品は鉄器が4点出土した。これらは石棺内の北側側石に沿って置かれ、西側から鉄剣(1)、その下に棒状鉄器(4)、中央部分に鉄鎌(2)、鉄斧(3)が出土した。



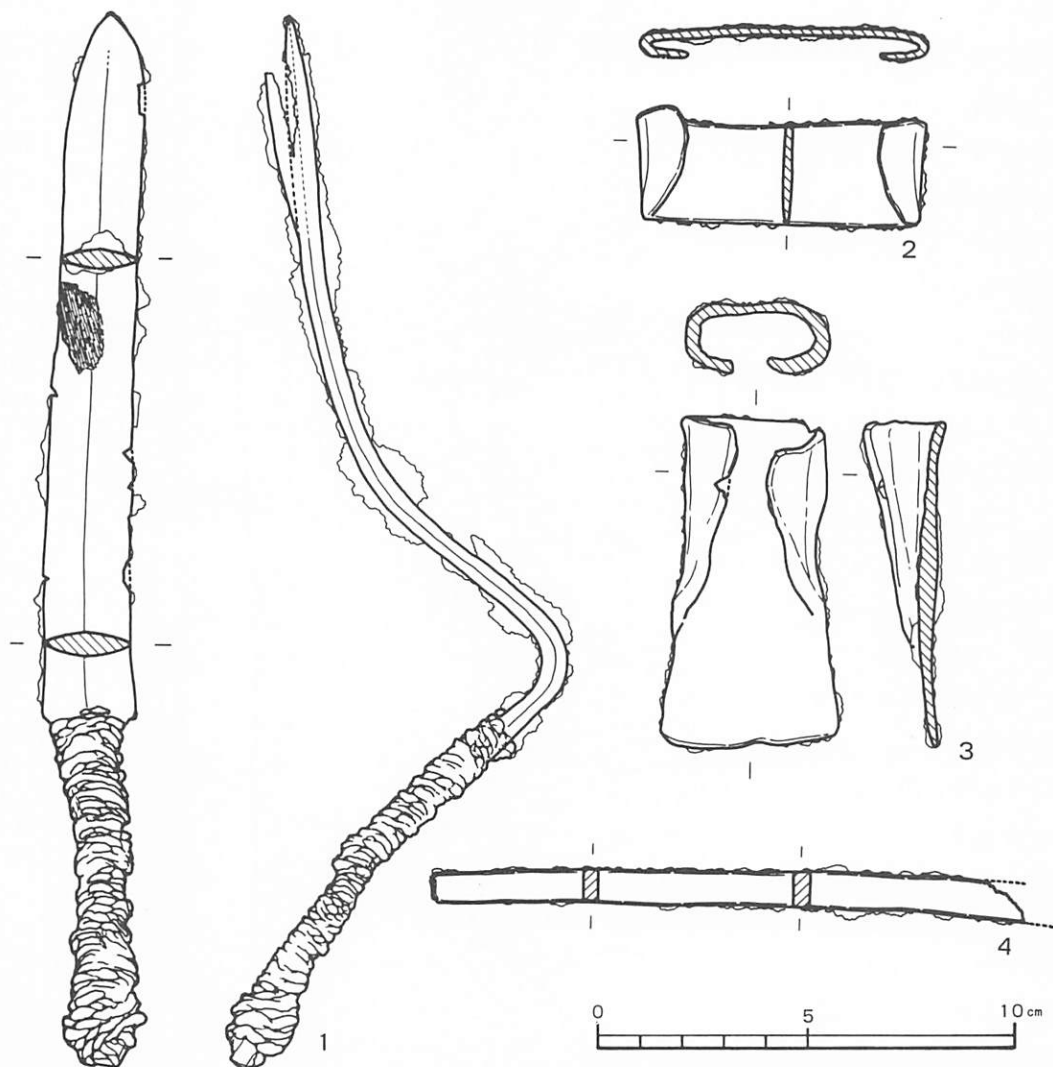
第30図 1号石棺実測図

1は鉄剣、全長30.3cm、身幅2.1cm、厚0.6cm、重さ86.2gの鉄剣である。この剣は、意識的に「く」字状に折り曲げられている。茎、刃部付け根、さらに刃部中位の3ヶ所で曲げられ、刃部付け根では、ほぼ直角になるように曲げられていた。

さらに、特筆すべき点として、茎に撚りをかけた繊維を巻き付けているのである。繊維は肉眼で2種類を観察される。茎先には太目の2本撚りを巻き付けていて、茎全体には細目の2本撚りを巻いているのが見られる。繊維については今後の調査を待たなければならず、現在の段階では言明をさしひかえておく。なお、刃部には木質の付着が見られる。

2は、両端部を折り返した手鎌である。長さ6.9cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm、重さ17.7gを測る。鉄器としては保存状態が良い。

3は、袋部は端部を折り返している鉄斧である。全長8.0cm、刃部幅4.2cm、厚さ0.5cm、重さ43.7gを測る。袋部は内側で長径2.9cm、短径1.3cmを測ることができる。保存状態はきわめて良い。



第31図 1号石棺出土遺物実測図

4は鉄剣の直下から出土した鉄器で、器種は不明であるが、茎の部分になると思われる。側面は刃部を形成しておらず、断面は長方形を呈している。端部平坦で、次第に薄くなっている。現長14.2cm、幅1cm、厚さ0.3cm、重さ18.2gを測る。

1号石棺からは鉄器のみで、土器の出土が見られなかった。

2号石棺 (図版4-1 第32図)

凝灰岩と安山岩を利用した箱式石棺である。

1号石棺の南側4.5mに位置し、主軸はN-92°-Wにとり、ほぼ東西に向かっている。

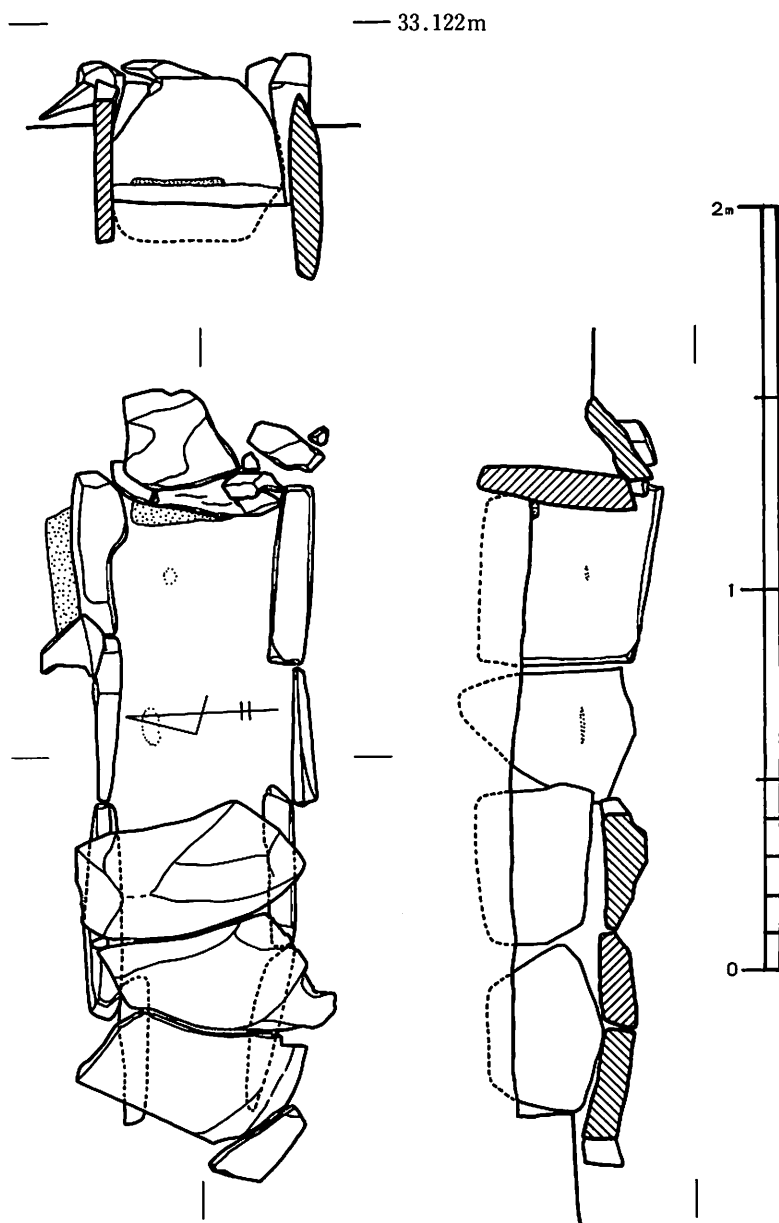
北側側石は4枚の安山岩を使用し、南側では1枚の安山岩と3枚の凝灰岩を使用している。端石は東側のみを残し安山岩を使用していた。

蓋石は西側に3枚を残しているが、安山岩1枚、凝灰岩2枚を使用している。また、一部には白粘土で石材を覆っていた。

全長1.8m、幅0.6mを測り、内側では長さ1.7m、幅は東端で44cm、西端で26cmを測る。このことから東側に頭を置いたものと判断された。

さらに、石棺内東側と北側で人骨が骨粉状で検出された。(点線内)

この石棺からは、副葬品は何も検出することができなかった。



第32図 2号石棺実測図

祭祀遺物 (図版4-2・3、6-5

第33・34図)

幅2.3cm、深さ0.2mの浅い溝状遺構の南端に須恵器壺と土師器皿5点が一括出土した。

壺と皿は意識的に安置した状態を保っており、壺を東側に、土師器3枚と2枚平行して西側に並べていた。そのうち1点は口縁部を下に伏せて壺の近くに置き他の4点は2点ずつ接して置かれていた。図では、記載されなかったが、遺物の下から長径1m、短径0.8m、深さ0.2mのピットが確認された。

恐らく、ピット内に安置したものと思われる。

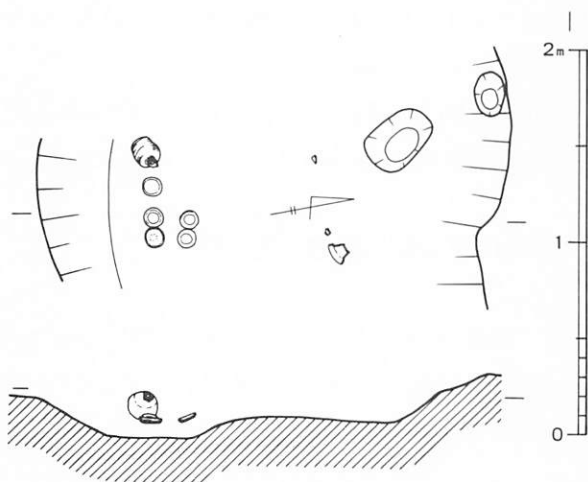
これらの遺物は祭祀行為を止めるものとして考えられるが、^{註1}蔵骨器となるか、^{註2}地鎮具となるかは判断できなかった。

1は須恵器の壺である。胴部径が胴部高より大きく、底部も平底となっている。そのため、ずんぐりとして安定の良い壺である。器面調整は、外面において胴部には全面タタキ目を施し、その後ロクロ回転によりナデ消しているが、部分的にタタキ目を残している。タタキはわずかであるが、右上がりとなっている。胎土はきめ細かな土を使用しているが、焼成はあまり良くなく、底部は色調が異なっている。

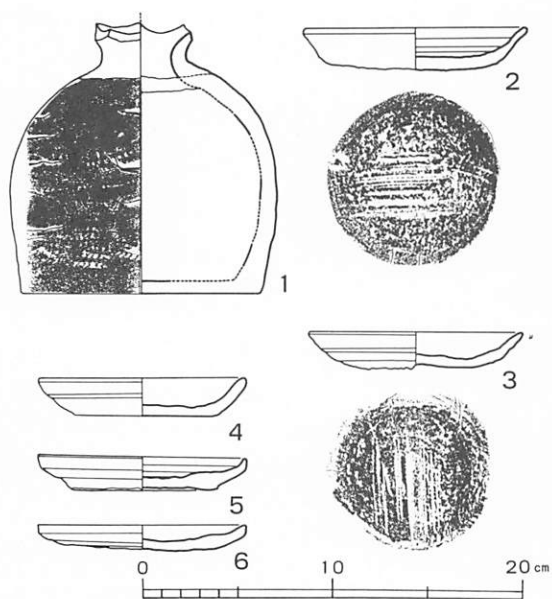
2は口縁部が直線的に開く皿である。口径11.8cm、高さ2.2cmを測る。ロクロ仕上げで、内面はナデ調整である。底部はヘラケズリの後、板状圧痕を残している。

3は口径11.3cm、高さ2cmを測り口縁部を直線的に開く。器面は全面ロクロ仕上げである。底部は平底で、ヘラケズリの後、板状圧痕を施している。そのため、内面では底部がふくらんでいる。

4は口径11cm、高さ2cmを測り、口縁部を直線的に開く。器面は全面ロクロ仕上げで、底部は平



第33図 祭祀遺構実測図



第34図 祭祀遺構出土遺物実測図

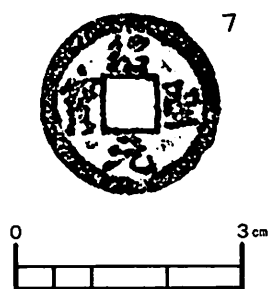
底である。底面はヘラケズリによって調整されている。

5は口径11cm、高さ1.8cmを測る。胴部が大きく開き、口縁部はわずかであるが直口している。器面はロクロ仕上げで、ナデ調整を施している。しかし、内面には器面の凹凸が見られる。底部は平底で、ヘラケズリを行なっている。

6は口径11cm、高さ1.4cmを測る。胴部が大きく開き、口縁部は直口気味になっている。器面調整はナデ調整を全面に施しており、底部にはヘラケズリを施している。

遺構に伴わない遺物（第35図）

7 銅銭 紹聖元寶 直径2.43cm、厚さ1.35mmを測り、中央には1辺7.35mmの角孔を穿っている。紹聖元寶は北宋紹聖年間（1094～97）に铸造されたものである。



第 35 図 遺構に伴わない遺物

註1 富田紘一「通史一原始時代一」鹿本町史1976によれば、鹿本郡鹿本町津袋寺村遺跡より、須恵器壺土師器皿が出土していて、蔵骨器とされている。

註2 「上鶴頭遺跡」熊本県教育委員会1983 上鶴頭遺跡でも同種のセットが出土しており、調査は地鎮具として扱っている。

4 第1トレンチ

校舎間中庭に設定したこのトレンチは、長さ10.5m、幅3.2mの規模で発掘を行なった。

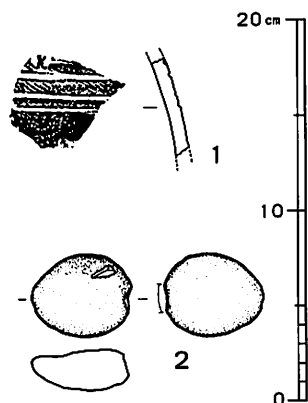
トレンチ内に散在するピットは、調査区域での建造物の確認には至らなかった。また、遺物の出土はわずかであった。

遺物（第36図）

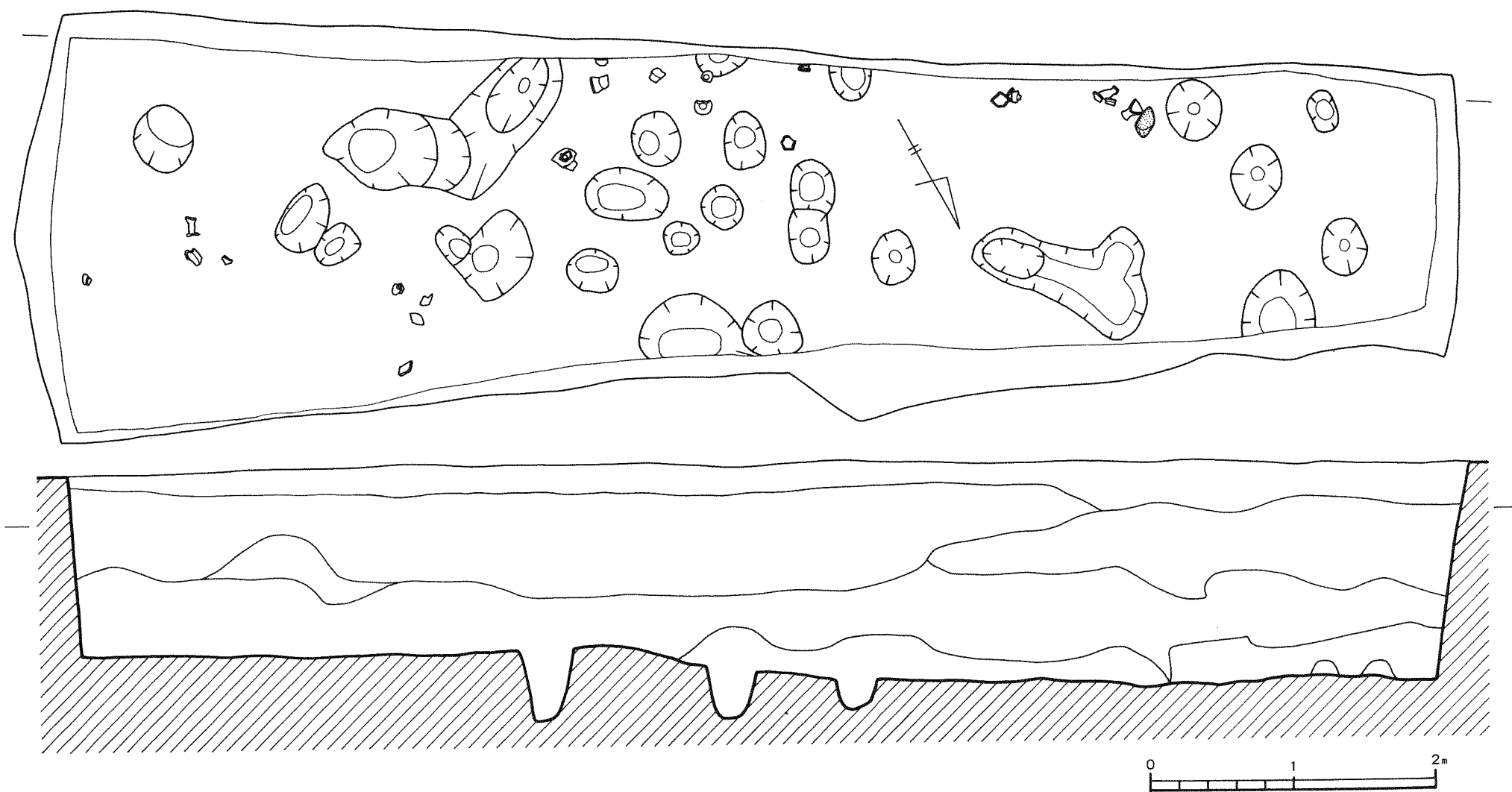
1は縄文式土器である。深鉢で、胴部に3本の沈線をめぐらし、その間にすり消し縄文を施している。さらに上部には刻目を2個配している。これは、西平式土器である。

2は円礫を利用した石錘である。一端にノッチを加えているだけである。石質は安山岩である。

重さ52.5gを測る。



第 36 図 第1トレンチ出土遺物実測図



第 37 図 第 2 トレンチ実測図

5 第2トレンチ（第37図）

第1トレンチの西側に、長さ10.3m、幅約3mの規模で設定した。トレンチ内には多くのピットが見られるが、構造物を構成しうる配列は確認されなかった。

遺物（図版6-4 第38・39図）

遺物は散在する形で見られたので、一括遺物として取り扱った。

1は口縁部を直口気味に開く甕である。最大径を胴部上位に有しているが、底部については欠損しているため不明である。器面調整は外面の口縁部から肩部にかけて縦方向のハケ目を施し、胴部には粗いタタキ目を施している。内面には全面ハケ目を施している。胎土には砂粒を含み焼成は良い。

2は甕の破片で胴部以下を欠いている。口縁部は「く」字状に開き、やや外反気味に口唇部へと続いている。胴部の張りは少なく長胴となり、底部は丸底になるものと思われる。器面調整は、外面には全面にタタキ目を施し、水平もしくは右下がり気味の方向である。また、口縁部においてはタタキ目の後にハケ目を施している。内面は頸部以下に器面剝離が見られるが、全面にハケ目調整を施したものと思われる。胎土には砂粒を含み、焼成は比較的良好いようだ。

3は脚台である。上部を欠いているが甕になると思われる。裾部を大きく広げ、内面には蜘蛛巣状のハケ目を施している。外面にもハケ目を施している。胎土には砂粒を含んでいるが焼成が良く堅く焼き上がっている。

4は、甕棺の底部である。上部は欠いているが、底部の状態から黒髪式土器である。底部はわずかに上げ底となっていて、器壁が厚い。器面調整は外面にハケ目を施していて、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を含み焼成も良くない。

5は甕棺の底部である。胴部以上を欠いているため規模については不明。器壁が厚く、底部も脚台となり厚く作られている。器面調整は全面にわたりナデ調整を行なっている。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。

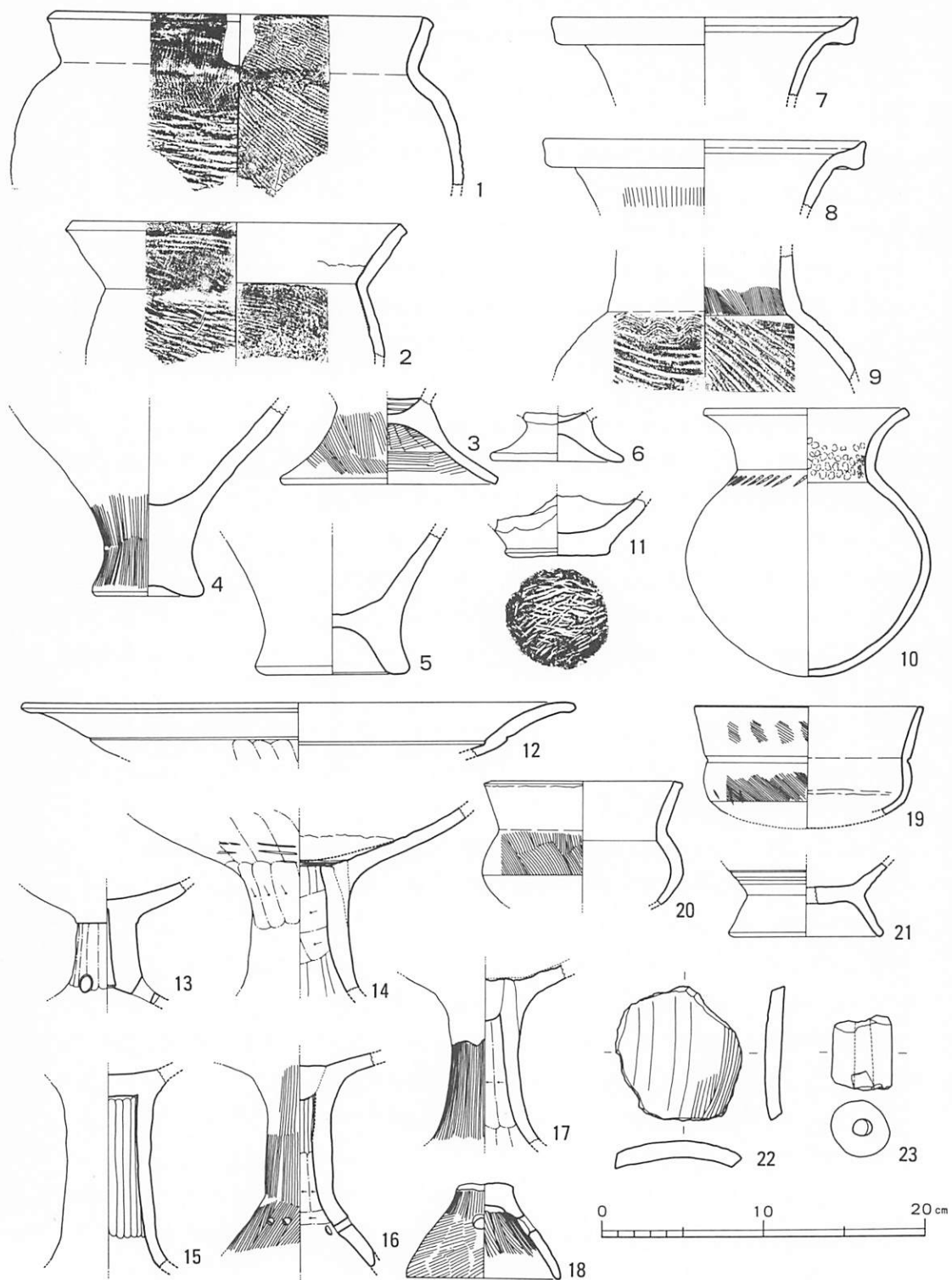
6は土師器の脚台である。小型の脚台で上部を欠いている。脚部にはヘラ研磨を行ない、内面にはナデ調整を施している。胎土にはあまり砂粒を含んでおらず、焼成も良い。

7は複合口縁をもつ壺である。口縁部のみの破片である。複合部は素文で、器面は全面ナデ調整を施している。胎土には小さな砂粒を含んでいるが、焼成は良い。

8は、複合口縁の破片である。複合部分はわずかに中凹になっていて、全面ナデ調整である。頸部においては、ハケ目を残している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。

9は口縁部と底部を欠いた壺である。頸部には櫛描波状文をめぐらしているが、文様は粗末である。胴部には大きなタタキ目をわずかに右下がりに施し、内面には非常に粗いハケ目を施している。また、頸部内面には細かなハケ目も残している。胎土には砂粒を含んでいるが焼成は良い。

10は壺である。口縁部は大きく開き、頸部には刻目をめぐらし、工具にヘラを使用している。胴部は球状を呈し、底部はわずかに小さな平底となっている。頸部内面では集中して器面の剝離が見



第 38 図 第 2 トレンチ出土遺物実測図

れる。器面調整は全面ナデ調整を施して、胎土には砂粒を含んで、焼成はあまり良くない。

11は土師器の平底である。底面は正円にならず、わずかに歪んでいる。この面にヘラ状工具による刻目が施されている。器面調整は全面ナデ調整を行なっていて、胎土もきめ細かな粘土を使用し、焼成もきわめて良好である。

12は高坏で、脚部と坏部下位を欠いている。口縁部は長く、胴部は浅くなるものである。器面調整は外面口縁部ではナデ調整、胴部にはヘラケズリを施し、内面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成もあまり良くない。

13は高坏で坏部と脚裾部を欠いている。脚柱状部は短かく、裾部は大きく開いている。また、柱状部内面は孔が狭く、裾部には3個の円孔を配している。器面調整は、坏部は全面ナデ調整で柱状部外面は縦方向のヘラケズリ、内面も横方向のヘラケズリを施している。胎土には砂粒をわずかに含んでいて、焼成は良い。

14は大型の高坏で口縁部と脚部を欠いている。さらに、坏部の底は器面剝離が著しく、脚部との接合に用いた粘土栓も欠いている。特に脚部との接合に際し、柱状をした脚の周囲に粘土を貼り付け補強しつつ坏部を付しているのである。器面調整としては全面ヘラケズリを行なっているが、坏部外面の一部にタタキ目を残している。胎土には砂粒を含んでいるが、焼成は良い。

15は高坏で、坏部と脚裾部を欠いている。柱状部は太く長い。坏部との接合には粘土栓を入れ脚部側から表面が平坦になるよう調整を施している。器面は全面ナデ調整で、内面柱状部にはヘラ状工具による縦方向のナデ調整を行なっている。裾部における孔穴の有無については不明である。

胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良く堅く焼き締まっている。

16は高坏で坏部と脚裾部を欠いている。柱状部は細く長い。裾部は大きく開き、中位には2個の孔を3箇所配している。柱状部内面は狭く計測することが困難である。坏部との接合面には粘土栓をつめている。器面調整は柱状部外面ではハケ目を施し、内面にはヘラケズリを見ることができ

る。

17も高坏で、坏部と脚裾部を欠いている。柱状部は細くて長い。坏部と脚部には粘土栓をつめており、脚柱状部にも粘土を貼り、坏部への曲線を描いている。器面調整として外面柱状部にはハケ目を施し、内面にはヘラケズリによって脚部器壁を薄くしている。胎土には砂粒を含み、焼成もあまり良くない。そのため坏部内面の器壁の剝離が著しい。

18は土師器の脚台である。上部は接合くびれ部で欠いている。脚の裾は内湾気味に広がり、裾上位には孔を3個配しているが正しく配されていない。器面調整は外面においてはハケ目を施しているが、中位以下には粗いハケ目を見ることができる。内面にもハケ目を施している。胎土には小さな砂粒を含み、焼成は良い。

19は、口径14cmを測る鉢で底部を欠いている。頸部には凹線をめぐらし、口縁部は直口している。器面調整は、外面では口縁部と胴部にはハケ目を施した後ナデ消していて、内面では全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

20は、底部を欠いた鉢である。口縁部はわずかに開いて直口している。胴部は浅く「く」字状に曲っているため中位に稜線を描いている。器面調整は外面口縁部ではヨコナデを、肩部にはハケ目

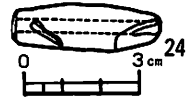
を施し、ハケ目の下端部を消すように胴部下位においてヨコナデを施している。ナデ調整に際しては水分を多く含ませて行っており、指紋を部分的に残している。内面は全面ナデ調整を行なっている。胎土には砂粒を含み、焼成は良く堅く仕上がっている。

21は高台付の埴で、口縁部を欠いている。口縁部は直線的に開き、高台も同じく直線的に広がっている。器面は全面クロ仕上げで、ナデの痕を残している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

22は土器片加工品の可能性が強い。周辺を調整しメンコ状を呈している。さらに剝離面は丸くなっている。

23は大型の土鍾である。端部の一方を欠いているため長さは不明だが、円筒形をなしている。断面は不正形で長径3.7cm、短径3.4cmを測り、中心に直径1.2cmの孔を穿っている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

24は土鍾である。長さ3.9cm、直径1.2cm、重さ4.2gを測る。中心部には直径3mmの孔を穿っている。胎土はきめ細かな粘土で、焼成も良い。



第39図 第2トレンチ出土
遺物実測図

6 第3～第5トレンチ (図版5 第40・41図)

学校敷地西側は大きく斜面を形成している。過去にはこの斜面に学校用の畑が作られていたとのことであるが、今では荒地となっている。ここに3～5トレンチを設定した。その結果、学校をとりかこむように溝がめぐっていることが確認された。なお、4、5トレンチは花籠組のユンボによって掘削を手伝っていただいた。

第3トレンチ (図版3-1)

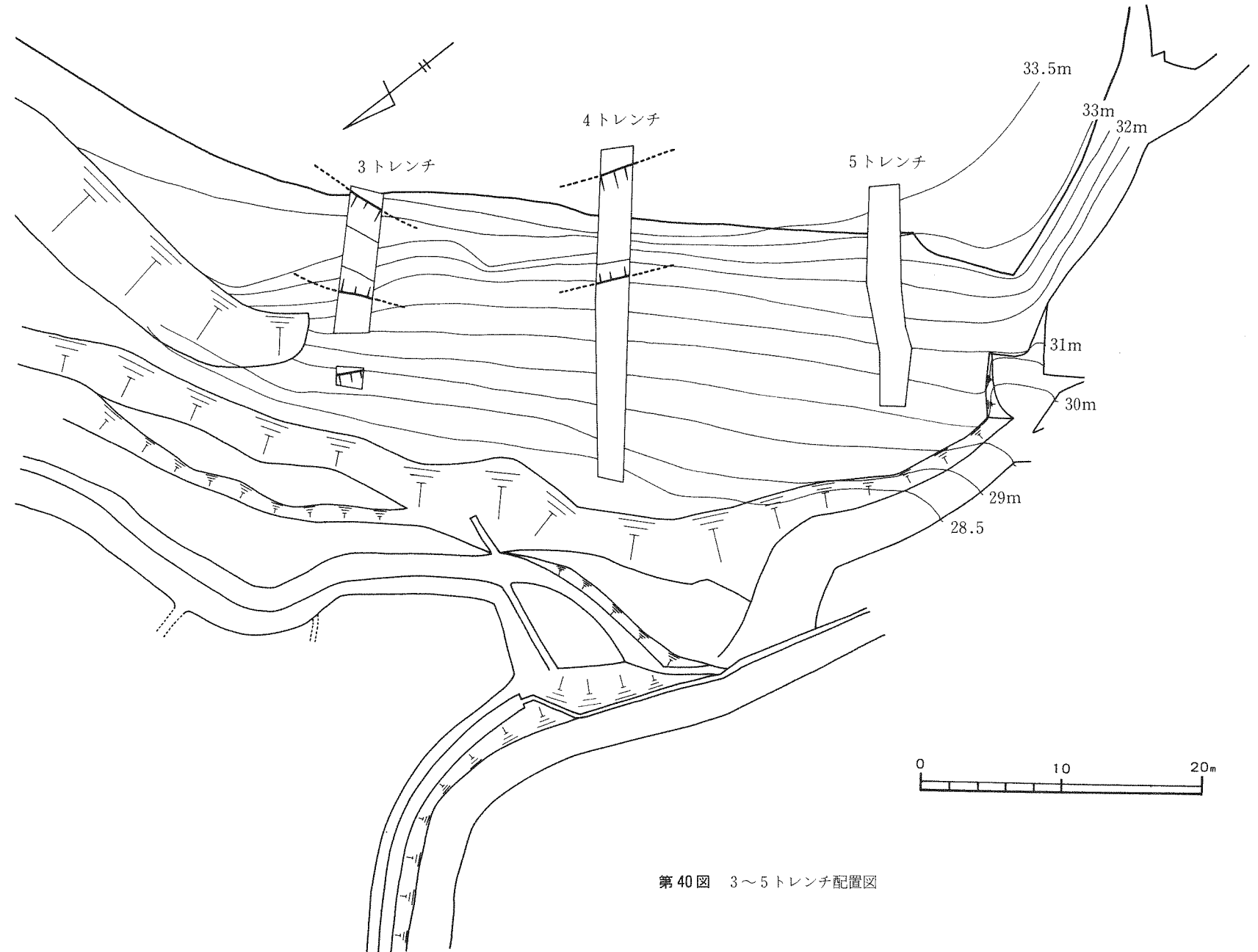
長さ9mのトレンチ内に、逆台形の溝を観察することができる。上部幅は不明であるが、現状では7.2m、下部幅3.3mを測る。深さは地表から4.3mを測るが、溝上部が確認されていないので、それより少なくなるものと思われる。また、溝の東側壁面中位には一段を有している。

溝埋土中から、少量の遺物が出土しているが、溝の時期を断定するには至っていない。

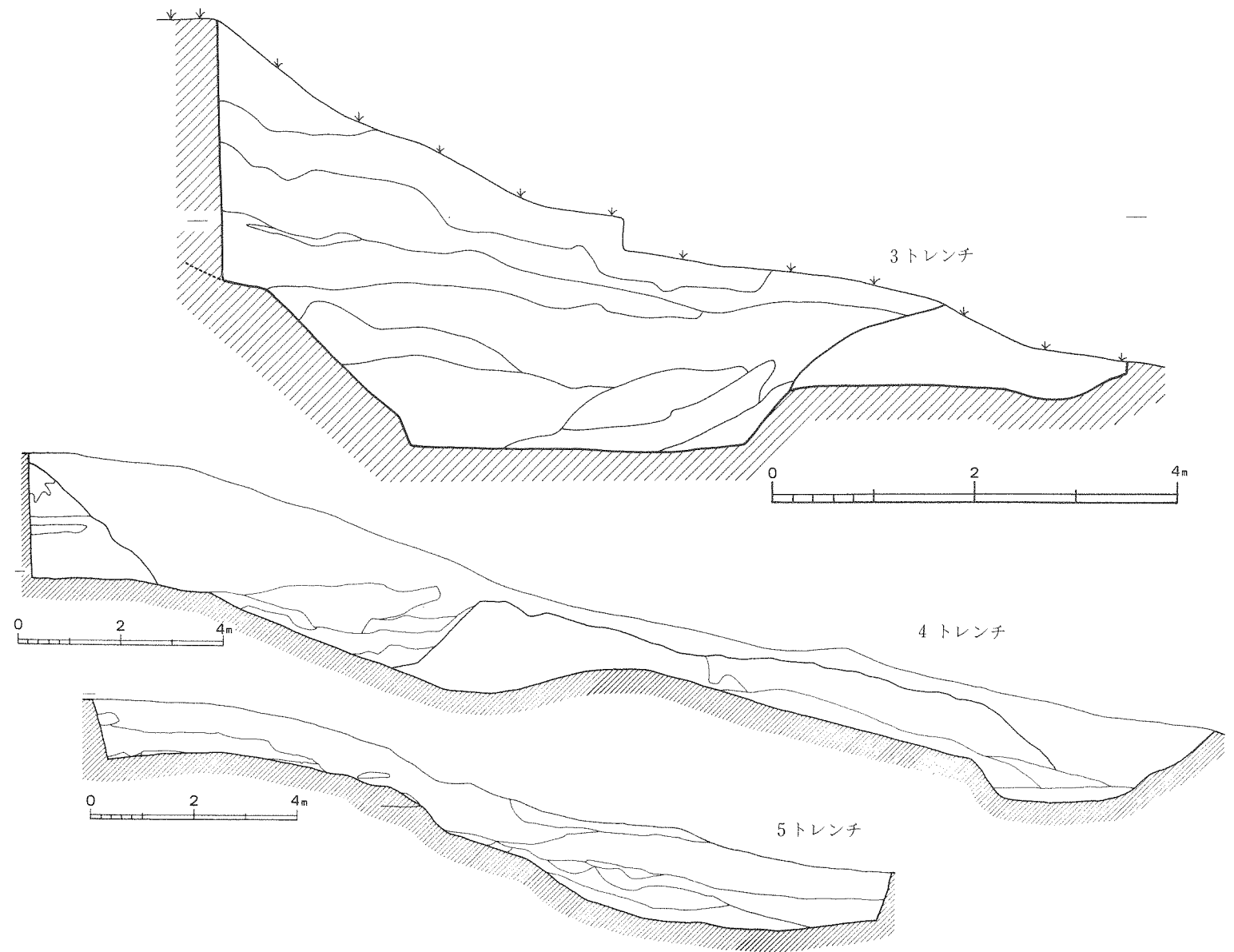
遺物 (第42図)

1は高坏の脚部で、坏部を欠く。裾端部径は12.6cm、現高7.1cmを測る。裾部に4個の円孔を穿っているが、対象位置から若干ずれている。外面はハケ目のあと柱状部はヘラ研磨、裾部ではナデを行なっている。内面は柱状部と裾部の境目に稜ができており柱状部がナデ、裾部がハケ目調整である。外面にススが付着するが、これは坏部が欠落した後に受けた火熱によるものである。

2は甕の底部で、所謂砂付土器である。砂の付着状況から考えると、端部付近はナデられて砂粒が、ナデられる前は脚部内面の全面に砂粒が付着し、内面にはコゲツキによる変色が底部をとりまく形で見られる。



第40図 3～5 トレンチ配置図



第41図 3～5 トレンチ断面図

3は円形の土器片で、所謂土器片加工品メンコである可能性が考えられる。方保田東原遺跡においては、これまで土器片加工品は検出されていないので断定はできないが、周辺の割れ具合は小刻みであり、少しずつ打ち欠いて円形に近付けたもののようと思われる。周辺を研磨した痕跡は見られない。大きさは3.5cm×3.9cmである。内外面ともにハケ目が見られる。

4は3と同じく、土器片加工品の可能性がある。明らかに周辺を打ち欠いて調整している。6.6cm×5.6cmの大きさである。ただ、内面に指頭痕が多数残っているので、壺の底部の可能性もあり、底部であれば、底部のみ抜けた状態で残ったとも考えられる。

第4トレンチ（図版5-2、第41図-2）

3トレンチの南側16m離れて、4トレンチを設定した。長さ約24mのトレンチに3トレンチで見られた溝が検出された。

溝の上部層8.8mを測り、上部両端の比高差は2.6m。溝底までは3.9mを測る。

東側壁面は中位に幅1mの段を有し、3トレンチで見られたものと同じである。溝の底部はいくぶんV字形に近く、3トレンチで見られた水平とは多少異なっている。遺物の出土は少ない。

第5トレンチ（第41図-3）

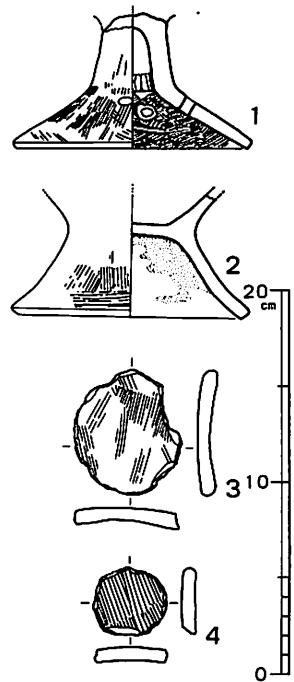
4トレンチの南側に設定したトレンチである。

土層断面には、3・4トレンチで見られる溝は検出されなかった。

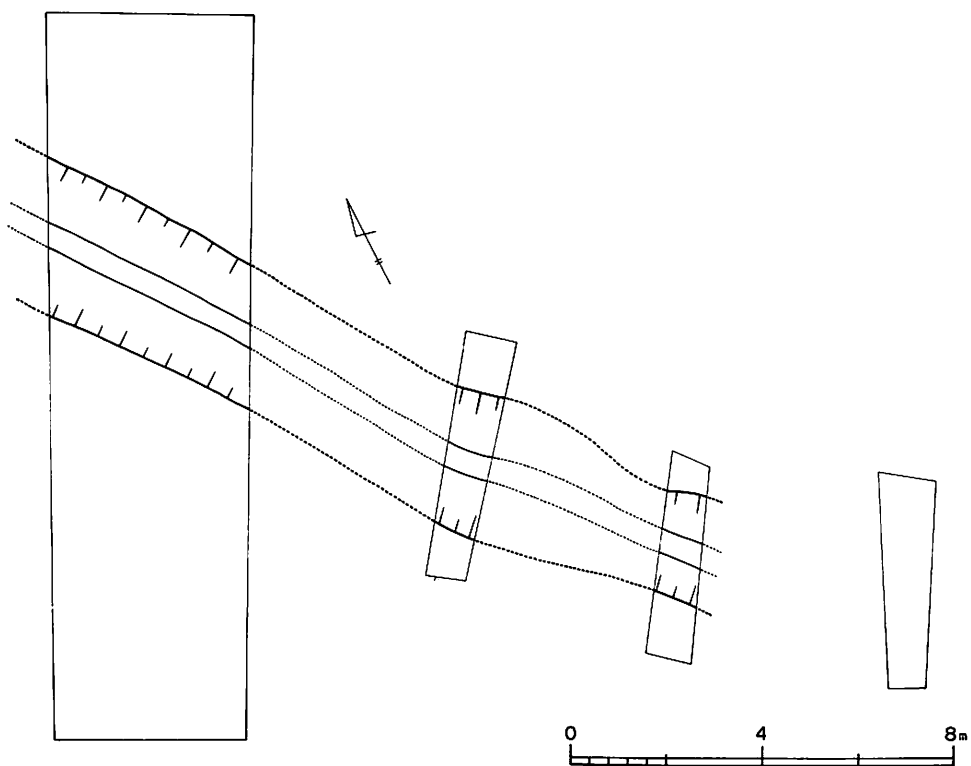
以上のことから、3・4トレンチで検出された溝は5トレンチの地点では見られず、第40図に示すように南東方向へ走るものと考えられた。さらに、溝の現長は20mを測ることができ、現在の台地端部をとりかこむ形で走っているものと推察された。

溝の構造としては、東側壁面が高く、西側ではわずかに高くなっている。

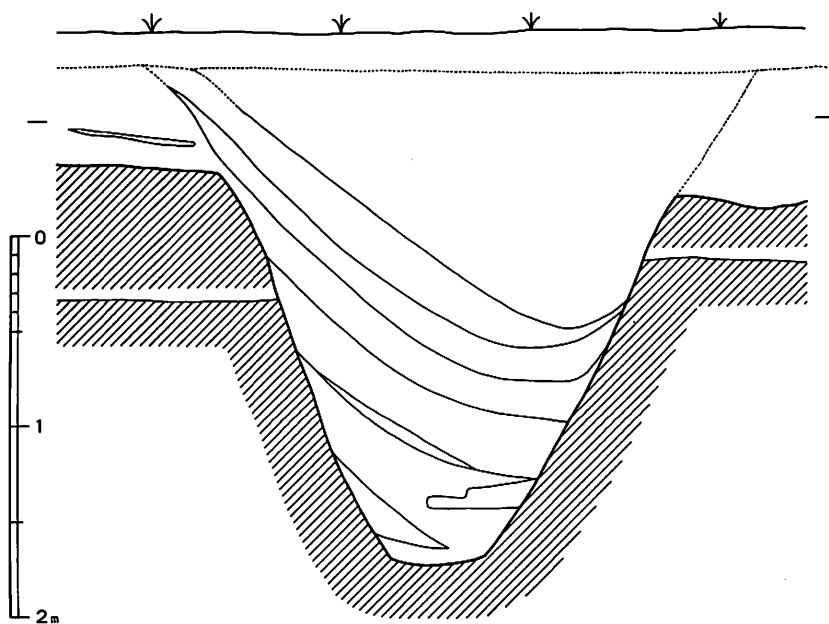
古老の話によれば、校舎西側には土手が在ったが、これらはいつの頃か壊され平坦になってしまったとのことであった。以上のことから考えると、溝の手前に土塁が存在した可能性が強く、方保田城関係の遺構である可能性は非常に高くなるものとする。いずれにしろ、今となっては何ら断定することはできない。



第42図 3トレンチ出土
遺物実測図



第43図 6トレンチ配置図



第44図 6トレンチ断面図

7 第6トレンチ (図版5-3 第43・44図)

校舎解体後、このトレンチを設定した。東区と西区の間に在るが、ここにおいてはV字溝を検出することができた。鋭く掘り込まれたこの溝は、ほぼ南北方向に向って走っており、南側へ3本の追跡トレンチを入れた。その結果、南側へ16mは伸びることが確認されたが、それ以外では確認することができなかった。溝の掘り込みは明確で、上部幅3.2m、下部幅0.5m、深さ2.6mを測る。

土層堆積状態は、南側から主として土砂の流入が見られ、南側には土塁が存在したとも考えられる。遺物の出土は無いが、方保田城に関わる溝であろうと考えられた。

第4章 ま と め

この遺跡は昭和44年の調査において弥生時代中期後半の甕棺群^{註1}および祭祀遺構^{註2}が確認されている。さらに、中世方保田城の所在地とも伝えられているところであった。

今回の調査は校舎改築に伴うもので、旧校舎を解体した後、新校舎をほぼ同位置に建てる計画であったため、遺構の存在はあまり期待していなかったのである。

特に校舎建築に関しては、敷地南側のグラウンドは昭和31年当時の図面でも変わっておらず、校舎の配置は基本的に現在と同じであることが判る。

さらに、学校創立が明治33年(1900)10月で、その間数度の校舎改築を行っており、戦後でも昭和31年と44年の2度行われ、今回が3度目の改築となっていたのであった。

しかし、調査の結果、弥生時代終末期の住居跡7軒、古墳時代前期の箱式石棺2基、古代祭祀遺構、さらに中世城関連のV字溝と礫群を検出することができたのである。

この他にも小学校に保管されていた資料として、方格規矩鏡(現在山鹿市立博物館に展示中)、弥生時代終末期の土器・須恵器等が敷地内から出土したとのことであった。

須恵器に関しては、グラウンド整地に際して古墳が壊され、中から出土したとの話が伝わっている。

これに関連して、大正年間に書かれた「大道村郷土誌」(大道小学校保管)の中に次の文章が記載されている。

「1. 大道村大字方保田なる本村小学校(現大道小学校)の西南に位して該地の墓所あり、墓の上部に瓢形古墳あり、是れを称して経塚となす……」恐らくこの古墳のことと思われた。

このように遺跡は複合遺跡としての性格をもっていることが明らかとなった。

方保田東原遺跡との関連を当然考えなければならないが、弥生時代の遺構に関して言えば、こちらでは甕棺の出土が見られるが、方保田東原遺跡ではまったく出土していない。さらに、住居跡から見れば、大道小学校では方保田東原遺跡のような密集は見られず、存在するが遺跡全体に広がっているといった感じはなかった。ただし、中世城関連遺構や校舎建築によって破壊された可能性は

十分考えることができる。

弥生時代終末期から古墳時代前期における両方の遺跡の関係を考えると、ほぼ中間地点と言える山鹿市農協大道支所（旧大道村役場跡）から昭和56年の調査で溝状遺構が東西に延びることが確認されているところから、両者の間に遺跡の境界を見出すことは不可能に近く、この時代に限って言えば同一遺跡の可能性が極めて強いものと言えよう。

むろん、遺跡の中心は方保田東原遺跡の方で、大道小学校はその西端部に位置しているものと考えられた。

註1 限昭志「熊本県山鹿市大道小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第69巻1号 1983

註2 『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会 1978

版 图



1 遺跡遠景



北 区

2 1、2号住居跡



3 3～5号住居跡



1 貯蔵穴

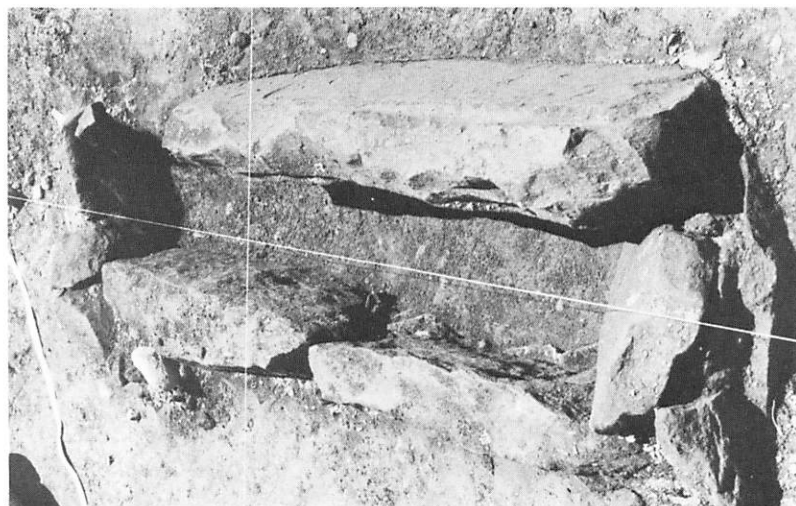


東 区

2 C集石



3 D集石



1 号石棺

1

鉄剣出土状況

2



鉄斧出土状況

3





1 2号石棺



2 祭祀遺物



3 拡大



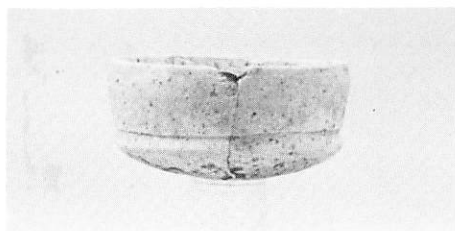
1 3トレンチ



2 4トレンチ



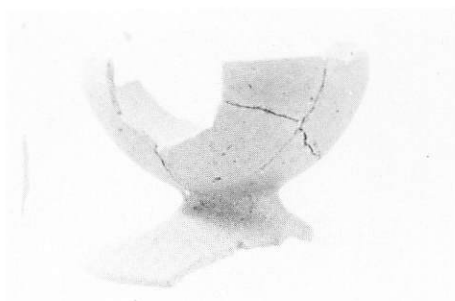
3 6トレンチ



北区出土

4住出土

1



2トレ出土

4住出土

2



西区出土

5住出土

3

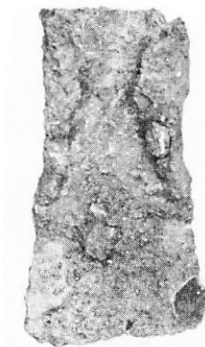


4



5

1号石棺内出土鉄器



6



7



8

出土遺物

図版 7

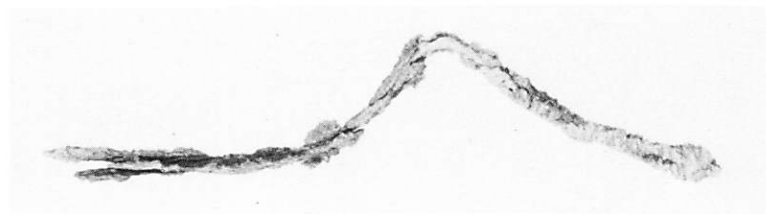
1号石棺内出土

鉄剣

1



2



3



4



5



1号石棺内出土鉄剣

山鹿市立博物館調査報告書 3・4 集

方保田東原遺跡(2)

昭和59年 3 月31日

編 集 山 鹿 市 立 博 物 館
〒861-05熊本県山鹿市大字鍋田2085

発 行 山 鹿 市 教 育 委 員 会
〒861-05熊本県山鹿市掘明町1026-2

印 刷 下 田 印 刷
熊本支店 熊本市迎町1丁目4-16

正誤表

『方保田東原遺跡(2)』 山鹿市立博物館調査報告書 第3集 熊本県山鹿市教育委員会1984年

頁	行	誤	正
56	2	第72～74図	第73～74図
56	3	円塗りの	丹塗りの
図版6		1号溝1～2号土壙墓	1号溝1、3号土壙墓

『大道小学校校庭遺跡』 山鹿市立博物館調査報告書 第4集 熊本県山鹿市教育委員会1984年

頁	行	誤	正
20	16	復元口径15.2m	復元口径15.2cm
20	31	復元口径29.8m	復元口径29.8cm
35	5	3.5cm×3.9cm	6.6cm×5.6cm
35	8	6.6cm×5.6cm	3.5cm×3.9cm

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第3・4集 方保田東原遺跡(2)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第3・4集 方保田東原遺跡(2)

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日